

# 千酌条里制遺跡他発掘調査報告書

千酌地区経営体育成基盤整備事業及び  
千酌地区農業生産法人等育成緊急整備事業に伴う調査

千酌条里制遺跡  
中殿遺跡  
修理田遺跡  
地蔵前遺跡  
千酌太田遺跡

平成22(2010)年3月

松江市教育委員会  
松江市教育文化振興事業団

# 千酌条里制遺跡他発掘調査報告書

千酌地区経営体育成基盤整備事業及び  
千酌地区農業生産法人等育成緊急整備事業に伴う調査

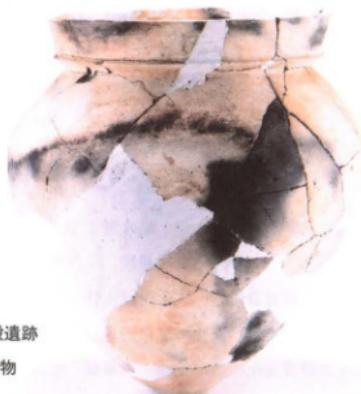
千酌条里制遺跡  
中殿遺跡  
修理田遺跡  
地蔵前遺跡  
千酌太田遺跡

平成22(2010)年3月

松江市教育委員会  
松江市教育文化振興事業団



ほ場整備前千酌航空写真（平成13年10月15日撮影）



平成20年度中殿遺跡

SX-01出土遺物

## 例　　言

1. 本書は、平成19年度から21年度にかけて財団法人松江市教育文化振興事業団が実施した、千鶴地区経営体育成基盤整備事業及び千鶴地区農業生産法人等育成緊急整備事業に伴う千鶴条里制遺跡他発掘調査報告書である。
2. 本書で報告する発掘調査は、島根県松江市土整備事務所から松江市教育委員会が依頼を受け財団法人松江市教育文化振興事業団が実施した。
3. 調査地の地番は、

千鶴条里制遺跡は、島根県松江市美保関町千鶴938、936、964-1、940、955、967、1011、1013、  
1015、1017、1064、1068、1120、1124、1128、1207、1210、1212、1222、1128-1、

中殿遺跡は、島根県松江市美保関町千鶴534、536-1、536-2、535

修理田遺跡は、島根県松江市美保関町千鶴181である。

地蔵前遺跡は、島根県松江市美保関町千鶴196である。

4. 各年度の現地調査期間は、以下のとおりである。

平成19年度調査 平成19年7月2日から平成20年3月3日まで。

平成20年度調査 平成20年5月1日から平成21年3月31日まで。

平成21年度調査 平成21年10月20日から平成21年11月19日まで。

5. 開発面積及び調査面積　　開発面積 27.3ha

平成19年度千鶴条里制遺跡他発掘調査 557.2m<sup>2</sup>

平成19年度中殿遺跡調査 143.8m<sup>2</sup>

平成20年度中殿遺跡調査 563.5m<sup>2</sup>

平成20年度修理田遺跡調査 202.9m<sup>2</sup>

平成21年度地蔵前遺跡調査 30.0m<sup>2</sup>

6. 調査組織　（調査主体者）　松江市教育委員会　教育長　　福島　律子  
　　文化財課長　吉岡　弘行  
　　調査係長　飯塚　康行  
　　主任　　後藤　哲男  
　　主任　　川上　昭一

（調査指導）　独立大学法人島根大学　総合理工学部

准教授　　酒井　哲弥

島根県教育委員会　文化財課主任　東森　晋（平成19～20年度）

島根県教育委員会　文化財課企画員　池淵　俊一（平成21年度）

（実施者）　松江市教育文化振興事業団　理事長　松浦　正敬

　　事務局長　松浦　克司

　　埋蔵文化財課長　廣江　眞二

課長補佐 錦織 慶樹  
主任 門脇 誠也  
(調査担当者) 埋蔵文化財課 課長補佐 錦織 慶樹  
(調査補助員) 癸託員 三代 正裕 (平成19年度、20年度)  
癸託員 大西 総司 (平成21年度)

7. 調査にあたっては、千駄地区土地改良区の協力をいただいた。

8. 本書の執筆、編集には次のものが携わった。

出土遺物の実測 : 大西 総司、錦織 慶樹、宇津 直樹、廣濱 貴子、善家 幸子、  
飯野 正子、石川 崇

図面の作成、拓本 : 三代 正裕、大西 総司、飯野 正子、善家 幸子、金森 まゆみ、  
編集、執筆 : 錦織 慶樹、大西 総司

9. 図中の矢印は、公共座標北を示し、座標値は世界測地系に準拠した公共座標第III系の値である。

また、レベル値は、海拔標高を示す。

10. 本文、図中では、S I : 竪穴住居跡 S B : 据立柱建物跡 P : 柱穴 SD : 溝 SK : 土坑  
SX : 不明遺構と略称した。

11. 出土遺物、実測図および写真などの資料は、松江市教育委員会において保管している。



第1図 島根県・松江市位置図

# 目 次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の位置と環境	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3章 各遺跡の調査	
第1節 平成19年度千酌条里制遺跡他の調査	6
1. 調査の方法	6
2. 各調査区の調査	6
3. 遺 物	18
4. まとめ	20
第2節 平成19・20年度中殿遺跡の調査	24
1. 平成19年度中殿遺跡の調査	24
(ア) 調査の方法	24
(イ) 層 序	24
(ウ) 遺 物	25
2. 平成20年度中殿遺跡の調査	31
(ア) 調査の方法	31
(イ) 遺 構	31
(ウ) 層 序	34
(エ) 遺 物	39
4. まとめ	52
第3節 平成20年度修理田遺跡の調査	53
1. 調査の方法	53
2. 層 序	53
3. 遺 物	55
4. まとめ	59
第4節 平成21年度地蔵前遺跡の調査	61
1. 調査の方法	61
2. 層 序	61
3. 遺 物	61
4. まとめ	61
第5節 附編 千酌太田遺跡発掘調査報告	63
第4章 特論 渡邊正巳（文化財調査コンサルタント株式会社）	81
1. 千酌条里制遺跡他発掘調査に伴う自然科学分析	81
2. 中殿遺跡発掘調査に伴う自然科学分析	90
3. 修理田遺跡発掘調査に伴う自然科学分析	92
第5章 結 語	99

## 挿 図 目 次

第1図 島根県松江市位置図	
第2図 千鈞遺跡分布図	5
第3図 調査区配置図	7
第4図 第1調査区暗渠検出平面図	12
第5図 第1調査区土層断面図	12
第6図 第2調査区土層断面図	12
第7図 第3調査区土層断面図	12
第8図 第4調査区土層断面図	12
第9図 第5調査区上暗渠検出平面図	13
第10図 第5調査区土層断面図	13
第11図 第6調査区上層断面図	13
第12図 第7調査区上層断面図	13
第13図 第8調査区上層断面図	14
第14図 第9調査区土層断面図	14
第15図 第10調査区調査範囲土層断面図	15
第16図 第11調査区土層断面図	15
第17図 第12調査区土層断面図	16
第18図 第13調査区土層断面図	16
第19図 第14調査区土層断面図	16
第20図 第15調査区土層断面図	16
第21図 第16調査区土層断面図	17
第22図 第17調査区上層断面図	17
第23図 第18調査区土層断面図	17
第24図 第19調査区土層断面図	17
第25図 第20調査区土層断面図	17
第26図 第1・2・5・9調査区の遺物	21
第27図 第10調査区出土の遺物	21～23
第28図 第12・14・16・19・20調査区の遺物	23
第29図 平成19年度中殿遺跡調査区設定図	24
第30図 半成19年度中殿遺跡調査区土層断面図	25
第31図 中殿1～4区出土遺物	27
第32図 平成20年度中殿遺跡調査成果	28～29
第33図 SB-01遺構図	32
第34図 SX-01平面図	32
第35図 SX-01遺物出土状況	32
第36図 南-A-1～南-A-3調査区土層断面図	34
第37図 南A-4調査区土層断面図	35
第38図 南A-1調査区地山確認トレンチ土層断面図	35
第39図 南-B調査区土層断面図	36
第40図 南-C調査区土層断面図	36
第41図 南-C拡張区土層断面図	36
第42図 南-C小拡張区土層断面図	37
第43図 南B-C間拡張区土層断面図	37
第44図 SB-01関連遺物	39
第45図 SX-01関連遺物南 C拡張区	42～46
第46図 SX-01周辺の遺物	48
第47図 その他の調査区の出土遺物	48
第48図 南-A-3南-A-4調査区の遺物	50～51
第49図 東調査区土層断面図	53
第50図 東1区の出土遺物	56～58
第51図 東2区の出土遺物	59
第52図 東3区の出土遺物	59
第53図 地域前遺跡調査区位置図	62
第54図 地藏前遺跡試掘調査土層断面図	62
第55図 千鈞太田遺跡位置図(1/1000)	65
第56図 千鈞太田遺跡遺構配置図(1/400)	66
第57図 積穴住居跡(S101)実測図(1/80)	67
第58図 積穴住居跡遺物出土状況図	68
第59図 積穴住居跡出土遺物実測図(1/3, 9, 10は1/1)	69
第60図 低湿地調査区土層図(1/40)	71
第61図 低湿地調査区出土遺物実測図(1/3)	73
第62図 千鈞小字図	100

## 写 真 図 版 目 次

- 卷頭カラー ほ場整備前千酌航空写真(平成13年10月15日撮影)、平成20年度中殿遺跡SX-01出土遺物
- 図版1 立会遺構検出状況、調査風景、砂礫溝検出状況
- 図版2 SI01(西から)、SI01(北西から)
- 図版3 SI01 P5(特殊ピット)土層、SI01 P5(特殊ピット)完掘、SI01 東外周溝(北から)
- 図版4 低湿地遺物包含層立会、低湿地遺物包含層
- 図版5 SI01出土遺物(1)、SI01出土遺物(2)低湿地遺物包含層立会、低湿地遺物包含層
- 図版6 低湿地調査区出土遺物(1)、低湿地調査区出土遺物(2)
- 図版7 木質遺物切片顕微鏡写真1
- 図版8 木質遺物切片顕微鏡写真2
- 図版9 種実・葉写真
- 図版10 岩山古墳群から見る千酌の水田地帯、第1調査区暗渠施設検出状況(東から西を撮影)  
第5調査区暗渠施設検出作業風景(南から北を撮影)
- 図版11 第10調査区(T-10-C)指導会(北西から南東を撮影)、第10調査区(T-10-A)遺物出土状況、  
第10調査区(T-10-C)完掘状況
- 図版12 平成19年度中殿遺跡中殿4区完掘状況(南から北を撮影)、平成19年度中殿遺跡遺物出土  
状況、平成20年度中殿遺跡調査風景
- 図版13 平成20年度中殿遺跡南-A-2区検出の杭列(西から東を撮影)、平成20年度中殿遺跡  
南-A-2~南-A-3区検出の掘立柱建物SB-01(東から西を撮影)、SB-01完掘状況(北東から  
南西を撮影)
- 図版14 SB-01 P-4半掘状況、平成20年度中殿遺跡 南-C調査区 SX-01完掘(南から北を撮影)、  
南-C小拵張区 完掘状況(西から東を撮影)
- 図版15 SX-01遺物出土状況、南-A-1~南-A-2区地山確認トレンチ完掘状況(北東から南西を撮影)、  
平成20年度修理田遺跡の調査 東1区調査風景(東から西を撮影)
- 図版16 平成20年度修理田遺跡の調査 東1区遺物出土状況、東1区完掘状況、東2区遺物出土  
状況
- 図版17 東2区完掘状況(東から西を撮影)、東3区完掘状況(西から東を撮影)、東調査区完掘後  
遠景
- 図版18 T-14-B現代の暗渠検出写真、ウラジロを取り除いた後の木組
- 図版19 出土遺物写真1~41
- 図版20 出土遺物写真42~78
- 図版21 出土遺物写真79~119
- 図版22 出土遺物写真120~153
- 図版23 出土遺物写真154~193
- 図版24 出土遺物写真194~233
- 図版25 出土遺物写真234~254
- 図版26 出土遺物写真255~278
- 図版27 出土遺物写真279~302

## 第1章 調査に至る経緯

松江市美保関町千鈞地区の基盤整備は未整備であることから1区画が2～10a程度と狭小で、農道も1～3m幅しかない。このため農業機械の大型化による省力化、農地流動化が阻害させている。従来から農業用水が不足し、土水路あるいは田越しにより水田へのかんがいや排水をしているが、土水路のため漏水が著しく維持管理労働力の過剰投下となっている。また、排水も不良であり、山からの湧水による湿田のため農地の汎用化が困難な状況である。

これに対応するため、島根県松江県土整備事務所では、農業基盤整備事業により農業機械の大型化に対応した区画、農道、乾田化及び水管理の省力化、農地利用の集積と集団化を実現し、営農組織による安定した農業経営の推進を図ることとした。

この事業に先立ち、平成18年6月30日に島根県松江県土整備事務所から当市教育委員会宛てに事業予定地内の埋蔵文化財の分布・試掘調査依頼書が提出された。事業予定地内の遺跡を精査したところ、現在の水田区画そのものが千鈞条里制遺跡として周知されており、これ以外にも隣接地を含めて6箇所の遺跡が周知されていた。また、これらの遺跡以外にも遺跡が発見される可能性もあり、ひとまず遺跡の有無確認のための試掘調査と千鈞条里制遺跡の本発掘調査を実施することとなった。

第1表 試掘調査経過一覧

調査名	調査期間	調査対象地	調査内容	トレンチ本数	トレンチ面積(m <sup>2</sup> )	備考
第1次試掘調査	平成18年7月3日～7月5日	中央工区	有無確認	4	18	
		西側工区	有無確認	4	18	
第2次試掘調査	平成18年10月2日～10月12日	西側工区	有無確認	7	31.5	
		北側工区	有無・範囲確認	3	15	
第3次試掘調査	平成19年7月30日	中央工区	有無確認	19	85.5	
第4次試掘調査	平成19年10月31日～11月8日	北側工区	有無確認	2	9	
		東側工区	有無確認	13	58.5	
第5次試掘調査	平成20年2月28日～3月13日	中央工区	範囲確認	12	54	中殿遺跡
		東側工区	範囲確認	8	36	修理田遺跡、寺垣遺跡、地蔵前遺跡
合計				72	325.5	

### 【試掘調査】

試掘調査は範囲が広範なことから事業工区と同様に中央工区、北側工区、西側工区、東側工区の4区画に分けて実施した。中央工区の調査では1.5m×3mを基本とする遺跡の有無確認トレンチ23本を設定し、このうち11本から遺物の出土を確認した。このため更に範囲確認トレンチ12本を設定して遺跡の範囲を確認し、『中殿遺跡』として文化財保護法上の手続きを取った。

西側工区の調査では11本の有無確認トレンチを設定している。このうち3本のトレンチから遺物の

細片が出土しているが、礫層からの出土であり、流れ込みによるものと判断した。

北側工区の調査は、千駄条里制遺跡の本発掘調査が周辺部で実施されることから3本の有無確認トレンチの設定に留めた。調査により、時期・性格共に不明の溝1本、摩滅した土師器の小片3点を採取したことから2本のトレンチを追加設定した。本発掘調査の結果とも考え合わせたが、遺跡と判断できるものではなかった。

東側工区の調査では13本の有無確認トレンチを設定している。このうち4本から遺物の出土を確認した。このため更に範囲確認トレンチ8本を設定して遺跡の範囲を確定し、『修理田遺跡』『寺垣遺跡』『地蔵前遺跡』として文化財保護法上の手続きを取った。

#### 【本調査】第3章 第1節～第4節

本発掘調査は千駄条里制遺跡、修理田遺跡、地蔵前遺跡、中殿遺跡で実施している。事業予定地内で寺垣遺跡も確認しているが、工事計画を変更していただき現状保存となった。

千駄条里制遺跡（第3章）の調査は条里制遺跡であることから条里の区画を確認するため水田の畦などに19個所の調査区を設定し7月2日から取り掛かった。必要に応じて随時調査区の拡張や増設を行い、最終的には20個所、557m<sup>2</sup>について調査を実施している。

中殿遺跡（第3章 第2節）の調査は平成19年12月20日から取り掛かり、707m<sup>2</sup>について調査を実施している。

修理田遺跡（第3章 第3節）の調査は平成20年5月1日から取り掛かり、209m<sup>2</sup>について調査を実施している。

地蔵前遺跡（第3章 第4節）の調査は平成21年10月20日から取り掛かり、30m<sup>2</sup>について調査を実施している。

第2表 千駄地区経営体育成基盤整備事業等に伴う本発掘調査年次工程

遺跡名	発見の経緯	調査行程				備考
		平成18年度	平成19年度	平成20年度	平成21年度	
千駄条里制遺跡	周知	試掘調査	本調査		報告書作成	
中殿遺跡	中央工区の試掘調査		試掘調査	本調査	報告書作成	
修理田遺跡	東側工区の試掘調査 (周知の範囲拡大)		試掘調査	本調査	報告書作成	
地蔵前遺跡	東側工区の試掘調査		試掘調査		本調査 報告書作成	
千駄太田遺跡	西側工区で不時発見		本調査		報告書作成	
寺垣遺跡	東側工区の試掘調査					現地保存

#### 【立会調査】第3章 第5節

西側工区については遺跡こそ確認できなかったが、遺物が出土していることから工事の掘削時に市文化財課職員による工事立会を実施している。丘陵付近の田面掘り下げ時に立会を実施していたところ、竪穴住居跡を検出したため、平成19年3月6日から3月9日の間で緊急調査を実施した。

## 第2章 遺跡の位置と環境（第2図 千酌遺跡分布図）

### 第1節 地理的環境

本調査地は、島根県松江市美保関町千酌に所在している。この地は、島根半島の日本海側に位置し、南西側を山に囲まれ、北東には千酌湾が広がっている。当地を囲んでいる2つの山は、枕木山（標高456m）と忠山（標高290m）で、これらの山は4つの谷を形成し、それぞれの谷に流れる4河川は、この地の田畑に水を供給している。これらの川は、いずれも総延長が2km未満で短くて細いが、流れは急である。これらの川を発する山地の地質は、頁岩層と凝灰岩層で、特に頁岩層が広く分布している（註1）、発掘調査でも、調査した田の床土の下層には頁岩や凝灰岩を含んだ層が多かった。また、集落の北に所在する岩山は凝灰岩の露出したまさに岩山で、頂上部尾根には古墳が連なっていて、この岩を石室の石材に使用している。

山地の現存植生をみてみると、クロマツ林に被われていて、一部アカマツ林と落葉広葉樹林がある。『出雲國風土記』によると「千酌浜。広さ一里六十歩あり。東に松林…」とあるので、マツについては古代から続いた植生である可能性が高い。また、島根半島には竹林が少ないが、当地では確認できる。おそらく稻架用など水田耕作との関係が深いものと思われる（註2）。

### 第2節 歴史的環境（第2図 千酌遺跡分布図）

**【縄文時代】**不燃物共同処理場の建設前に近くの緩斜面で発見された5、「葉ア多遺跡」があり、平成2年度の試掘調査の結果、溝状遺構とその上面から縄文地に沈線を施した後期の土器片が出土している。また、19年度の調査で第9調査区の耕作土下約60cm、青灰色砂層中から2点の突帯紋土器（註3）が出土しているので、少なくとも縄文時代晩期には、この地で生活が営まれていたことは明らかである。

**【弥生時代】**平成19年3月、ほ場整備工事の立会調査で竪穴住居跡が1棟検出された。住居内から弥生時代後期の遺物が出土している（4、「千酌太田遺跡」）。また、この遺跡から250mを隔てた東隣の谷からも同時期の加工段が検出された（2、「中殿遺跡」）。更に、各調査区でも摩滅した中期の土器が若干出土している。

**【古墳時代】**千酌の古墳は、集落の北側の丘陵地に集中している。凝灰岩の岩盤が尾根上に露出した岩山に6、「岩山古墳群（7基）」があり道路を隔てて東側に7、「葉ア多古墳群（2基）」がある。「岩山古墳群」は、全部で7基確認されていて、その内の6基が直径10m以下の小規模な円墳で、残り1基が一辺7.6mの方墳である。いずれも埋葬施設は横穴式石室である。かなり古くから開口していたようで、遺物も不明なため築造時期はわからない。「葉ア多1号墳」は、「岩山古墳群」の東約300mの位置で、鹿島・美保関線の道路脇に所在している。「葉ア多2号墳」の第1主体部は、丘陵斜面に平行して立地し、大小の板状割石や自然石を組み合わせて築かれている。箱式石棺と竪穴式石室の折衷様式と考えられるもので、同様な例は、美保関町海崎に「海崎1号墳」や「天神社裏山古墳2号石室、3号石室」に見ることができる。「葉ア多2号墳」の築造時期は、主体部の遺物から6世紀末と考え

られる（註4）。

【奈良時代以降】『出雲國風上記』によれば、8世紀頃の千酌は、南に「手染郷」、東は「方結郷」、西は「加賀郷」と接し、当地は「千酌駅」とよばれ、隱岐に渡る公設の水駅があつたことも記されている（3、「修理山遺跡」）。駅制は、律令国家のもと、中央政府と地方を結ぶ緊密な交通・通信機関として、唐制をもとに作られた制度である。すなわち「千酌駅」は、隱岐航路の起点で船舶を繫留する港があり、同時にまた、出雲国府を陸路で結ぶ駅馬が常備されていた。更に、当地的田地は区画が狭く「条里制」の痕跡が現畦畔に残っていると言われてきた（1、「千酌条里制遺跡」）。このように、この地は律令制の痕跡を今に残している地ということができ、同時にそれは、中央集権的な国家体制の整備が、隅々にまで行き渡っていることを証明するものである。しかし、この「千酌駅」も平安時代になると「千酌郷」と改称されていて、この時代には駅の機能が無くなつたものと考えることができる。

また、寺院は、集落の中央に『出雲國風土記』にも「官社」として登場する8、「爾佐神社」が所在しており、現在でも、この神社を中心に「田植え神事」や「大祭礼」などの神事が、地元の人々の頭屋組織を通じて連綿と受け継がれている。

【中世以降】「千酌駅」が、「千酌郷」と改称されるのは平安時代からなので、中世はすでに水駅の機能はなくなつていて考えられる。しかし、この地は、港としては依然重要な位置を占めていたものと思われる。千酌は、鎌倉期には田積39町8反小（約39.5ha註5）で、守護佐々木氏の補佐役的地位の土屋六郎左衛門入道が地頭職を握っていた。この土屋氏は、出雲の地では守護佐々木氏に次ぐ勢力を持っていたことが知られていて、そのような有力武士がこの地の地頭職を握っていたと言うところに、この地の重要性を知ることができる（註6）。

時代は変わって戦国時代になると、尼子勝久と中山鹿之介らは永禄12年（1569）、水軍奈佐日本之助や隱岐為清の力を借りて尼子再興軍を起こすため、隱岐からこの地に上陸し、忠山に砦を築いた9、「忠山城跡」。この山に駐屯した期間は、決して長くはなかつたがこの期間で再興軍が集結し、毛利との戦いの火ぶたが再び切られることになる。この城跡では、現在でも数段の加工段が確認でき、石壁や軍用井戸の跡も残っているとのことである（註7）。また、焼米や陶磁器片、かわらけ片が出土したという。また、筆者も携帯基地局設置工事の事前調査を行い、削平面数段と崖際に柵列を検出した。

近世になると、この地に伊能忠敬一行が測量に訪れる。文化3年（1806）のことである。まず三種関（美保關）から隱岐に渡り、島々の測量を終えてから島根半島沿岸の測量に着手した。千酌までの測量が終了したのは、7月25日であったが、その際10、「蓮花寺（臨済宗南禅寺派1356年開基）」を宿所としている。ただし、伊能忠敬自身は、発病のため8月の初めまで松江にとどまっている。（註8）

【その他の遺跡】11、「千酌神社裏遺跡」は、遺物散布地で土師器片が採集されている。12、「千酌遺跡」は、蓮花寺の前に所在する遺物散布地であり、瓦片が確認されている。19年度の調査では、近世以降の遺物が出土しているので、詳細は不明だがこの瓦は、近世のものと思われる。爾佐神社の西、旧千酌小校庭の南に13、「千酌古墳」が所在しているが、ここでは陶質骨壺が確認されているので、中世以降の古墓と考えられる。14、爾佐神社境内古墳は、島根県の遺跡地図に「石室」「外形消滅」と記

されているが現地で確認することはできなかった。15.「千酌空畠古墓」は、島根県遺跡地図には、五輪塔と記載されているが、現地には現存していなかった。16.「爾佐神社脇遺跡」も散布地で人骨や土師器が確認されているが、詳細は不明である。17.寺垣遺跡・18.地蔵前遺跡は平成19年度の松江市教育委員会の試掘調査で、発見された遺跡である。このうちの寺垣遺跡からは、2層の遺物包含層と標高9.1m前後の深さからぼぞ穴のある建築部材が出土している。地蔵前遺跡からは、2層に及ぶ遺物包含層が確認された。近世の陶磁器片も含まれているので、近世の遺構が周辺に所在する可能性がある。19.千酌五輪塔は、集落の東の丘陵を登りかけたところに所在する。千酌の年中行事の中にこの五輪塔をお参りする儀式が組み込まれている。

(註1)『美保關町誌 上巻』第1章 美保關町の自然 第3節 美保關町の地学的自然 美保關町 昭和61年11月30日

(註2)『美保關町誌 上巻』第1章 美保關町の自然 第4節 美保關町の生物学的自然 美保關町 昭和61年11月30日

(註3)第26回 参照

(註4)石井 慎・横山 純夫「葉ア多二号墳」1992.4 美保關町教育委員会

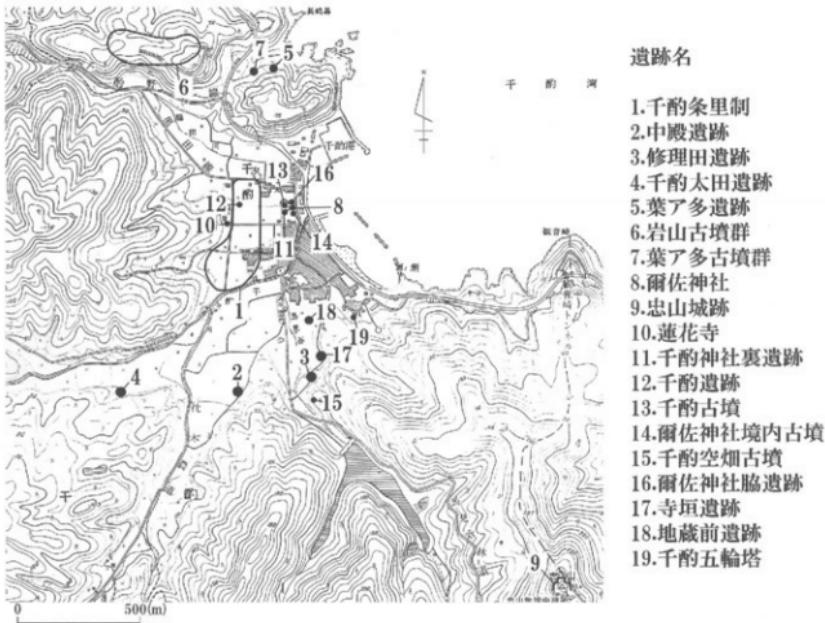
(註5)松本岩雄「美保關町誌」上巻 第1章 原始古代の美保關 第4節 古墳時代

「美保關町誌」上巻 第5章 近代の美保關 第1節 明治前期の美保關ほか1村前 昭和61.

(註6)11.30 美保關町明治8年の調査では、田地約56ha、畠地約19ha。また、今回の整備対象地は27.3ha。

(註7)『美保關町誌』上巻 第3章 中世の美保關 第7節 尼子毛利の抗争と美保關 昭和61.11.30 美保關町 (註7)に同じ

(註8)『美保關町誌』上巻 第4章 近世の美保關 第2節 村浦の史話 昭和61.11.30 美保關町



第2図 千酌遺跡分布図

## 第3章 各遺跡の調査

### 第1節 平成19年度千酌条里制遺跡他の調査

#### 1. 調査の方法

すべての調査区で耕作土は15cm～20cmの厚みがあり、その下は10cm～20cmの床土である。第1調査区は、全て手掘りで調査し、それ以外で、小型重機が入る調査区について耕作土のみを除去した。調査で出てきた排土のうち耕作土と床土は、最後に埋め戻すためコンバネを敷いた上に分けて集積し、その他の排土は、礫のみを分別して最下層に埋め、残りはランダムに埋め戻した。埋め戻しは、小型重機を使用したが、重機の入れない調査区は、人力で埋め戻した。

#### 2. 各調査区の調査（第3図 調査区配置図）

前期調査は、すでに休耕されていた第1調査区からスタートし、第8調査区までとした。調査期間は7月2日～9月6日までである。後期調査として稲刈終了後、第9調査区～第20調査区を調査した。後期調査期間は、9月6日～翌1月8日までであるが、その内12月19日～翌1月8日までは、効率的な作業をするため中殿遺跡と同時進行した。

#### （第1調査区）（第4図 第1調査区暗渠検出平面図、第5図 第1調査区土層断面図）

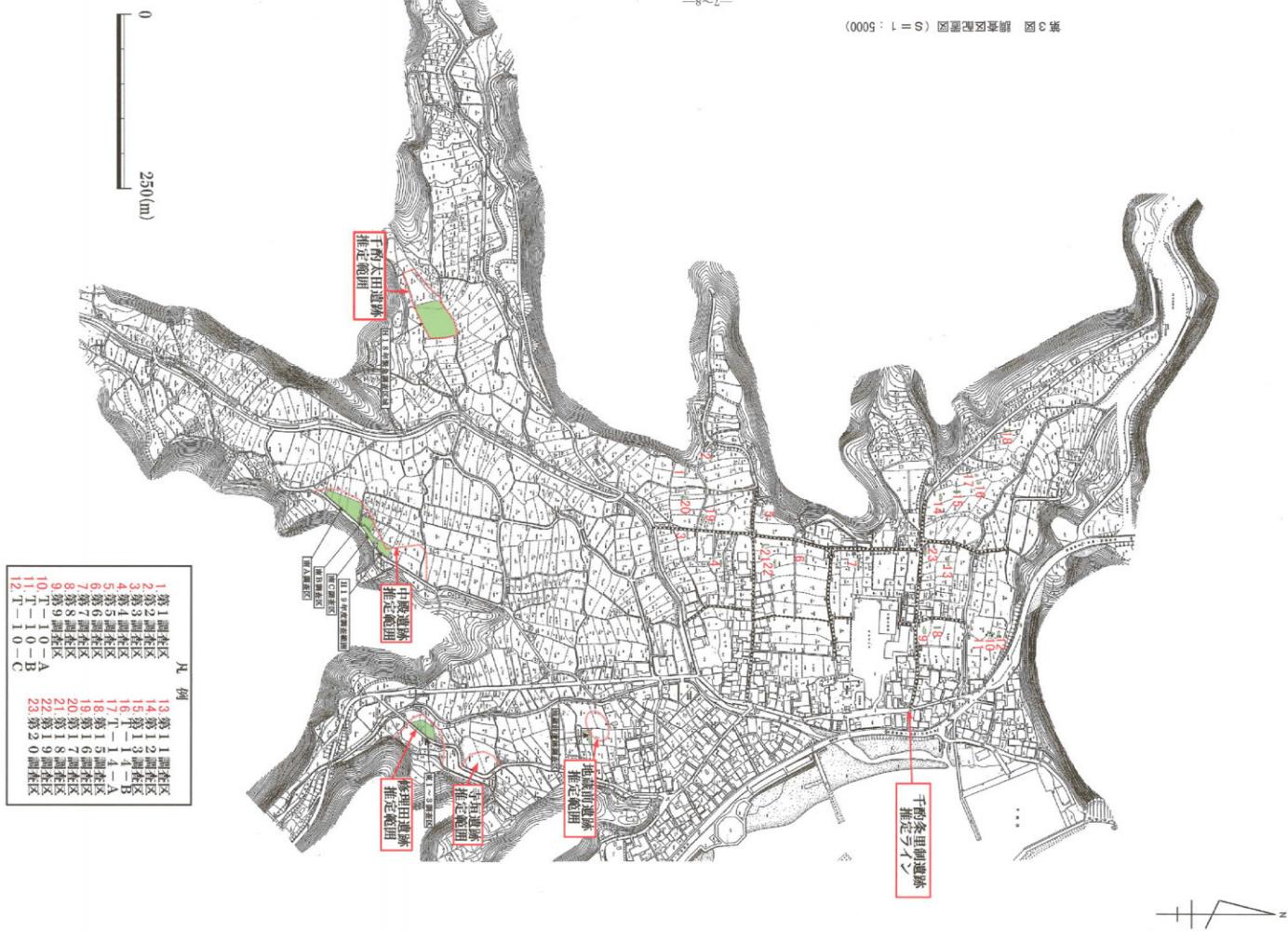
住居跡等の検出を目的に10m×2mで設定した山際の調査区である。耕作上から約1mを少しづつ手掘りで掘り下げたところ、耕作土下第3層中からX字に木組をして、組んだ上に枝やうらじろを敷いた木組遺構を検出した。この遺構は、調査区外に伸びているため、調査範囲を拡張した。その結果、この木組には勾配がつけてあることが判明した。勾配は、西→東方向に下がっていて、耕作上から木組の中心までの深さを測ると西（山側）で52cm、東（集落側）で65cmであり、標高でみると6.06mと6.23mなので10mの距離に対して高低差17cmである。

伴出遺物からこの遺構の時期を考えてみると、まず耕作土の下、第2層からは、中世の土鍋や近世の唐津か、或いは須佐唐津の櫛り鉢が出土している。この遺構が検出されたのは第3層であるが、この遺構の下層、第4層中から古墳時代中期と考えられる小型丸底壺が出土しているものの、最下層から中世の土鍋が出土していることから、この遺構は、中世以降に作られた可能性が高く、木の残存状況から、それほど新しくない暗渠排水施設であると思われる。

なお、層序を観察してみると、4層の上面に暗青灰粘土ブロックがあり、古い畦の可能性が考えられたため、反対の北側土層断面を精査したが、検出できなかった。おそらく粘土ブロックが混入したものと考えられる。

#### （第2調査区）（第6図 第2調査区土層断面図）

住居跡等の検出を目的に、谷に近いところに設定した調査区。第1調査区から北西へ約50m離れている。耕作土は重機で除去した後、約85cmを手掘りした。第2層～第4層中から土師質の土錐が2個体出土している。また、第5層～第9層からは遺物が出土しているものの摩滅した小片ばかりで実測できるものはなかった。ただし、第7層から古墳時代の土師器の甕片が出土した。なお、第6層～第9層には、砂質と礫層が半流で自然木が多く含まれていた。

第3図 調査区配置図 ( $S = 1 : 5000$ )

〈第3調査区〉(第7図 第3調査区土層断面図)

条里制の畦畔を検出する目的で、第1調査区の西80mの地点に設定した調査区である。0.7m～1mを掘る。第3層は、非常に粘性の強い粘土層で、厚みが50cm近くあった。その下は、砂を多く含む層だった。いずれの層からも遺物は出土しなかった。また、条里制の痕跡を確認することはできなかつた。

〈第4調査区〉(第8図 第4調査区土層断面図)

条里制の畦を検出する目的で設定した調査区。すでに休耕して久しい田であり、それぞれの高低差はわずか10cm程度しかない。0.7m～0.95mを掘るが、第3調査区と同様埋められた遺物しか出土せず、条里制の痕跡も見いだせなかった。

〈第5調査区〉(第9図 暗渠検出平面図、第10図 第5調査区土層断面図)

「蓮花寺」の南、山裾に立地する2枚の田にまたがった調査区。住居跡等の検出を目的に設定し、当初、10m×2mを掘ったが、下段の田にかかる調査区で、耕作土の下から掘り込まれた、第1調査区と同様な木組の暗渠排水施設を検出した。この構造の時期を掘むため、これを追いかけ拡張した。その結果、南北に伸びて地形をトレースするように2方向に分かれ、東西に続くことを確認した。この暗渠も微妙に勾配がとつてあるが、北→南方向に30mでわずか6cmである。つまり10mあたり2cm勾配である。この構造の時期については、第1調査区より浅い位置から検出されたことから、比較的新しいのではないかと想定したが、出土遺物は古く、古墳時代後期の須恵器が構内から出土している。なお、渡辺氏のAMS分析によると、暗渠木材の測定結果は、弥生時代中期頃というデータが提出されている。

〈第6・7調査区〉(第11図 第6調査区土層断面図、第12図 第7調査区土層断面図)

条里制の畦跡を探すために、「蓮花寺」の東と北東20mの位置に設定した2つの調査区。両調査区ともに近世以前の構造や実測可能な遺物はなかった。また、土層断面にも特に変化は見られなかった。ただし、第7調査区で第2層から掘り下げられた暗渠施設を検出した。土層図に断面を記しているが、幅20cm近い新しい丸太を置いて、その上にウラジロを敷いている。その上に溜枠のような木箱を置いて一辺に穴を開け、まだ青みの残る丸竹が通してあった。また、丸竹の下にもウラジロが敷いてあつた。検出時に暗渠から水が流れ出てくるので、現在でも使用中の近現代の暗渠施設である。

〈第8・9調査区〉(第13図 第8調査区土層断面図、第14図 第9調査区土層断面図)

これらの調査区は、住居跡等の検出を目的に、旧千鶴小学校の北側、出畑川に挟まれた田に設定した。第8調査区は、耕作土から1.5mほど掘り下げたところで、黒褐色の有機物堆積粘土層を検出した。この土層は、植物の腐食根を多く含んでいる。おそらく耕作される前は、湿地帯であったことを窺い知ることができる。

第9調査区は、1m程の深さまで掘り進めた。下層には、砂質土や砂礫層が堆積していた。この堆積は一様なものではなく、西南から北東に帶状に流れていることが解った。おそらく自然流路の痕跡であろう。堆積土層から判断すると、この自然流路内の上層は、何層かに分層出来るので、比較的長い間、流路であったとも考えらる。その中の堆積層である青灰色砂層から純文晩期の突唇文土器が2

点出土している。また、この自然流路は、調査区の南西に向かっていて、地元の古者はなしては、この付近にかつては小川があったそうである。すぐ北に流れる出畠側は、全てコンクリートに改修されているが、おそらく工事の際に数条の小川を統合したことが想像できる。第8調査区の土層堆積状況から、この調査区の周辺も以前は湿地帯であったと考えられ、ここに流れる小川もあったであろう。

#### 〈第10調査区〉(第15図 第10調査区調査範囲図、土層断面図)

住居跡等の検出を目的に、県道松江・鹿島・美保関線の南約30mに設定した最も北の調査区である。県道は、岩山の裾を掘削して敷設されているが、調査区はその7m以上下にある。この調査区の周辺は、小字名を「土井」という。中世「土井」という地名は、堀切と土塁を持つ豪族の居館跡が小字名に残ったものが多いが、その関係なのか遺物の出土量が多かったので、遺構を確認するために拡張して調査した。

当初、2枚の水田にまたがって調査区を設定し、それぞれの田の高低差が約0.5mあったため、調査区を畦で区切り南側をT-10-A、北側をT-10-Bと呼称した。また、遺構を検出するため調査区の短辺、長辺をそれぞれを2mずつ拡張して、4m×12mとした。この調査区を40cmほど掘り下げると3層目が現れるが、全く遺物は出土しなかった。更に30cmほど掘り下げながら遺構面を探した。しかし、残念ながら遺構面を検出することは出来なかった。ここから出土する遺物は、主に6世紀～8世紀代が中心であるが、耕作下土の第2層から、長頸瓶が一点出土している。

T-10-AとBからは、遺構を検出できなかつたので、7m程北に県道と平行する調査区を設定し、T-10-Cと呼ぶことにした。調査するうちに遺物包含層が東に広がっていくので、更に拡張を行つた。拡張箇所から出土する遺物とT-10-Cの遺物を分別するため、T-10-Dと称した。これらの調査区から出土する遺物は、耕作上から数えて第2層～第4層までで、おおむね6世紀～9世紀代の遺物である。しかし、更に30cm掘下げたが、遺物も出土しなくなつたため調査を終了した。なお、この調査区にも第2層から掘り込まれた近代の暗渠排水施設があつた。

#### 〈第11～15調査区〉(第16～20図 各調査区土層断面図)

第11調査区は、条里制の畦跡を検出する目的で、出畠川の南30mに設定した調査区である。2枚の田にまたがっているため、畦はそのままにして掘り下げた。約1mを掘るが、土層堆積状況に変化は見られなかつた。また、遺物も摩滅したものばかりで実測可能なものはなかつた。

第12～15調査区は、丘陵が迫っているため、住居跡等を検出することを目的に設定した。

第12調査区は、0.9mを堀り下げたところで自然木や川原石を含んだ黄褐色砂礫層があり、土縁が出土したため、幅2mほど部分的に拡張した。残念ながら遺構や遺物は検出できなかつた。おそらく土層堆積状況から自然流路の一部と考えられる。

第13調査区は、2枚の田にまたがって設定した調査区で、第3層目から掘り込まれた、近現代の暗渠排水施設を検出したが、遺構や実測可能な遺物はなかつた。砂層や砂礫層の堆積状況から、第12調査区同様、自然流路の時期があったものと思われる。

第14調査区は、当初3m×4mで設定した西側のT-14-Aと同じ規模で設定した東側のT-14-Bがある。T-14-Bでは、深さ0.6mのところで自然木が検出されたので、3mと2m拡張し5m×7m

の調査区とした。第2層から掘り込まれた、暗渠排水施設を検出した。第1、2調査区と同様に木をX字に組んで横木を通しウラジロを敷いている。伴出遺物が現代のもので、残念ながら新しい施設と判明した。ここからも土錐が出土している。ほかには実測可能な遺物はなかった。

第15調査区は、谷の西奥に所在する。約1mを掘り下げる。第2層～4層まで植物根が多く含んでいた。おそらく耕作田になる前は、荒地だったのではないかという印象を得た。この調査区も遺構や実測可能な遺物はなかった。

#### 〈第16～17調査区〉(第21・22図 各調査区土層断面図)

第1・5調査区の木組遺構を条里制の畦の可能性があると考え、設置した2つの調査区である。第16調査区は、第5調査区から伸びる畦を確認できるものとして設定した。田の面積が狭く、形状がいびつなため木組方向を計測し、三角形の調査区を設定した。第17調査区も、同様に計測した上で第1調査区の木組遺構が伸びる位置に設定した。しかし、両調査区ともに条里制の遺構や痕跡を検出することは出来なかった。遺物も、第16調査区からは、輸入磁器片と土錐が出土したが、第17調査区からは、遺物の出土はなかった。

#### 〈第18調査区〉(第23図 第18調査区土層断面図)

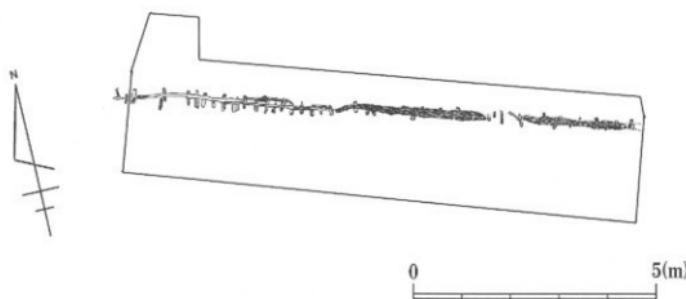
第5調査区の東35mの位置に条里制の痕跡を検出する目的で、設定した調査区。一部拡張して深さ1mを掘るが、条里制の痕跡や他の遺構は見いだせなかった。また、実測可能な遺物もなかった。

#### 〈第19調査区〉(第24図 第19調査区土層断面図)

条里制の痕跡を検出する目的で、第18調査区から田一枚を隔てて設定した調査区。約1mを掘り下がったが、条里制の痕跡や他の遺構は検出できなかった。遺物をみると、2～3層が遺物包含層であるが、短刀一振りと鎌身圭頭式の鉄鎌及び6世紀末と考えられる須恵器の蓋が出土している。

#### 〈第20調査区〉(第25図 第20調査区土層断面図)

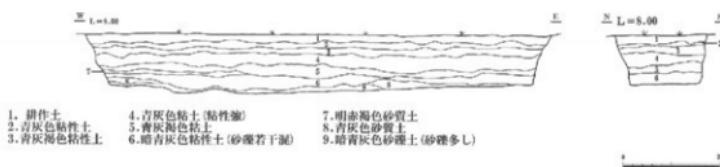
千鶴地内の西侧道路は、ほぼ磁北方向に走っている。この道路は、開基1356年といわれる蓮花寺に通じる道路であり、かなり古くからこの位置に所在し、この地域の幹線道の役割を果たしてきた。したがって、条里制の大畔であった可能性もあると考え、この道路の延長線上に調査区を追加して設定した。耕作土から40cmほど掘り下げると、2層に分かれるものの厚み40cmの非常に粘性の強い粘土層があった。残念ながら期待した遺構は検出できず、遺物も中世以降のもので古い遺物はなかった。地元の古老によると、戦前から戦後にかけて瓦を焼くための粘土を探掘した場所だそうで、近くに瓦工場もあったと聞いている。



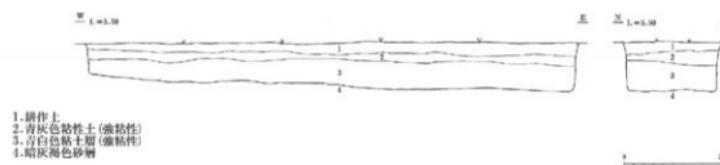
第4図 第1調査区暗渠検出平面図 ( $S = 1 : 100$ )



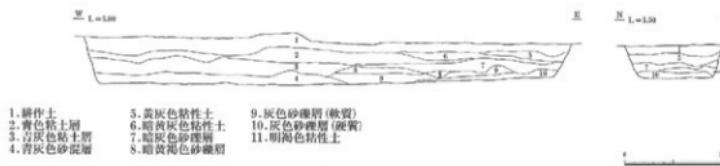
第5図 第1調査区土層断面図 ( $S = 1 : 100$ )



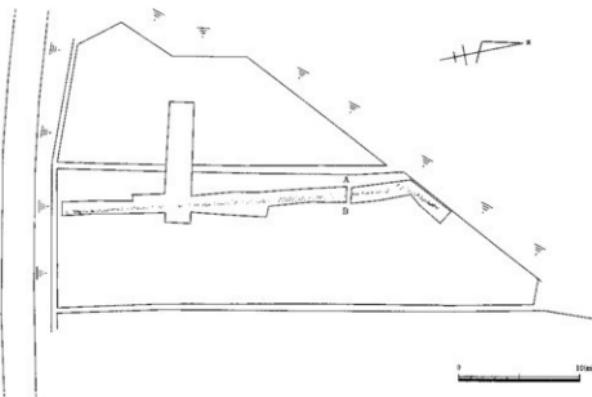
第6図 第2調査区土層断面図 ( $S = 1 : 100$ )



第7図 第3調査区土層断面図 ( $S = 1 : 100$ )

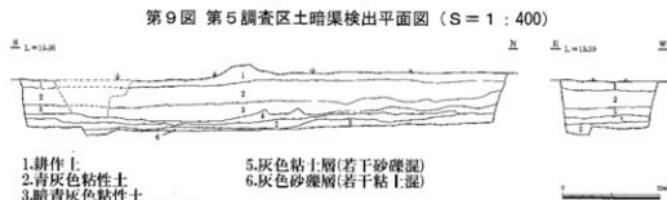


第8図 第4調査区土層断面図 ( $S = 1 : 100$ )



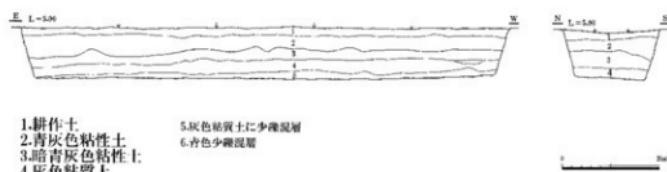
- 1.耕作土
- 2.青灰色粘質土
- 2'2に近い土質だが若干軟質
- 3.暗青灰色粘質土
- 4.青灰色粘土
- 4'4の粘土ブロック
- 5.3と4の混合層と思われる暗青灰色粘土ブロック
- 6.4のブロック

A - B間土層断面図 ( $S = 1:100$ )



- 1.耕作土
- 2.青灰色粘性土
- 3.暗青灰色粘性土
- 4.暗灰色粘性土(若干砂混)
- 5.灰色粘土層(若干砂礫混)
- 6.灰色砂礫層(若干粘土混)

第10図 第5調査区土層断面図 ( $S = 1 : 100$ )

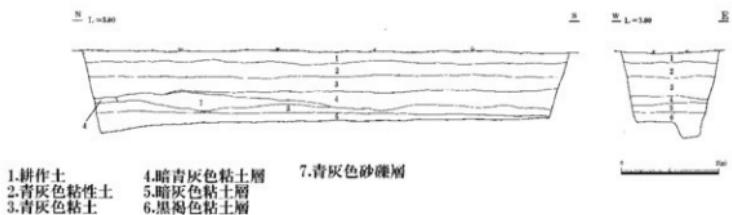


- 1.耕作土
- 2.青灰色粘性土
- 3.暗青灰色粘性土
- 4.灰色粘質土
- 5.灰色粘質土に少薄泥層
- 6.青色少薄泥層

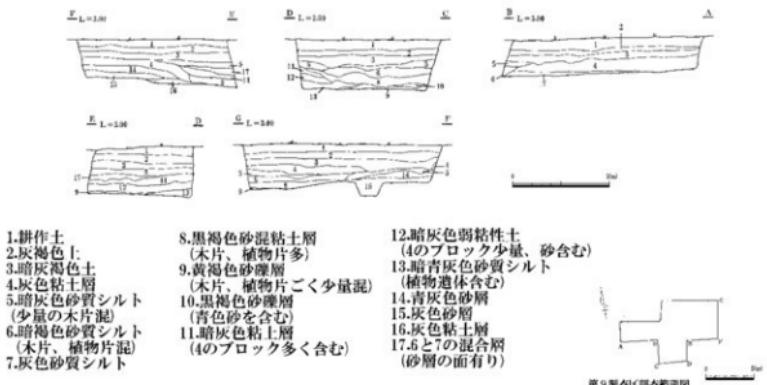
第11図 第6調査区土層断面図 ( $S = 1 : 100$ )



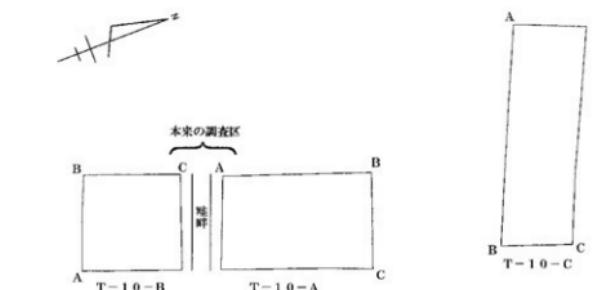
第12図 第7調査区土層断面図 ( $S = 1 : 100$ )



第13図 第8調査区土層断面図 ( $S = 1 : 100$ )



第14図 第9調査区土層断面図 ( $S = 1 : 100$ )



第10調査区範囲図 (S = 1 : 200)



T-10-A 土層断面図 (S = 1 : 100)  
 1.耕作土  
 2.暗青灰色粘性土  
 (近現代と古代の遺物を含んだ層)  
 3.青灰色粘性土  
 (近現代と古代の遺物を含んだ層)  
 4.灰褐色砂礫層  
 } 無遺物層  
 6.青灰色砂礫層



T-10-B 土層断面図 (S = 1 : 100)  
 1.耕作土  
 2.暗青灰色粘性土  
 (近現代と古代の遺物を含んだ層)  
 3.灰褐色粘性土  
 (近現代と古代の遺物を含んだ層)  
 4.灰褐色砂礫層

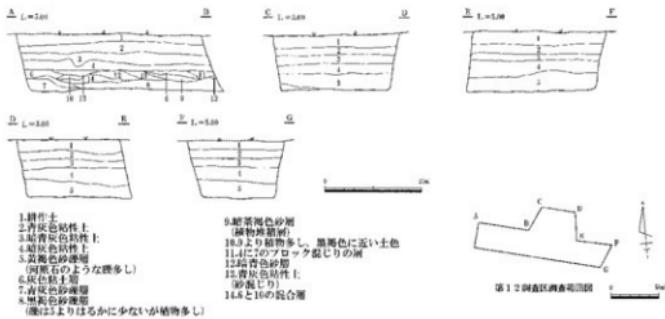


第15図 第10調査区調査範囲図土層断面図 (S = 1 : 100)



1.耕作土  
 2.暗青灰色粘性土  
 3.灰色小礫混入粘性土  
 4.青灰色粘性土  
 5.灰色粘土層

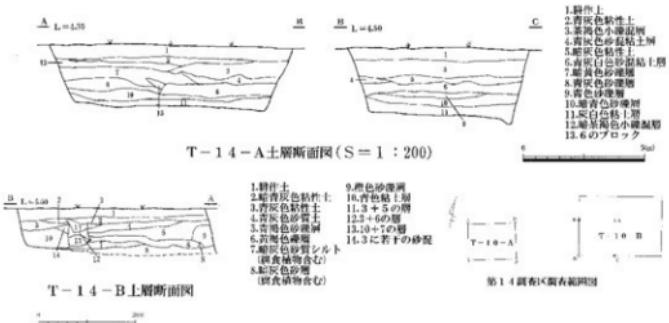
第16図 第11調査区土層断面図 (S = 1 : 100)



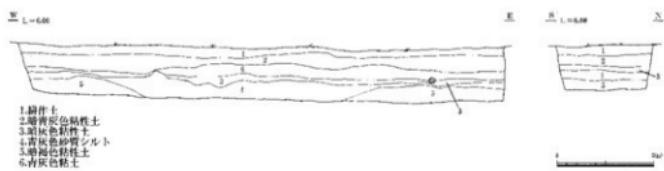
第17図 第12調査区土層断面図 ( $S = 1 : 100$ )



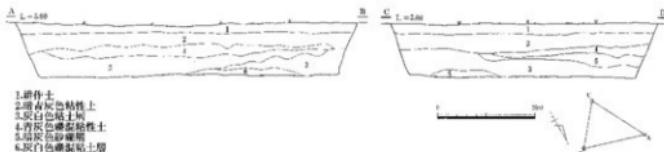
第18図 第13調査区土層断面図 ( $S = 1 : 100$ )



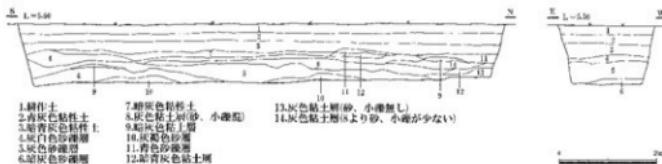
第19図 第14調査区土層断面図



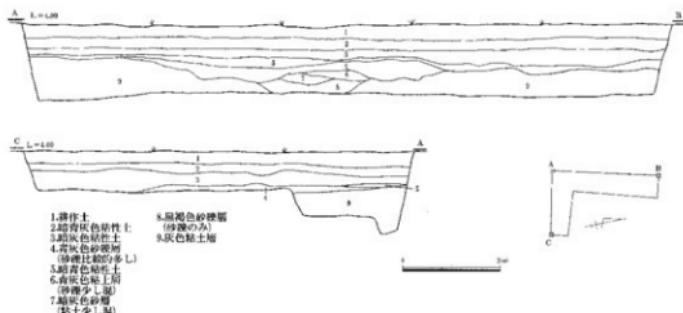
第20図 第15調査区土層断面図 ( $S = 1 : 100$ )



第21図 第16調査区土層断面図 (S=1:100)



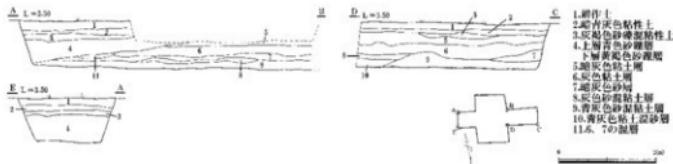
第22図 第17調査区土層断面図 (S = 1 : 100)



第23図 第18調査区土層断面図 ( $S = 1 : 100$ )



第24図 第19調査区土層断面図 (S = 1 : 100)



第25図 第20調査区土層断面図 ( $S = 1 : 100$ )

### 3. 遺物 (1~17)

〈第1・2・5・9調査区の遺物〉 (第26図 第1・2・5・9調査区の遺物)

1~4は、第1調査区出土の遺物。1は、古墳時代中期と思われる小型の手捏ねの壺である。口径8.0cm、胴部最大径9.1cmを測る。暗渠排水施設より下層から出土している。2は、中世の土師質の鍋である。口縁部が「く」の字に屈曲しまっすぐ伸びるもので、残存部は丁寧な刷毛目調整を施している(註1)。1と同じく暗渠排水施設より下層から出土している。3は、第2層から出土した中世の土師質の鍋把手である。把手部分のみしかないと全体の器形は不明である。4は、近世の唐津か須佐唐津の擂鉢である。暗渠と同じ第3層から出土している。

5~7は、第2調査区出土の遺物である。5は、古墳時代の土師器の壺。口径13.0cm、頸部径10.4cmを測り、口縁部は内外面ともにナデ、体部外面は刷毛目調整を施し、内面はヘラ削り後未調整である。表上下、80cmの砂質土層から出土している。6、7は、ともに土錘である。完形に近いもので残存長3.1cmと3.4cm、幅0.9cmと1.0cm、孔径ともに0.3cmを測る。いずれも第3~4層から出土している。

8~14は、第5調査区出土の遺物。8は、肥前系の染付の小碗である。近代のものと思われる。口縁部は欠損しているが、高台径は、2.9cmである。第2層から出土している。9は、須恵器の長頸壺の口縁部である。口径は10.5cm、頸部~口縁部高6.2cmを測る。頸部と体部の境付近に3条のヘラ記号を施す。6世紀末~7世紀中頃までのものであろうか。10は、須恵器の坏身である。暗渠排水施設直下から出土している。11も、同様なところから出土した須恵器の甕か壺の底部である。底部外面は、ヘラ削り後、回転ナデ調整を施している。12は、暗渠排水施設の2層下から出土した弥生時代中期の壺である。頸部から口縁部は「く」の字に屈曲し、端部で内側に肥厚するもの。口縁部内外面ともにナデ調整を施している。13は、須恵器の高坏である。木組の中から出土した。14は、土師器の壺の頸部である。外面に刷毛目調整、体部内面にヘラ削りを施している。15は、耕作土の下、第2層から出土した白磁である。露胎となった高台内に墨書きがあるが、意味は不明である。

縄文晩期の土器2点が第9調査区から出土している。16、17は、尖底文系の深鉢である。これらは自然流路内の堆積層から出土したものであり、流れ込みの遺物である。

〈第10調査区の遺物〉 (18~51) (第27図 第10調査区出土の遺物)

この調査区は、遺物の出土量が多いので、調査区を拡張したり追加して調査した。出土遺物の破片を数えると1,195片に達している。時期的には、6世紀末~9世紀代のものであるが、7~8世紀代ものが特に多い。須恵器は坏の身・蓋類が多く、土師器は土製支脚やかまど片などが殆どである。その中で実測できたのは、34点である。遺物包含層は、第2~4層までの、3層であるが、上層は耕作等により攪拌を受けたり、下層は周辺からの流れ込みであったりと出土遺物から層序の堆積時期を推定することはできなかった。また、遺物に伴う遺構面も検出できなかった。ただし、残存状態が良いものも含まれているので、非常に近いところに遺構があることは間違いない。

18は、T-10-A区第3層出土の須恵器の甕である。体部肩及び中央よりやや下方に2条の沈線を施し、下方の沈線よりに1.1cmの孔を穿っている。残念ながら口縁部は欠損している。高広編年のII B

期(註2)に属するものか。19・20は、T-10-D区第3層出土の須恵器の高坏である。19は、口縁部であろうか、残存部にヘラ削り調整の痕跡をみることができる。20の坏部はかなり摩滅している。特徴としては坏部からスタートして脚部中間に貫通する切れ込みを2条入れている。高広編年II期のもの。21も、同じ土層から出土している。須恵器の壺の頸部～口縁部である。簡略化されているが櫛描波状文を施している。高広編年のII期に相当するものと思われる。22～24は、輪状つまみを有する須恵器の蓋である。外部にヘラ削り調整を明瞭に残している。高広編年のIII期に属するもの。25も、須恵器の蓋であるが、端部のみしか残存していない。26～32は、須恵器の高台付坏である。26は、底部のみしか残存していない。高台内は、丁寧なナデ調整を施している。高台径9.2cm、高台高0.8cmを測り、高台が僅かに外反するものである。27も、高台内を丁寧なナデ調整している。高台端部が丸みを帯びるもの。28は、静止糸切り後ナデ調整を施し、高台が内湾するもの。29は、回転糸切り後ナデ調整を施すものだが、高台が僅かに外反するものである。高台径が9.2cm、高台高0.8cmである。30は、高台径が12.6cm、高台高0.8cmと大型のもので、高台の端部を、外方につまみ広げたような形状である。回転糸切り後ナデ調整を施している。31は、焼成が悪く、摩滅しているため切り離しは不明である。高台径8.2cmを測る。32は、高台を肉厚に作っている。脚部と坏部の接合箇所にヘラ削り調整を観察できる。これらの遺物の時期は、高広編年のIII～IVA期に相当すると考えられる。32は、33～36は、須恵器の坏である。33は、底部しか残存していない。底径は、7.8cmを測る。外面に刷毛目状のナデ調整が観察(静止糸切り?)できる。34は、口径12cm、器高4cmを測る。切り離しは、器面剥落のため不明である。35は、口縁部が一旦内傾した後、外反するもので口径14.2cmを測る。36は、口径11cmを測る。内面は回転ナデ調整を観察できるが、外面は摩滅しているため不明である。33～36とともに高広編年のIII期に属すると考えられる。37～43も、須恵器の坏である。すべて切り離しは、回転糸切りである。37は、口径14.0cm、器高3.9cm、底径10.0cmを測るもの。38は、口径15.6cm、器高3.8cm、底径12.2cmを測る。口縁端部は僅かに外反するため、端部外面下に、くびれを有する。39は、底部のみしか残存していない。また、内面も摩滅している。底径8.2cmを測る。40も、底部の破片である。底径7.6cmを測る。41も、底部しか残っていない。底径8.4cmである。42は口径11.6cm、器高3.6cm、底径7.0cmを測る。摩滅が著しいが、回転糸切り痕は、観察できる。43は、口縁部が欠損している。非常に薄手の作りである。底径は7.8cmある。37～43の時期は、36～42が高広編年IV期に、43が高広編年V期に相当すると考えられる。44は、碗であろうか。口径19cmを測り、口縁部より下の外面にヘラ削りを施した後、ナデしている。45は、高台の付いた壺の底部であろうか。高台径は、8.6cm、高台の高さは、0.75cmである。高台内と外には、ヘラ削り痕を残している。底部内面には、灰釉が被っているが、かなり剥落している。46・47は、土師質の土製支脚である。46は、比較的小型のもので下部が欠損している。47は、器高15.8cm洞部中央の幅は、5.6cmを測る。脚部は、11.9cmである。48・49は、土師質の壺の破片である。48は、外反する形状から焼き口の餘の部分と考えられる。49は、小型の壺の床に設置する部分であろうか。50は、上部器の把手部分である。ヘラ状工具で面取り調整を施している。また、調整で出来た2条の傷がある。51は、鉄鏹である。全長15.6cm、最大幅2.0cm、最大厚0.9cmを測る。形状から長頸鏹と考えられる。耕作土を除去した後、第2層中に先端を突き立てた状態

で、検出された。

（第12・14・16・19・20調査区の遺物）（52～62）（第28図 第12・14・16・19・20調査区の遺物）

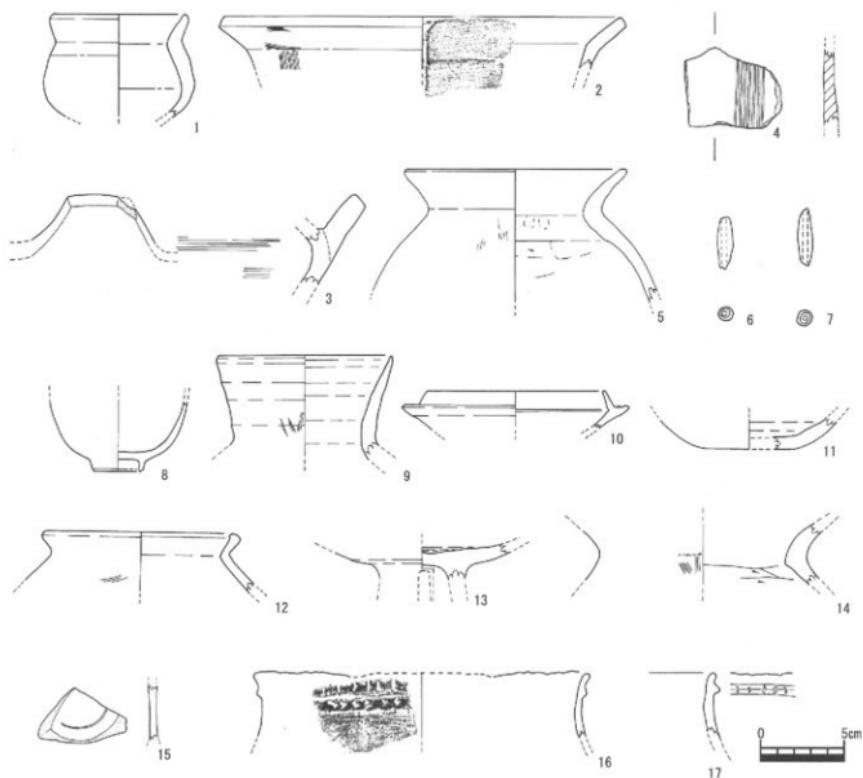
52・53は、第12調査区出土の土錐である。52は、残存長2.9cm、最大幅0.7cm、孔径0.35cmをはかる。53は、残存長3.1cm、最大幅0.8cm、孔径0.4cmをはかる。54は、古墳時代の土師器の壺口縁部である。口縁部周辺はナデ調整、体部内面は、ヘラ削りを施している。口径18.0cmを測る。55は、第14調査区出土の土錐である。残存長3.4cm、最大幅0.9cm、孔径0.3cmをはかる。第16調査区からは、56の土錐と57の青磁の碗が出土した。56は、残存長3.5cm、最大幅0.95cm、孔径0.3cmをはかる。3箇所の調査区から出土した4点の土錐は、いずれも耕作土下の第2層（床土）～3層遺物である。57も、第2層（床土）から出土している。中国龍泉窯の青磁碗で、12世紀～13世紀頃のものと思われる。58～60は、第19調査区出土遺物である。58は、耕作土下の第3層から出土した須恵器の蓋坏である。外面中心から口縁部までの2／3をヘラ削りしている。他はナデ調整を施すもの。高広編年のI B期に属するものと考えられる。59は、第2層（床土）から出土した無反りの短刀である。刃長19.5cm、刃幅2.1cm、茎残存長7.7cmを測る。推定刃厚は、0.2cm～0.25cmで、非常に薄手のもの。闊から2.7cmの位置に目釘孔が1つある。60は、第3層出土の鉄鎌である。刀身部は先端が扇状に広がるもので、刃部は、先端のみである。刀身部も茎もほぼ完全な形で出土している。側面は、闊で断面3角形を呈するもの。刀身部残存長6.9cm、茎残存長10.6cm、刀身部最大厚、茎最大厚ともに0.5cmを測る。61～62は、第20調査区出土遺物である。61は、土師質の碗か鉢である。口径は、17.0cmを測る。外面は、ヘラ状工具によるケズリ後、未調整。内面は、ナデている。62は、小片のため器形や法量はわからない。調整は、内面は普通に横ナデ、外面を強い横ナデ調整をしている。これらの遺物は、遺物包含層内の遺物であり、遺構を伴っていないので時期を限定することは出来ない。

（註1）川上解一「埋蔵文化財年報第1号」乃木西堀遺跡 SK01について 平成18年度 財團法人 松江市教育文化振興事業団  
（註2）「高広遺跡発掘調査報告書」1984年 島根県教育委員会

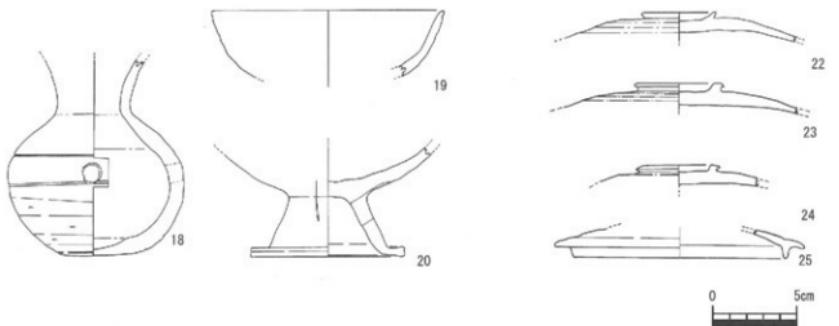
#### 4.まとめ

設定した20箇所の調査区は、遺構が存在する可能性があれば、拡張して調査する方法をとったが、残念ながら条里制の畦等を検出することはできなかった。しかし、第5調査区で検出された古墳時代後期の暗渠施設や、古代～近世までの幅で出土している遺物から奈良時代にこの地で水田耕作が行われていたことは明らかとなった。

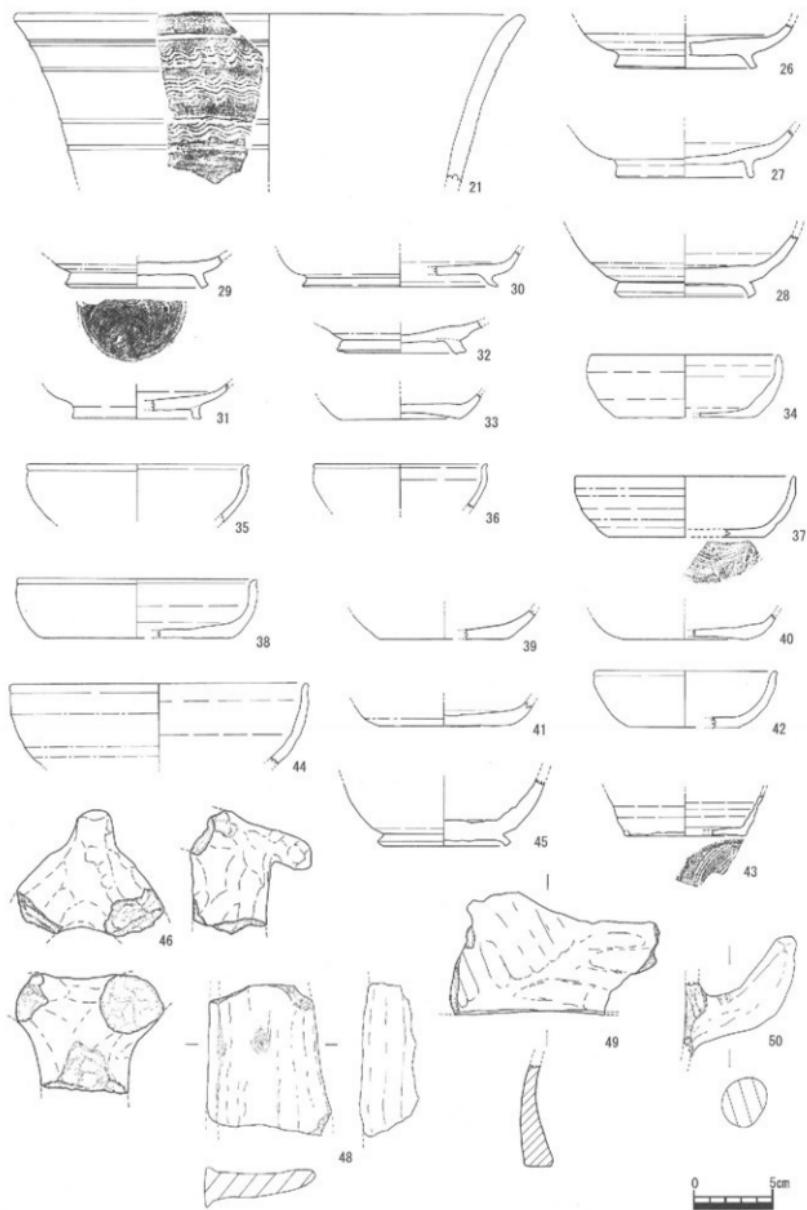
ただ、今回の調査は、は場整備で切土する水田が対象であったので、それ以外の水田に条里制の畦等が検出される可能性も残されている。



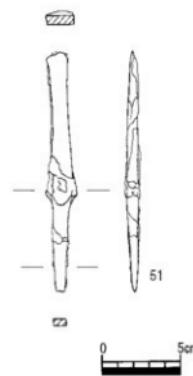
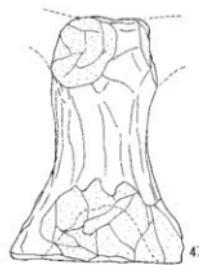
第26図 第1・2・5・9調査区の遺物 (S = 1 / 3)



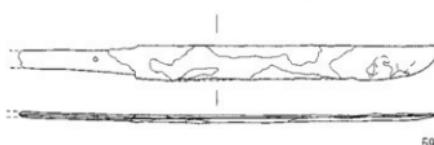
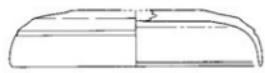
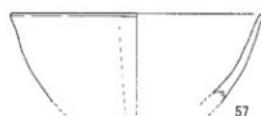
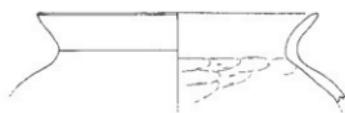
第27図 第10調査区出土の遺物 (S = 1 / 3)



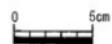
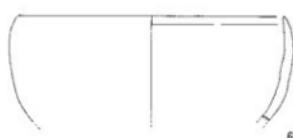
第27図 第10調査区出土の遺物 (S = 1 / 3)



第27図 第10調査区出土の遺物 (S = 1 / 3)



58



第28図 第12・14・16・19・20調査区の遺物 (S = 1 / 3)

## 第2節 平成19・20年度中殿遺跡の調査

### 1. 平成19年度中殿遺跡

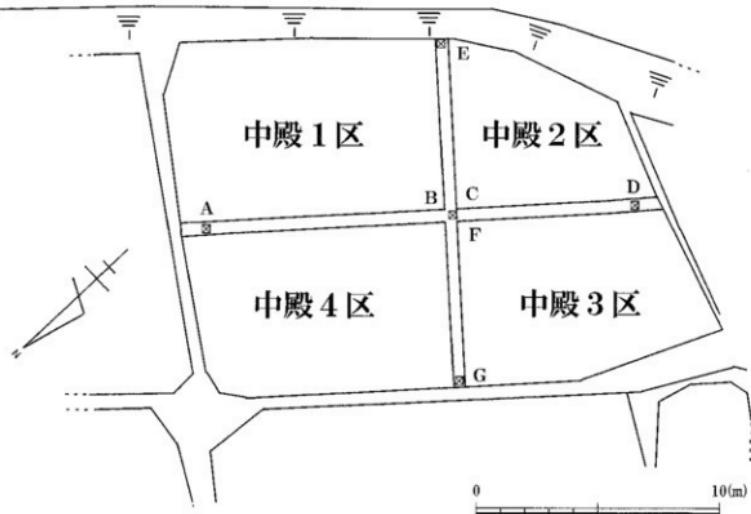
#### (ア) 調査の方法 (第29図 平成19年度中殿遺跡調査区設定図)

調査地は、1枚の田地で、調査面積は、約144m<sup>2</sup>である。まず、調査地を4つに区画し、道路際北から時計回りに、中殿1～4区と呼称した。調査に先立って、中殿1～2区の耕作土を重機で除去した。除去した耕作土は、中殿3～4区にコンパネを敷いてその上に載せ、シートをかけて他の耕土と混じらないようにした。中殿1～2区の調査が終了したら、記録写真を撮影した上で上層図を作成し、埋め戻しを行った。ただし、中殿2区は、軟質の粘土層と砂層のため、一旦埋め戻したが、地盤が軟らかすぎて安定しなかったため、再度重機で掘り起こし、場外処理した後、マサ土を30cm敷いた後、西工区の工事で余っている別の耕作土で埋め戻した。

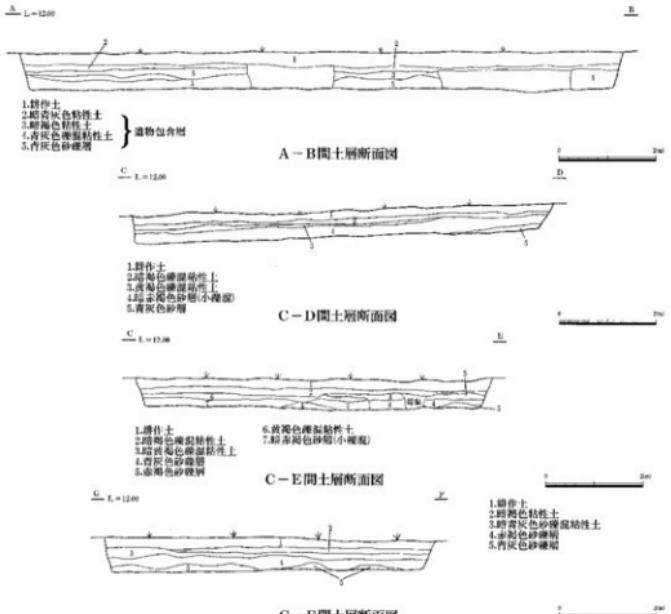
中殿3～4区は、調査の完了した1～2区を堆土置き場とした。これらの調査区も、軟質の堆積土だったので、埋め戻しの際は、調査で出た礫を集めて最初に敷いてから耕作土を載せた。

#### (イ) 層序 (第30図 平成19年度中殿遺跡調査区上層断面図)

基本層序は、耕作土(第1層)の下は、床土(第2層)と粘性土(第3層)である。第4層は、礫や砂の混じった若干粘性のある層で、第5層は、殆ど砂礫層である。その下の層は、礫層であつたり砂層もしくは砂礫層や粘土層であつたりと調査区によって微妙に違っている。ただし、中殿1～3調査区では、3層までが遺物包含層で、第1～2層中には、青磁や磁器の染付碗を含んでいるものの、概ね弥生時代後期～6世紀代の遺物が中心である。しかし、中殿4区では、耕作土下約80cmまでが遺物包含層で、第9層は粘土層の中に複合口縁の上器を含んでいる。残念ながら遺構面は



第29図 平成19年度中殿遺跡調査区設定図 (S = 1 : 200)



※土層ラインは第29図参照

第30図 平成19年度中殿遺跡調査区土層断面図 (S = 1 : 100)

確認できなかつたが、周辺に遺構が存在する可能性は、非常に高い。

層序や中に含まれる遺物から考えられるのは、この周辺の田は、1. 山稜を開墾して田地や道にしたときに遺構を切り崩した。遺物を含んだ土は、田地を造るのに使用した。2. 水害を受け上方の遺構が流されて、遺物が堆積した。3. 山際の遺構に伴う遺物が流れで堆積した。4. それらのいくつかの複合。この4つのいずれかであろう。

#### (ウ) 遺 物 (第31図 中殿1～4区出土遺物) 63～84

中殿1区からは、255片の遺物が出土している。殆ど摩滅していく実測できたものはごく僅かであった。出土遺物の中で最も量の多いのは、弥生時代後期～古墳時代の遺物である。63は、第2層(床土)から出土した国産青磁である。体部のみの破片であるため、器種を特定することは出来ない。高台が付く碗であろうか。64は、同じく第2層(床土)から出土した複合口縁を有する甕である。口縁部が残存していないが、頭部径は、18.2cmである。

中殿2区からは、69片の遺物が出土している。摩滅しているものが殆どで、実測できたものはごく僅かであった。出土遺物の中で最も量の多いのは、弥生時代の後期～古墳時代の遺物である。65は、2区の第2層(床土)から出土した長頸甕と思われるもの。残存長12.9cm、刃部最大厚は0.8cm、

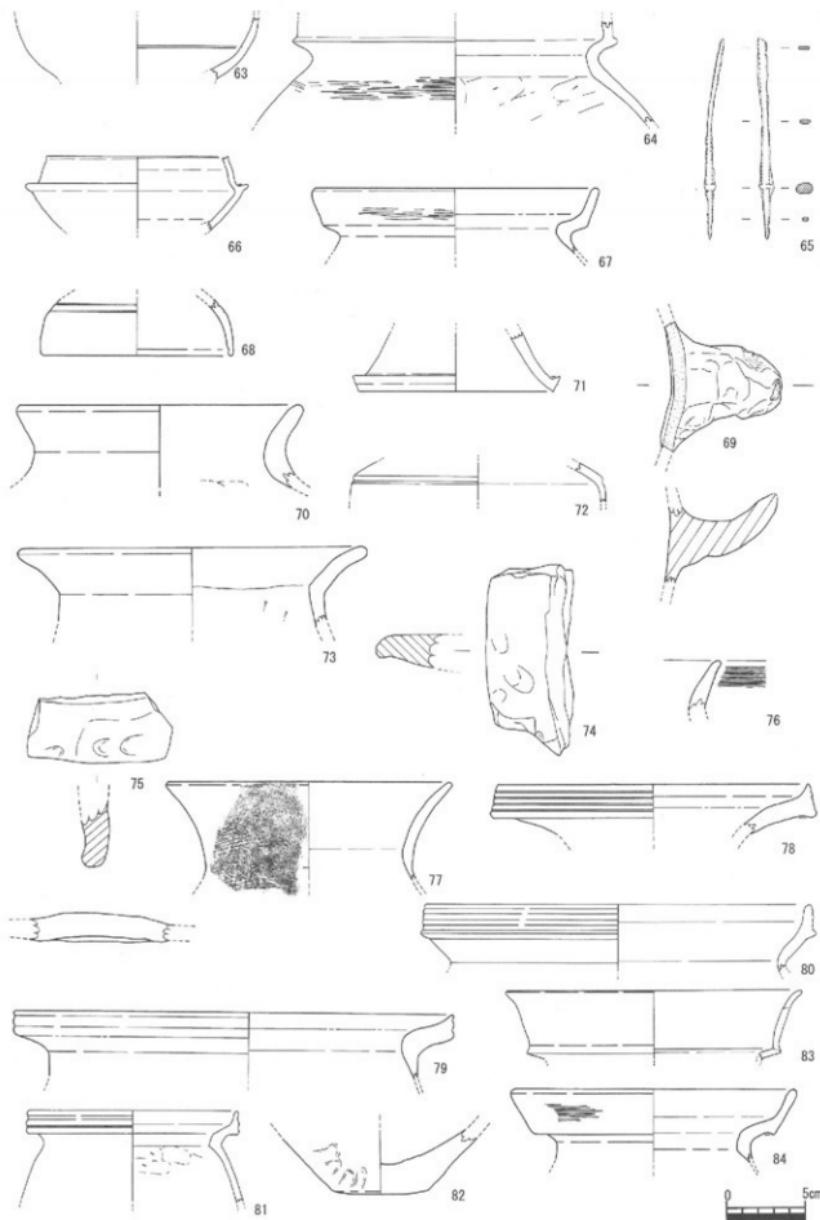
関部分の厚みが1cmほどあり、茎最大厚も0.8cmを測る。刃は先端のみである。

中殿3区からは、22片の遺物が出土している。殆ど摩滅していく実測できたものはごく僅かであった。出土遺物の中で最も量の多いのは、弥生時代後期～古墳時代中期の遺物である。66は、3区の第3層から出土した須恵器の蓋坏の环身である。口縁端部に僅かにくぼみをつけ、受け部も横方向に張り出すもの。また、調整もヘラ削りが受部近くに達するなど、形態的にも技術的にも古式の様相を呈している。出雲1期(註1)もしくは、山雲2期(註1)の早い段階のものであろうか。

67も、同じ層から出土した複合口縁の壺片で、口径18.0cm、頸部径14.8cmを測るもの。口縁部は、直線的に外傾するもので、端部は丸い。出雲・隱岐V-3様式(註2)に属するものであろうか。

中殿4区からは、最も多い613片の遺物が出土している。摩滅したものが多いが、実測可能なものもかなりあった。これらの中で最も量の多いのは、弥生時代後期～古墳時代後期の遺物である。68～75は、第4層出土の遺物で68は、須恵器の蓋坏の蓋である。小型のもので口径12.2cmを測る。口縁端部内面に段を有するもので、出雲2期(註1)に属するもの。69は、土師器の把手。70は、土師器の甕の口縁部で口縁端部から頸部にかけて肥厚するもの。71は、須恵器の高坏の脚部である。透かしの痕跡を確認できるが、形状は不明である。出雲5期(註1)以降のものか。72は、須恵器の蓋坏の蓋である。73は、土師器の甕で口縁部が大きく開くもの。口径22cm、頸部径17.0cmを測る。74・75は、いずれも甕片である。76は、第5層出土の遺物である。口縁部であるが小片のため詳細は、不明である。しかし、外面に櫛描直線文が認められるので、複合口縁部の可能性が高い。77～83は、第6層出土の遺物である。77は、摩滅しているが、頸部に外面に櫛描波状文、その上部に櫛描直線文が認められる。弥生時代前期の壺である。出雲・隱岐I様式(註2)に属するものであろうか。78は、口縁部が朝顔型に開き、端部に拡張部をもつ広口壺である。拡張部には4条の回線文を施す。口縁部径は、20cmを測る。残存部外面は、赤色塗彩を施すもので、出雲・隱岐IV様式(註2)に属するものであろうか。79は、口縁端部に拡張部をもつ甕片である。拡張部は、ほぼ垂直に立つもので、2条の回線文を施している。口径は、28cmを測るもの。摩滅が著しく調整は不明である。出雲・隱岐V様式(註2)に属するものであろうか。80は、複合口縁の蓋であろうか。口径は、24.8cmを測る。器肉は厚くほぼ垂直に立ち上がる口縁部を持つ。外面に4条の回線文を施す。出雲・隱岐V-2様式(註2)に属するものであろうか。81は、小型の甕である。口径13.4cmを測る。外面に2条の回線文を施す。出雲・隱岐V-1・2様式(註2)に属するものであろうか。82は、平底の底部片である。83は、小型の複合口縁の甕と思われる口縁部片である。器肉が薄く、端部は緩やかに外反するもので、内外面ともにヨコナデ調整である。出雲・隱岐V-4様式(註2)に属するもの。84は、第6層の更に下層から出土した複合口縁の甕である。口径18.0cmを測る。摩滅しているが口縁部に数条の回線文の痕跡を確認できる。

(註1) 大谷 光二「山陰地域の須恵器の発展と地域色」『島根考古学会誌』第11集 1994年3月 島根考古学会  
(註2) 松本岩雄「出雲・隱岐地域」『弥生十器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社 1992



第31図 中殿1～4区出土遺物（1／3）





第32図 平成20年度中殿遺跡調査成果 (1/400)

## 2. 平成20年度中殿遺跡の調査

### (ア) 調査の方法 (第32図 平成20年度中殿遺跡調査成果)

20年度の事業は、5月1日からスタートした。当初、前年度に前倒しで実施した調査区を挟んで南北の水田と畑が調査対象だったが、20年度の工事設計によって、北側対象地は切り土をせず、遺跡が地下保存されることが確定したため調査対象からはずすことになった。しかし、調査の対象面積は、2,080m<sup>2</sup>と依然として広いため、松江市教育委員会文化財課と協議の上、対象地の4箇所に2×2mのグリッドを設定して試掘調査を行い、その結果によって、調査範囲を設定することになった。まず、南-A-1～南-A-3区に設定した試掘グリッドからは、順に7、14、4片と遺物の出土が多く、南-A-4区からは、わずか2片と遺物の出土が少なかったため、南-A-1～南-A-3区は拡張して全面調査とし、南-A-4調査区はトレント調査に切り替え、遺構が検出されたら、全面調査をすることにした。なお、遺物は、第2(床土)～5層に含まれていた。

諸準備等が5月中旬で完了したので、5月19日に試掘を開始した。試掘は5月22日までの4日間を要した。試掘の内容を松江市教育委員会文化財課と協議し、前述の結果となったため、翌日から調査対象地の耕作土のスキ取りをした。耕作土は、調査区外にコンバネを敷いて仮置きし、シートをかけ保護した。試掘の成果と各水田の高低差を考慮して、本調査は、南-A-1から南-A-3まで全面的に5cmずつ均一に掘り下げ、遺物包含層のそれぞれの界面で精査する方法をとった。

また、南-C調査区で、地山と考えられる弱粘性灰褐色土が検出され、人為的な加工の痕跡が認められたので、島根県教育委員会文化財課と松江市教育委員会文化財課の指導を受け、数カ所(南-C拡張区、南-C小拡張区、南-B～C間拡張区)の拡張や南-A調査区の地山確認の深掘りを行い、地山と遺構の検出調査をした。(第35図 南-A-1調査区地山確認トレント土層断面図)

#### (イ) 遺構

南-A-1からは、遺構は確認できなかったが、その他の調査区からは、杭列や掘立柱建物(SB-01)、加工段(SX-01)を検出した。したがって、ここでは遺構ごとに、各区の調査に触れたいと思う。

#### (杭列) (第32図 平成20年度中殿遺跡調査成果)

南-A-2区では、第4層中で杭列を検出した。この杭列には掘方がないので、先を尖らせて打ち込んだものと考えられる。使用した木材は、板材が多かった。灰色粘性土の上に直線的に並んでいるので、古い水田に伴う杭列と考えられる。また、SB-01とほぼ直行する杭列の方向から、SB-01と並行する時期の可能性も高い。

#### (SB-01) (第33図 SB-01遺構図)

南-A-2から南-A-3で検出された2間×3間の掘立柱建物である。建物方向は、桁行きでN35°Eで東に振れている。地形に合わせて建てられたと思われる。それぞれの柱の規模や柱間はまちまちで、2.1～2.6mを測る。深さは、0.2～0.3m。不整円形の掘方で、検出面での柱穴の径は、0.3～0.6mを測る。いずれも埋土は、炭や遺物の小片を含んだ黒褐色土でかなり縮まっていた。検出された土層が直径10～20cmの礫を多く含む粘土層なので、紛れ込んだとも考えられるが、ピット中に柱の沈下を防ぐための、10～20cm大の礫が入っているものもあった。建物の時代は、ピット中の遺物から8～

9世紀代と考えられる。この建物の用途は、その規模や掘方から作事小屋的なものであると考えられる。渡辺氏にピット内土層のAMS年代測定を依頼したところ、8世紀後半～9世紀代という測定値が提出されている（第4章 特論 2中殿遺跡発掘調査に伴う自然化学分析）。

（SX-01）（第34図 SX-01平面図、第35図 SX-01遺物出土状況）

南-C調査区は、土質が軟らかく足を取られそうな軟質の休耕畑である。この調査区の第4層までは、南-A調査区から一貫して観察できる層序を見ることが出来、遺物も7～8世紀のものが中心である。

しかし、第5層目からは、土質が硬く締まった小礫混じりの粘性土に変わり、その土層中に、複合口縁の土器が多く含んでいる。その下には、礫を含まない粘性土が堆積し、この中にも比較的に残存状態のいい複合口縁の土器が含まれていた。更にその下は、若干締まった黄褐色の粘性土で、無遺物層であった。この層を地山と考え、この層を追いかけることにした。

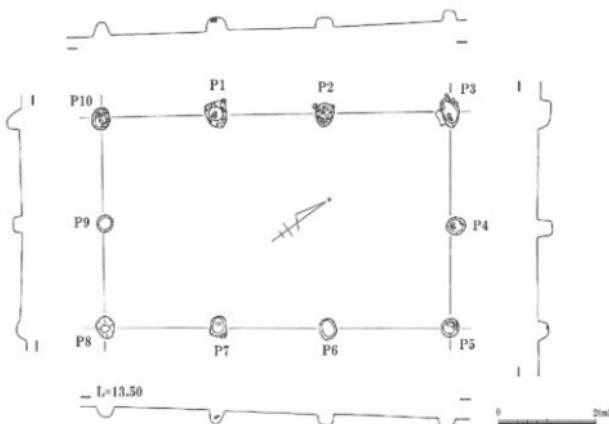
その結果、西に向かって急激に落ち込んでいくことや、更に北に続していくことが判明したため、6.3m×2.4m北に調査区を拡張して、地山の変化を探ることにした（南-C拡張区）。南-C拡張区では、この地山面が北になだらかに落ち込んでいくことが確認され、地山面に密着した遺物や、この場所で壊れたと思われる遺物がかなりの量あった。

南-C調査区や南-C拡張区での地山の変化の状況から、このSX-01は、河岸段丘と考えられる。

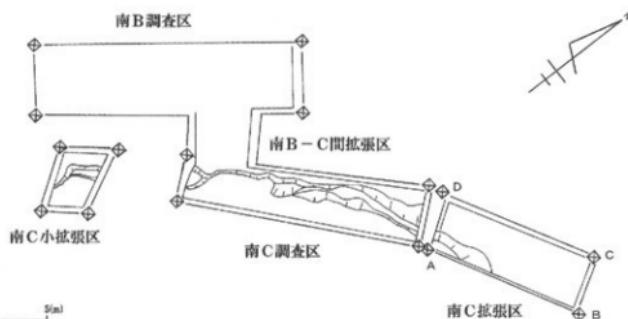
この地山を追いかけるべく南-C調査区の南に3×2m（南-C小拡張区）グリッドを設定した。その結果、地山は同じように西に向かって下がって行き、遺物も同時期のものが出土することが解った。

南-B調査区は、南-C調査区の西の2枚の休耕田に設定した調査区である。南-C調査区で検出されたSX-01の関連遺構の存在を期待したが、残念ながら存在しなかった。ただし、耕作土から50～60cm下に砂礫層があり、この層は、1.5m以上下まで堆積していることが確認できた。このことから、南-C調査区の下は、旧は自然河道と考えられ、SX-01は、この自然河道をなんらかの形で活用掘削したものと思われる。

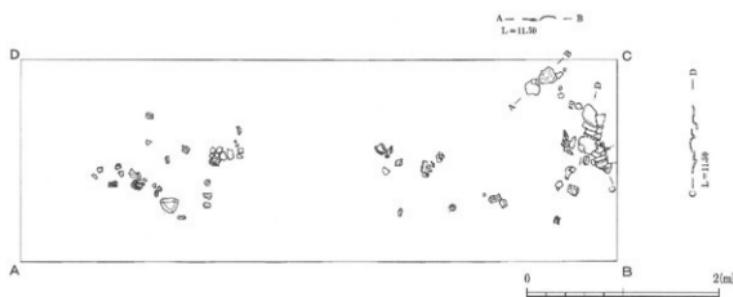
また、南-C調査区や拡張区、小拡張区を中心に出土した弥生時代後期～古墳時代前期の遺物は、現水田の東側の小丘陵地に、この時期の集落が存在することを示唆している。



第33図 SB-01遺構 ( $S = 1 : 100$ )



第34図 SX-01平面 ( $S = 1 : 200$ )



第35図 南C拡張区SX-01遺物出土状 ( $S = 1 : 60$ )

(ウ) 層序 (第36図 南-A-1～南-A-3調査区土層断面図～第43図 南-C間拡張区土層断面図)  
南-A-1～南-A-3調査区は、耕作土は前もって取り除いたので、床土からを第1層と数える。第2層は粘性土で、その下の第3層は、小礫を含んだ粘性土。第4層は、10～20cmの比較的大きな礫を含んだ粘土層。第5層は、第4層より小さな礫を含んだ粘土層で、第6層は、青みがかった粘性土である。全ての層から遺物が出土するが、全て摩滅している。

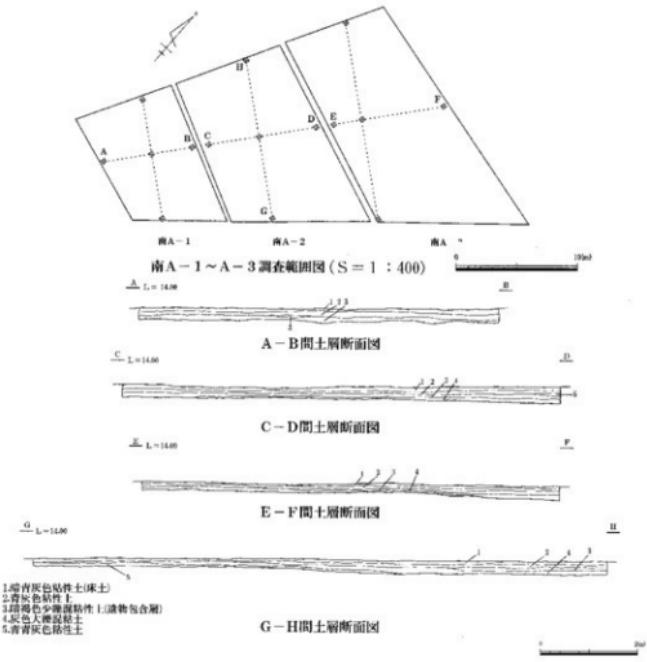
地山と遺構を検出するため、調査区内にトレーナーを設定し、その部分を深掘りした。その結果、南-A-1調査区の0.5m下、標高12.9m～12.7mのところで地山を確認した。南-A-2調査区では、0.8m下、標高12.4mで地山を確認した。南-C調査区と同様に地山は西に下がっていくことや、北に向かって傾斜することを確認した。残念ながら、遺構は無かった。遺物は、地山より0.4m上では須恵器をまだ含んでおり、地山付近では複合口縁の土器を含んでいた。しかし、いずれもローリングを受けた遺物を含んでおり、地山付近では複合口縁の土器を含んでいた。しかし、いずれもローリングを受けた遺物であった。

これらの堆積土層から考えると、南-A-1～南-A-3調査区は、第4層の時代に一旦生活が営まれた時期があり、それが8～9世紀頃であったこと。それ以前については、ローリングを受けた遺物から、弥生時代後期～古墳時代の前期に周辺からの堆積があったことを知ることが出来る。

南-A-4調査区は、部分調査を実施したので、耕作土はそのままにした。したがって、耕作土から数えて第3層目が遺物包含層であり、包含層の厚みは、0.15mほどである。その下は、砂礫層で無遺物層であった。南-A-1～南-C調査区で、地山が検出されているが、ここでは検出できなかった。

南-C調査区、南-C小拡張区、南-C拡張区といずれも小丘陵に近い農業用道路際の休耕畑である。最も南にある南-C小拡張区では、3mの距離で標高12.7m～12.5mと北（海側）に地山は下がっていく、西には3mの距離で標高12.7m～12.05mと急激に下がっていく。南-C調査区からも、10mの距離で標高12.3m～11.5mと北（海側）に下がっていく地山を確認した。南-C拡張区からは、2.4mの距離で標高11.95m～11.3mと北（海側）に下がっていく地山を確認した。しかし、これらの地山は、僅か2.4mしか離れていない南-B調査区からは、全く検出されず、旧河道を思わせる10～30cmの円礫を多く含む砂礫層が1m以上も堆積していた。従って、南-B～C間にトレーナーを設定（南-B～C間拡張区）して調査した。その結果、南-Cから続く地山は、2mぐらいまで西に傾斜しながら続くものの、その先は急激に落ち込んでいくため検出できなかった。南-B調査区あたりから旧河道になるものと思われる。

おそらく枕木山と忠山が形成する谷を源流とする千ヶ川は、何度も氾濫を繰り返し、土砂を堆積してきたことであろう。その痕跡を、耕作土から0.5m下で垣間見ることが出来た。また、山際で検出された地山やそれに伴う遺物は、すぐ東に隣接する丘陵地に、弥生時代後期～古墳時代前期の生活の場があったことを物語っている。



第36図 南-A-1 ~ 南-A-3 調査区土層断面図 (S = 1 : 100)



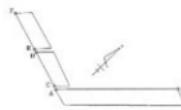
A - B 間上層断面図



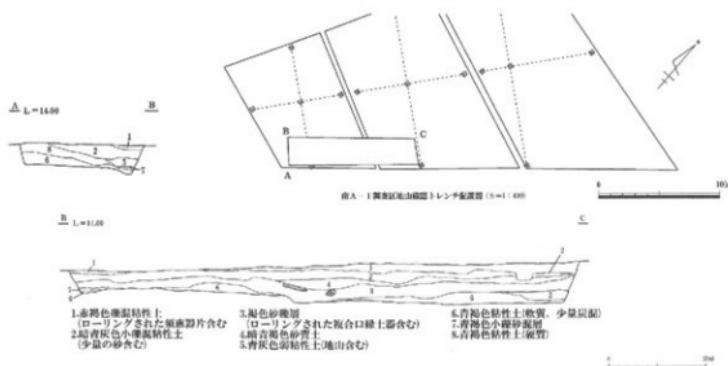
C - D 間土壌断面図



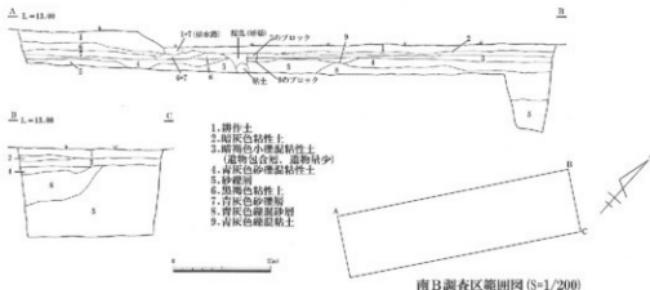
E - F 間土壌断面図



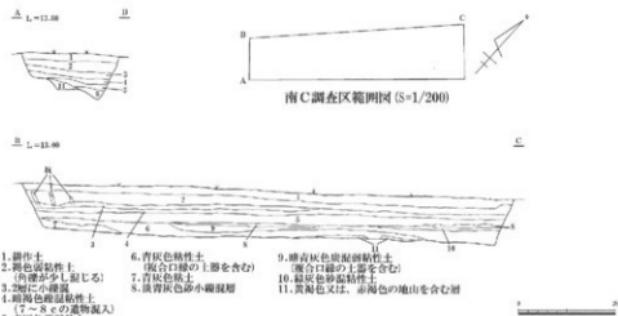
第37図 南A-4 調査区土層断面 ( $S = 1 : 100$ )



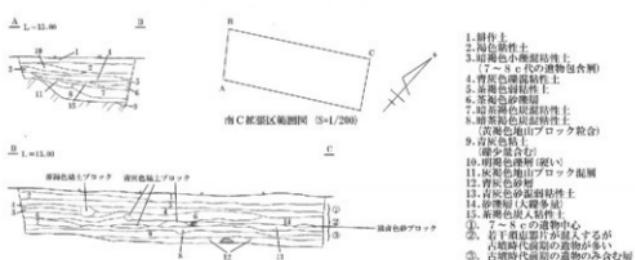
第38図 南A-1 調査区地山確認トレンチ土層断面図 ( $S = 1 : 100$ )



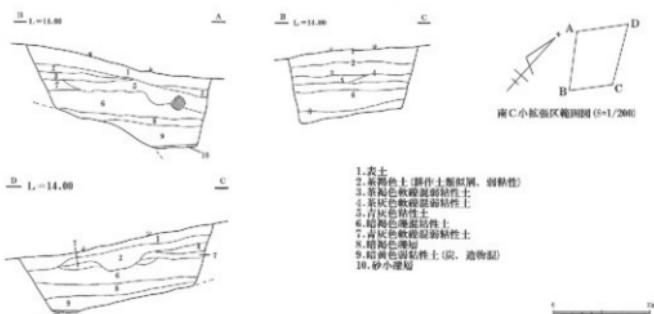
第39図 南-B調査区土層断面図 (S=1:100)



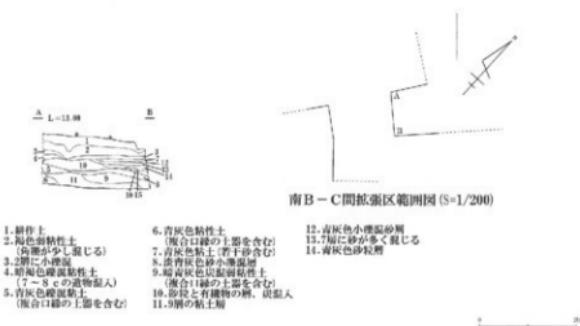
第40図 南-C調査区土層断面図 (S=1:100)



第41図 南-C拡張区土層断面図 (S=1:100)



第42図 南-C小拡張区土層断面図 ( $S=1:100$ )



第43図 南B-C間拡張区土層断面図 ( $S=1:100$ )

## (エ) 遺 物

ここでは、まず遺構ごとの遺物について触れたのち、各調査区から出土した遺物について、説明を加えたいと思う。

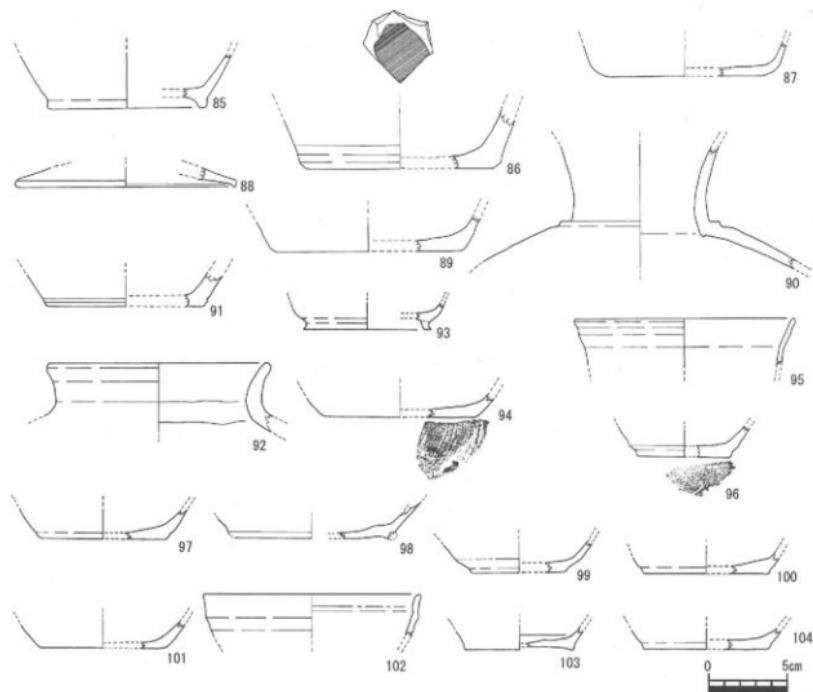
### (S B-01) (第44図 SB-01関連遺物) 85~104

検出面である第4層の精査中に、出土した遺物を記す。85~97の遺物が、実測できた遺物で全て須恵器である。85は、高台付坏である。高台断面がやや丸みを帯び、体部は直線的に外傾するもの。高台径10cmを測る。高広編年IV期のものであろう。86は、底部の破片であるが器種はよくわからない。底径12.0cmを測る。体部外面は、ヘラ削り後ナデが施され、底部はヘラ削り後未調整である。また、底部内面に漆が付着している。87は、坏身である。底径10.0cmを測る。器肉は薄い。残念ながら、摩滅のため調整はわからない。88は、坏蓋である。つまみが付くものであるが、その形状はわからない。口径14.0cmを測る。高広編年III~IV期のもの。89は、坏と思われるもの。底径12.0cmを測る。底部外面に、回転糸切り痕を残している。高広編年IV期のものであろう。90は、肩に段を有する長頸壺である。肩の部分の径は、8.6cmを測る。91は、底部片である。坏であろうか。残存部は器肉が厚く、底径10.0cmを測る。92は、甕であろうか。口縁部が外方にあまり開かないもの。口径14.0cmを測る。93は、小振りの高台付坏である。器肉も薄く高台径8.2cm、高台高さ0.5cmを測る。94は、坏身の底部である。外面に回転糸切り痕を残している。底部径9.6cmを測る。95は、坏の口縁部であろうか。器肉は薄いが堅緻である。口径14.0cmを測る。96・97は、焼成不良の須恵器の坏である。96は、底部に回転糸切り痕を観察できる。高広編年V期のもの。

以上見てきたように、検出面の遺物は、高広編年III~V期までと非常に幅がある。このことは、S B-01は、それより新しいと考えられる資料である。

### (S B-01柱穴内出土遺物) 98~104

98~104は、ピット内から出土した遺物である。98は、P-1から出土した焼成不良の須恵器の高台付坏である。かなり摩滅している。高台径は、約10.0cmを測る。99も、P-1から出土した焼成不良の須恵器の坏底部である。底径6.0cmを測る。100は、P-3から出土した焼成不良の須恵器の坏底部である。回転糸切り痕を観察できる。底径8.0cmを測る。101は、P-6から出土した須恵器の坏底部である。底径8.0cmを測る。102~104は、いずれもP-7から出土した須恵器の坏である。102は、口縁部が内湾したのち外反するもので、口径13.8cmを測る。103~104は、いずれも焼成不良の須恵器の坏底部である。いずれも摩滅が著しいが、104は、底部外面に回転糸切り痕を残している。それぞれ底径は、7.0cmと8.0cmである。これらの遺物から、S B-01の時期は、高広編年のV期以降、実年代では9世紀中頃であろうか。ただし、第4章2の渡邊正巳氏の埋土のC14分析では、奈良時代~平安時代前半という結果が提出されている。



第44図 SB-01関連遺物 (S = 1/3)

(SX-01関連遺物) (第45図 SX-01関連遺物) 105~170

#### 【南-C調査区の遺物】

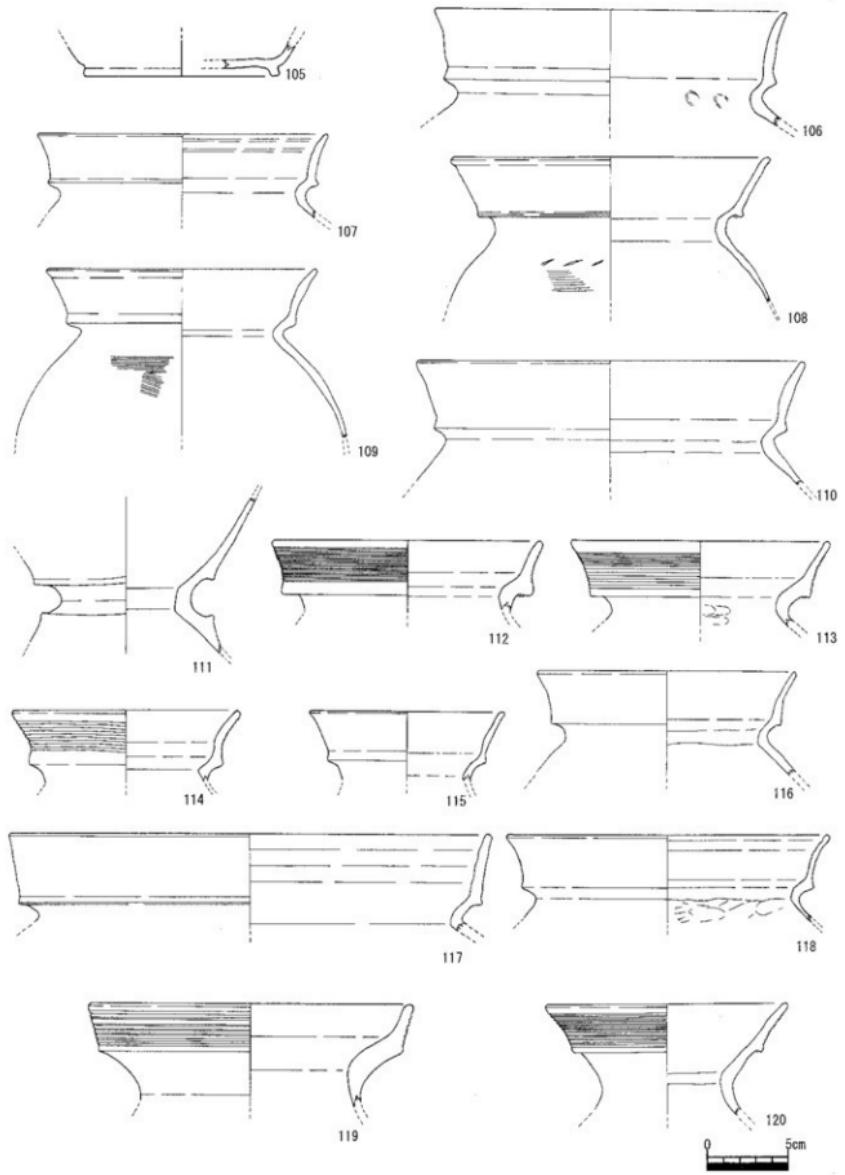
南-C調査区の遺物をみると、耕作土下第2層から須恵器の高台付环(105)が出土しているが、それ以外は、弥生時代後期～古墳時代前期までの遺物である。106～110は、同じ土層から出土した複合口縁の甕片である。口縁部が緩やかに外反し、端部がほそくすぼまるものや(106, 109, 110)、口縁部内面に2条の凹線を施すもの(107)、肩に貝最刺突文を施し、口縁部が直線的に外傾して端部が肥厚するもの(108)がある。それぞれの口径は、106が21.0cm、107が18.0cm、108が20.0cm、109が16.8cm、110が24.0cmである。111は、鼓形器台である。器受部内面はヘラ磨き、筒部と脚台部内面は、ヘラ削りが施される。出雲・隱岐V-4様式に属するものか。112～125は、第2層と第3層の界面、及び第3層から出土した遺物である。112～118は、複合口縁を持つ壺の口縁部である。112～114は、口縁部に擬凹線文をめぐらすもの。112は、器肉の厚いもので僅かに外反しながら端部に至るもので端部は丸い。口径は、16.6cmを測る。113は、若干シャープに外反して端部に至るもの。端部は丸い。口径

は、16.0cmを測る。114は、内湾したあと、外反し端部に至るもの。端部は、若干角張る。口径は、14.0cmを測る。115～118は、口縁部が無文の甕である。115は、小型の甕で口径は、12.0cmを測る。口縁部は、外反して端部に至るが、端部が若干平坦になるもの。116は、外反すると同時に器肉が薄くなり端部に至るもの。口径は、16.0cmを測る。117は、大型の甕である。口縁部内面に凹凸を持つもの。口径は、30.0cmを測る。118は、口縁部は、緩やかに外反しながら端部に至るもので、端部は丸い。内面に凹線文状の瘤みを巡らすもの。口径は、20.0cmを測る。119～121は、いずれも口縁部に擬凹線文をめぐらす甕である。119は、口縁部は直線的に外傾し端部に至るもので、器肉は厚い。口径、頸部径は、それぞれ20.0cmと13.7cmを測る。120は、口縁部が大きく逆への字型に開くもの。口径、頸部径は、それぞれ15.0cmと8.2cmを測る。121は、口縁部が外方ににつばるように外傾して端部に至るもので、器肉は厚い。口径は、10.0cmを測る。122は、高环か鉢の口縁部であろう。口径は、22.0cmを測る。123・124は、鼓形器台である。123は、脚台部が欠損している。ともに器受部は、外反して大きく開くもの。筒部は短くて太い。124の調整は、器受部はヘラ磨き、脚台部は、ヘラ削り調整を施すもの。123の内面調整は、摩滅のためわからない。123の口径は、26.6cmを測る。124は、口径22.8cm、筒部径12.6cm、脚台部径20.0cm、器高12.5cmを測る。125は、蓋と思われるもの。口径16.0cmを測る。これらの遺物は、すべて出雲・隱岐V様式に属するものである。

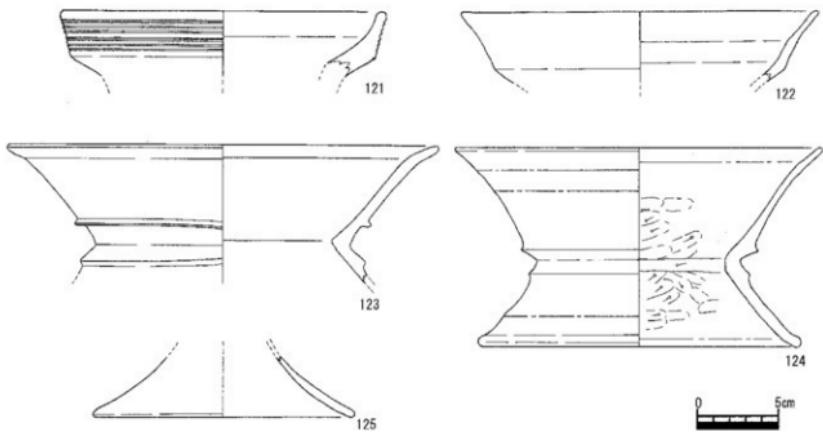
#### 【南-C拡張区の遺物】（第45図 SX-01関連遺物南-C拡張区）126～170

南-C拡張区の遺物は、すべて出雲・隱岐V様式～古墳時代前期に属すると思われる。南-C調査区の遺物と同様に、これらの遺物で2～3層から出土した遺物は、残存状態も悪く、小片が多い。ローリングを受けた遺物なので、SX-01に伴うとは考えにくい。しかし、そう遠くないところに生活遺跡があったことは間違いない。126～138までが、第3層までの遺物である。いずれも時期的には、出雲・隱岐V-3様式以降のものである。126は、口縁部に凹線文をめぐらすもので甕と考えられる。口径20.0cmを測る。127は、緩やかに外反する口縁部である。甕であろうか。口径14.8cmを測る。128は、甕の口縁部。端部が外反し、僅かに肥厚するもので、口径17.8cmを測る。129は、鼓形器台の器受部である。口縁部が大きく開くもので、内面はヘラ磨きが施してある。口径27.4cmを測る。130は、大型の甕である。口径32.8cmを測る。131も、大型の甕の口縁部であろうか。口径27.6cmを測る。132は、鼓形器台の筒部である。筒部径は、14.8cmを測る。133は、凹線文をめぐらす甕であろうか。口径16.0cm、頸部径13.4cmを測る。134は、鉢であろうか。体部から緩やかに内湾し、外傾したのち端部に至るもので、端部は角張る。口径16.0cmを測るもの。135は、甕であろうか。口縁部に擬凹線文をめぐらす。口径18.0cmを測るもの。136も甕であろうか。摩滅しているが僅かに凹線文を認めることが出来る。口径16.0cmを測る。137は、鼓形器台の器受部と思われるもの。138は、鼓形器台の筒部である。139～152は、第4層出土遺物である。139～146は、甕の口縁部である。139は、端部が外反しそれとともに薄くなるもので、口径22.0cmを測る。140は、逆にはぼ直線的に伸び端部に至るもので、端部は若干肥厚する。口径20.0cmを測る。141は、口縁部が大きく開くもので、薄い作りのもの。口径16.0cmを測る。142は、比較的厚手の作りで端部は丸い。口径16.0cmを測る。143は、口縁部が短くほぼ直立するもので、口径18.0cmを測るもの。144は、口縁部の中央が肥厚するもの。口径18.0cmを測る。145

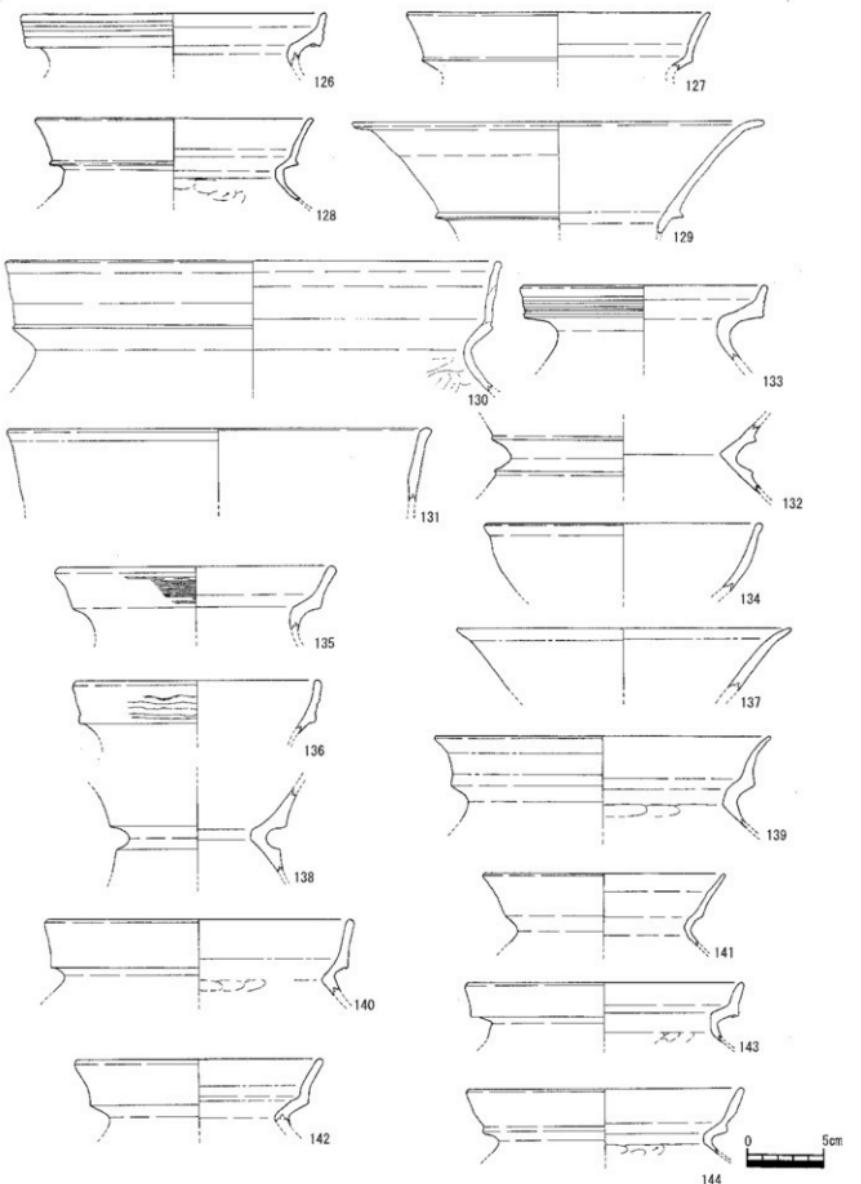
は、体部外面に刷毛目調整を施したもの。口径14.0cmを測る。146～148は、器種が不明である。146は、口径16.0cmを測るもの。147は、144と同じように口縁部の中央が肥厚するもので、口径も同じもの。148は、シャープに外傾して端部に至るもので、端部は角張る。口径18.0cmを測る。149は、鼓形器台で内面は、ヘラ磨き調整を施すもの。受部径は、21.8cmを測る。150は、鉢である。外面には煤が付着している。内面は、ヘラ磨き調整を施す。口縁部外面に、凹みをめぐらせ端部に至るもの。端部には平坦面を作る。口径27.8cmを測る。151・152は、蓋である。151は、内外面ともにヘラ磨き調整を施している。外面には、更に赤色塗彩している。口径14.0cm、残存高6.0cmを測る。つまみが上部に付くが、形状は不明である。152は、外面はハケ目調整の痕跡が残る。内面の調整は摩滅のため不明である。口径16.0cmを測る。153～167は、第4～5層出土遺物である。153～161は、壺片である。その中の153～157は、口縁部はどっしりと厚めで外面に凹線文または、擬凹線文をめぐらすもの。ただし、154の施文は雑で、157は摩滅しているが僅かに施文が観察できるもの。口径は、153・154・157は22.0cm、155は17.8cm、156は20.0cmを測る。158は、口縁部がほぼ直立する小型のもの。摩滅しているが凹線文を確認できる。口径は、12.0cmを測る。159～161は、無文のもの。159は、口縁部がやや内傾して端部に至るもの。端部は丸い。口径は、24.0cmを測る。160は、口径14.0cmと小型ではあるが、口縁部が3.5cmと長い。内外面ともに摩滅している。161は、口縁部が緩やかに外反するもの。端部は丸い。口径20cmを測る。162～167は、第5層の出土遺物である。162～164は、壺片である。162は、口縁部が短く立ち上がり外反するもので、端部は丸い。口径16.0cmを測る。163は、口縁部が「く」の字に立ち上がるもので端部は丸い。口径16.0cmを測る。164は、この場所で壊れたと思われるような壺で、底部は丸い。体部外面は、ハケ目調整。内面上部は、ヘラ削りを施し、底部はハケ目調整をしている。口縁部は、内外面ともにナデている。口径26.0cm、器高37.1cm、体部最大幅は、36.0cmを測る。165は、壺か壺の口縁部である。口縁部は直線的に外傾し、端部に至るが、端部は少し肥厚し水平になる。口径29.4cmを測る。166は、器種不明品である。残存部は、ラッパ状に開いた筒になっている。筒部径は中央で2.3cmを測る。ラッパ状の端部径は、3.7cmを測る。孔径は、中央で1.3cmを測る。残存部の最大長は、7.1cmである。167は、ほぼ完形であるが蓋になるのか、それとも器台なのか用途不明品である。166と同様に筒状になっているが、筒部の中央径が3.5cmあるのに対して、孔は約0.9cmと小さい。また、孔は中心からはずれたところに空けられていて、上下ともに内側に凹みをつけている。器高4.1cm、底部径5.5cm、上部径推定3.5cmを測る。168～170は、調査区の最下層である砂礫層から出土したものである。168は、蓋と思われるもの。口径21.4cmを測る。残存部外面はナデ調整され、内面は口縁部がヘラ磨き、それ以外はナデである。169は、鼓形器台である。筒部付近しか出土していない。調整は、器受部がヘラ磨き、脚台部がヘラ削りである。筒部径12.0cmを測る。170は、鼓形器台の器受部であろう。大きく開く受部で、その径は25.4cmを測る。



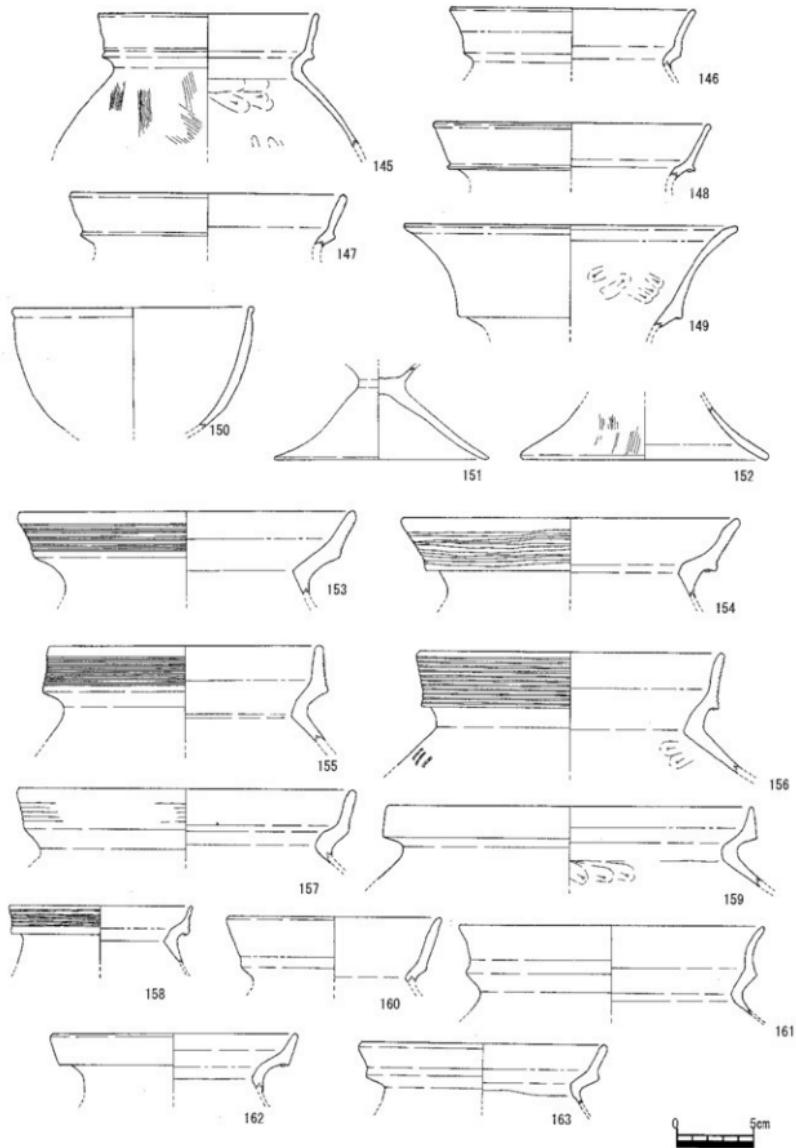
第45図 SX-01関連遺物南-C拡張区 (S = 1 / 3)



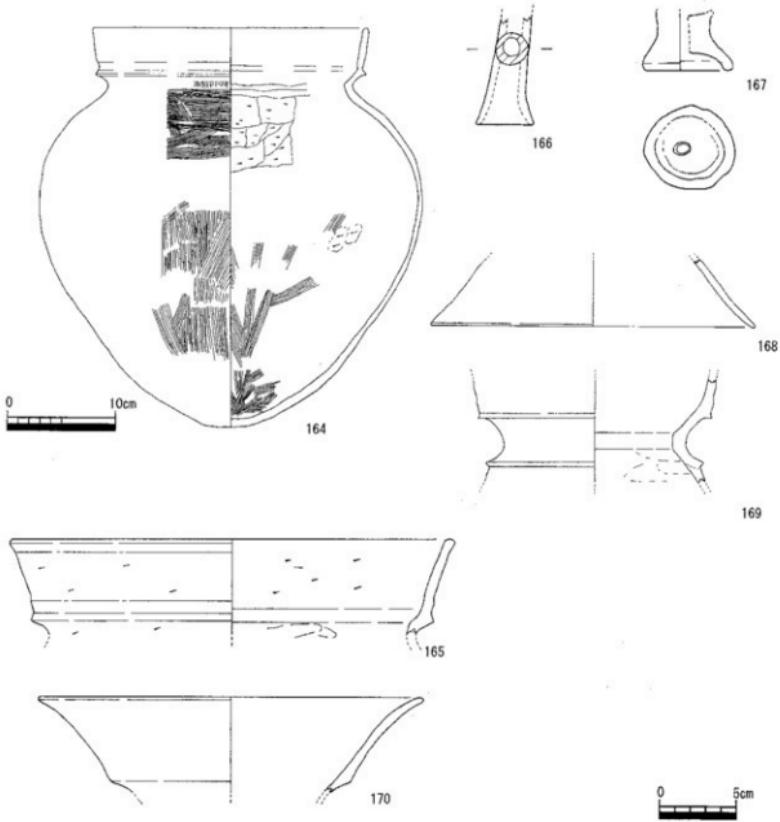
第45図 SX-01関連遺物南-C 拡張区



第45図 SX-01関連遺物南-C拡張区 (S = 1/3)



第45図 SX-01関連遺物南-C拡張区 (S = 1 / 3)



第45図 SX-01関連遺物南-C拡張区 (S=1/3)

(SX-01周辺の遺物) (第46図 SX-01周辺の遺物) 171~178

**【南-C小拡張区・南-B～C間拡張区・南-B調査区の遺物】**

171~173は、南-C小拡張区最下層出土の土器である。171は、複合口縁部の破片である。器種は不明。口径22.0cmを測る。172・173は、低脚坏である。172は、口径11.4cm、脚径5.4cm、器高4.3cmを測る。1/3が欠けていた。173は、口径12.0cm、脚径5.2cm、器高4.7cmを測る。

174~177は、南-B～C間拡張区から出土したもの。174・175は、第4層から出土した。174は、複合口縁の壺である。口径22.0cmを測る。175は、須恵器の壺である。口径48.4cmを測る。176は、凹線文をめぐらす複合口縁の壺の口縁部である。口径20.6cmを測る。177は、地山に密着して出土した平

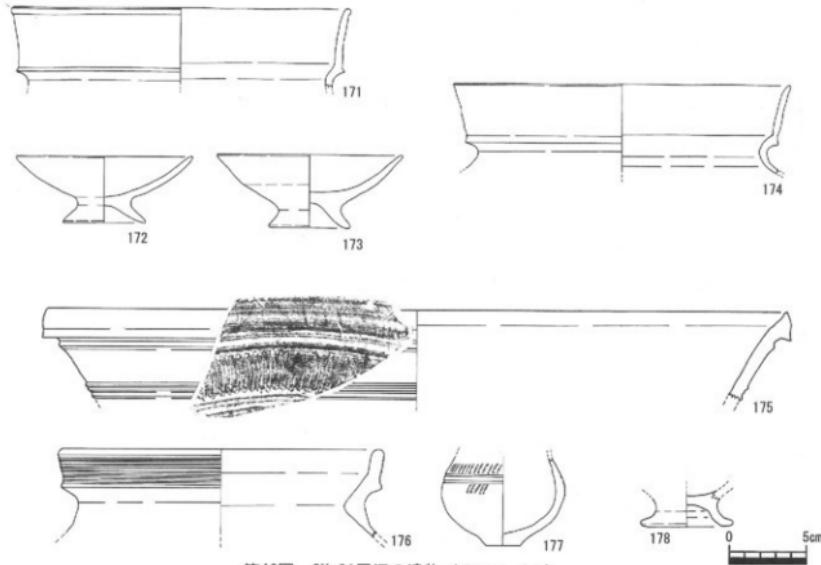
底の小型壺である。残念ながら口縁部は欠損している。体部中央よりやや上方に2条の沈線を施し、その下を貝殻刺突文で飾っている。出雲・隱岐III様式に属するものであろうか。

178は、南-B調査区の第4層から出土した遺物である。低脚壺の脚部と思われるもの。脚部径6.0cm、脚部高1.5cmを測る。

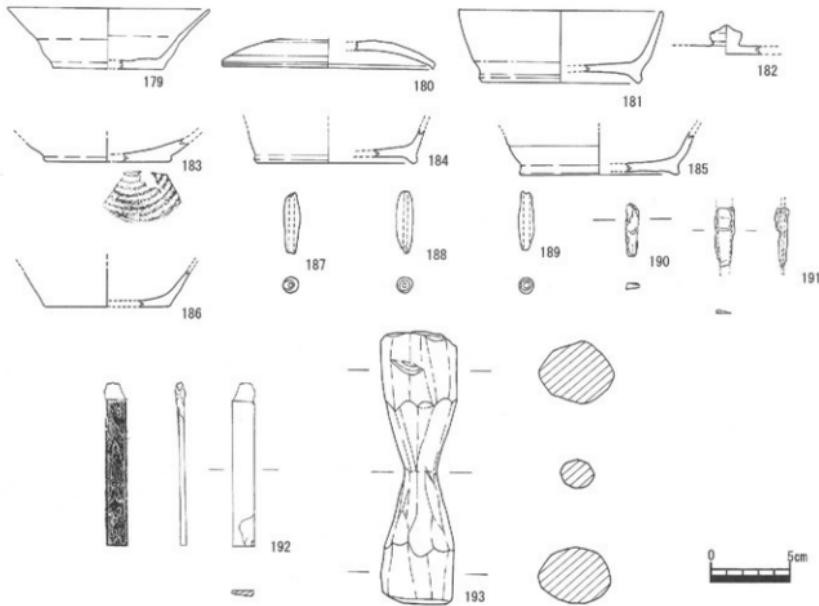
(その他の調査区の出土遺物)

【南-A-1・南-A-2調査区の遺物】(第47図 その他の調査区の出土遺物) 179~193

179は、南-A-1調査区第3層出土の焼成不良の須恵器の壺である。口縁部が大きく外反し開くもの。薄手の作りである。口径12.8cm、低径7.0cm、器高3.8cmを測る。高広編年V期のものか。180は、南-A-2調査区第4層出土の須恵器の蓋壺の蓋である。つまみの形状は不明である。外面1/2にへラ削り痕跡を明瞭に残す。蓋径13.4cmを測る。高広編年III期のもの。181は、南-A-1調査区第5層出土の高台付壺である。高台が外方に張り出すもの。口径12.8cm、高台径10.4cm、器高4.6cmを測る。高広編年IV期のもの。182は、南-A-2調査区第5層出土の蓋壺の蓋である。擬宝珠つまみのみ出土した。宝珠径2.0cm、宝珠高1.3cmを測る。高広編年IV期のもの。183は、南-A-2調査区第5層出土の須恵器の壺である。底部がつぶれたように平らになるもの。底径8.0cmを測る。高広編年V期のものか。184は、南-A-2調査区第5層出土の高台付壺である。高台が外方に張り出すもの。高台径9.0cmを測る。185は、南-A-1調査区第5層出土の高台付壺である。高台が短く外方に張り出すもの。高台径10.1cmを測る。184とともに高広編年IV期のもの。186は、南-A-1調査区第5層出土の壺である。底径8.0cmを測る。187~189は、いずれも南-A-1調査区出土の土錘である。187は、第3層出土のもの。残存長3.85cm、孔径0.3cm、最大幅1.0cmを測る。188は、第5層出土のもの。残存長4.0cm、孔径0.3cm、最大幅0.95cmを測る。189も、第5層出土のもの。残存長3.75cm、孔径0.4cm、最大幅1.0cmを測る。190~192は、金属製品である。190は、南-A-1調査区第3層出土の刀子か鐵鎌の破片と思われるもの。191は、南-A-2調査区第3層出土の刀子の破片である。192は、南-A-2調査区第4層出土小柄の柄の部分である。鉄の茎に銅板を巻いて魚と波が象眼されているもの。柄長10.5cm、幅1.4cm、厚さ0.4cmを測る。193は、木製品である。南-A-2調査区第3層から出土している。短く切断した芯持ち材の両端近くから中央に向かって削りこむ「木錘」4類である。長さ17.4cm、最大幅4.8cm、最小幅2.1cmを測る。



第46図 SX-01周辺の遺物 (S = 1 / 3)



第47図 その他の調査区の出土遺物 (S = 1 / 3)

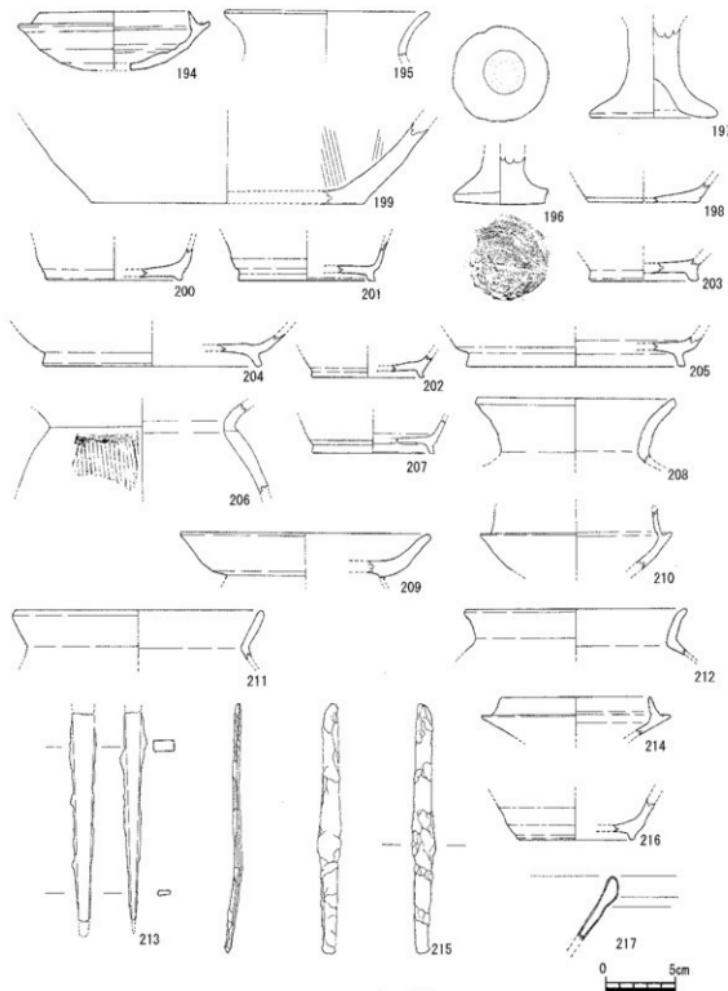
### 【南-A-3・南-A-4 調査区の遺物】（図48 南-A-3・南-A-4 調査区の遺物）194～224

194～213は、南-A-3 調査区出土の遺物である。194は、第3層出土の須恵器の坏身である。口縁端は鋭く三角形を呈するもので、受部の作りも丁寧である。薄手の作りである。口径11.0cm、受部径14.0cm、推定器高4.3cmを測る。高広編年Ⅰ期のもの。195は、土師器の壺の口縁部である。口径15.0cmを測る。196は、第3層出土の土師質の柱状高台である。底径6.7cm、脚柱部径3.1cmを測る。12～13世紀のもの。197も土師質の高坏脚部である。赤色塗彩されている。脚底部径9.4cm、脚柱部径3.6cmを測る。6世紀代のものであろう。198は、土師質の坏であろうか。底径8.0cmを測る。底部外面に回転糸切り痕を残している。199は、第4層出土の備前焼きのすり鉢である。200～202は、須恵器の高台付坏である。200は、第4層出土で高台が非常に短いもの。高台径9.6cm、高台高0.6cmを測る。高広編年V期のものか。201は、第5層出土から出土している。高台が僅かに外方に張り出すもの。端部は鋭い。高台径10.0cm、高台高0.8cmを測る。高広編年IV期のもの。202も、第5層出土のもの。高台は細く外方に張り出すもの。端部は丸い。高台径8.2cm、高台高0.6cmを測る。高広編年IV期のものか。203も、高台付であるが、瓦質である。或いは焼成不良のものか。高台や底部の器肉も厚いが、端部は丸い。高台径6.8cm、高台高0.8cmを測る。204～205は、須恵器の盤である。204は、底部に回転糸切り痕を残すもの。高台径15.8cm、高台高1.0cmを測る。205は、残存部が少ないため底部の糸切り痕は観察できない。高台径15.0cm、高台高1.0cmを測る。いずれも高広編年IV期のものか。206は、須恵器の壺であろうか。頸部径13.4cmを測るもの。207は、須恵器の高台付坏である。底部は回転糸切り後、ナデ調整している。高台径9.0cm、高台高0.7cmを測る。高広編年IV期のものか。208は、土師器の壺であろうか。口径14.3cmを測る。209は、須恵器の高台付皿である。器肉の厚いものだが、高台は細い。口径18.0cm、残存高3.4cmを測る。高広編年IV期のものか。210は、須恵器の坏身である。作りの丁寧なもの。器形や端部が全体的に丸い作りである。受部径14.0cmを測る。出雲II期のものか。211～212は、土師器の壺である。211は、口径18.0cmを測るもの。212は、口径16.0cmを測るもの。213は、鉄製品である。これも第5層から出土している。船釘と思われるものである。残存長15.3cm、幅1.5cmを測る。角釘である。

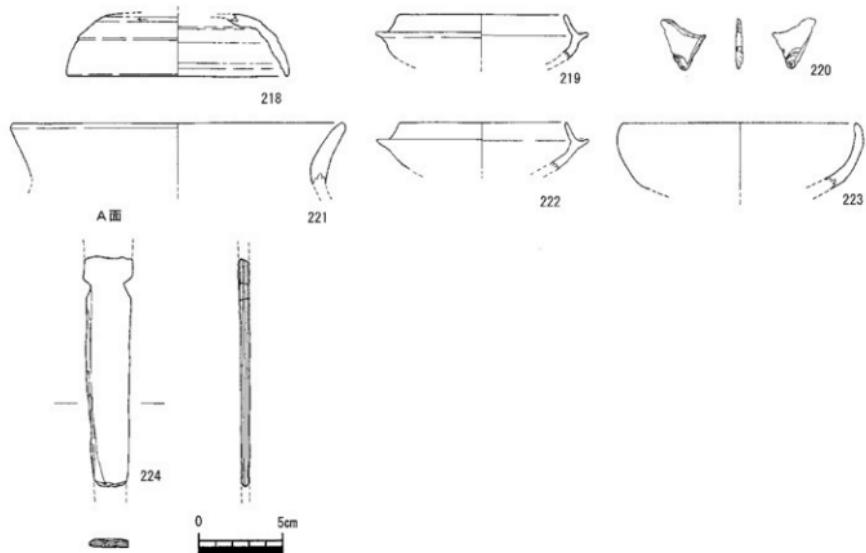
214～224は、南-A-4 調査区出土の遺物である。214は、第3層出土の須恵器の蓋坏の坏身である。口径10.8cm、受部径13.8cm、を測る。高広編年Ⅰ期のもの。215は、同じく第3層出土の刀子である。推定刃長11.0cm、茎残存長7.4cmを測る。216は、須恵器の高台付坏である。残存部が少ないため切り離しは不明。高台径8.0cm、高台高0.5cmを測る。高広編年IV期のもの。217は、第4層出土の中国白磁の碗の口縁部である。口縁部を玉縁にするもので、12世紀頃のもの。218～223は、第5層出土遺物である。218は、蓋坏の蓋である。大井部外面に回転ヘラ削りを見ることが出来る。推定口径13.2cm、推定器高3.8cmを測る。219は、蓋坏の坏身である。推定口径10.0cm、推定受部径12.8cmを測る。218とともに高広編年Ⅰ期のもの。220は、黒曜石の剥片である。221は、土師器の壺口縁部で口径20.8cmを測るもの。222は、219と同様な坏身である。推定口径10.0cm、推定受部径12.8cmを測る。223は、土師器の碗である。全体に赤色塗彩してあるもの。推定口径14.0cm、を測る。224は、「付札木簡」である。第3層（床土の下）から出土している。型式的には木簡学会でいう031～039型式にあたるもの

で、墨書きの書かれ方から判断すると、公的なものより私的なものである可能性が高い。時期的には、中世～近世のものと思われる。残存長13.8cm、最大幅2.7cm、厚み0.7cmを測る。墨痕は、A面が、「小馬」或いは「小鳥」、「小為」などと説めそうであるが、B面は、全くわからない。(註1)

(註1) 島根県立古代出雲歴史博物館 専門研究員 野々村 安浩氏のご教示による。



第48図 南-A-3 南-A-4 調査区の遺物 (S=0)



第48図 南-A-3・南-A-4調査区の遺物 (S=0)

#### 4.まとめ

中殿遺跡からは、平安時代の掘立柱建物(SB01)やそれに関連する杭列、弥生時代後期の遺物と共に検出された河岸段丘(SX01)を調査成果として、得ることができた。平安時代の掘立柱建物は、礫層から検出されたが、この礫層が自然災害で堆積したものであればその下層からは、更に古い水田等の遺構が存在することも想定される。これらの調査区で地山確認トレーニング調査を実施した結果、トレースするように南北に地山が続き、西に向かって落ち込んでいくのを確認している。

また、19年度の中殿遺跡の北側の調査では、摩滅した弥生時代後期の遺物が殆どだったが、20年度の調査では、ローリングを受けていない遺物の比率がかなりあった。これは、この時代の遺構が周辺に所在する証拠であると考えることができ、「千駄太田遺跡」の堅穴住居跡の発見と併せて考えてみれば、この地域の弥生時代後期の居住区が、微高地に所在していたと推定することができる。

### 第3節 平成20年度修理田遺跡の調査

#### 1. 平成20年度修理田遺跡の調査の方法（第3図 千酌文化財調査位置図参照）

中殿遺跡の調査が10月30日をもって終了したので、諸準備が整った11月12日から修理田遺跡の調査にとりかかった。まず、耕作土置場と排土捨場を調査区外の北の水田に確保した都合上、中央の調査区から東1区として、取りかかった。その北の水田を東2区、南の畑を東3区と呼称した。遺物は、耕作土の除去作業中から摩滅したものが多数出土したので、採集できるものは取り上げた。東1～2区は、同時に調査にかかったが、東3区は最後に耕作土を除去して調査した。現場調査は2月25日までで終了し、2月26日には、後片付けを行い3月2日～3日で埋め戻して現場を終了した。

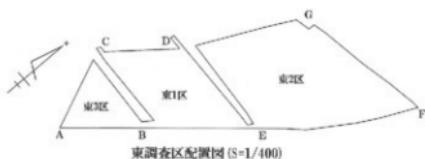
#### 2. 層序（第49図 東調査区土層断面図）

東1区の耕作土を除去すると、地山を盛り合わせたような床土があった。この床土は各調査区に共通で、約20～30cmの厚みがある。その下の第3～4層は、かなり多量の5～10cmの小礫を含んでいる。その下層は、10～40cmのかなり大きな礫を含んだ第5～6層が続き、第7層は、少量の大礫を含んだ砂質土層で、最下層の第8層は、これも少量の大礫を含んだ粘性土である。第5～6層までが遺物包含層である。地元での聞き取りの結果、この一帯の田は、かなり新しい時代に作られたとのことであるので、これらの礫は、人工的に運んで埋めたとも考えられる。

なお、島根大学 総合理工学部 准教授 酒井 哲弥氏によると、「谷の入口部分にあたる場所で、水害等による土石の堆積被害を受けやすい場所であり、この礫層は、それによるものとも考えられる。」とのことであった。

東2区は、第4層までは基本的に東1区の土層堆積と同じであるが、その下に黒褐色の有機物を大量に含んだ層があった。この層は、東1区と2区の境付近から徐々に厚みが増して、調査区の北では60cmあった。酒井 哲弥氏によると、「湿地帯であったことを物語っている」層である。この土層については、渡邊氏に分析を依頼していて、飛鳥～中世以前の沼沢の堆積土層という結果が提出されている。この黒褐色土層の下は、砂礫層が厚く堆積している。

東3区では、第2層の床土から掘り込まれたピット数穴を検出したが、不整形のピットで浅いため近代の掘立小屋と判断した。また、第3層目からの層序も東1区と同様である。上層から第5～6層目までが遺物包含層で、その下は無遺物層である。



東調査区配置図 ( $S=1/400$ )



A - B 間上層断面図



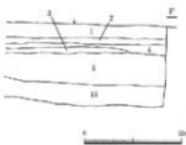
C - D 間土層断面図



E - F 間上層断面図



G - H 間上層断面図



第49図 東調査区土層断面図 ( $S = 1 : 100$ )

- |               |                   |
|---------------|-------------------|
| 1.耕作土         | 18.暗褐色膠泥粘性土       |
| 2.栗褐色砂質土      | 19.暗赤褐色泥炭土        |
| 3.灰色粘性土       | 20.暗灰褐色泥炭土        |
| 4.腐泥土・小礁少砂類   | 21.暗灰褐色泥炭土        |
| 5.淡褐色砂質土      | 22.暗灰褐色泥炭土        |
| (礁くしまつている)    | 23.暗灰褐色泥炭粘性土      |
| 5.淡褐色大礁砂質粘性土  | 24.12割に黄褐色土・2割が混入 |
| (礁くしまつている)    | 25.青灰色砂礫層(若干礁土層)  |
| 6.淡褐色砂質土      |                   |
| 7.淡褐色中大礁少量粘性土 |                   |
| 8.淡褐色中大礁土質粘性土 |                   |
| 9.淡褐色膠泥粘性土    |                   |

### 3. 遺物

#### 【東1区の出土遺物】（第50図 東1区の出土遺物）225～278

225～237は、第2層（床土）出土遺物である。225～228は、須恵器の壺である。225は、高台壺で高台径9.8cm、高台高0.8cmを測る。226は、壺で口径14.8cm、底径12.0cm、器高3.5cmを測る。高広編年IV期のもの。227も、壺で非常に薄手のもの。口縁端部が僅かに玉縁状になる。口径14.0cmを測る。308は、壺で口径14.0cm、器高4.1cmを測る。高広編年IV期のもの。229～233は、須恵器の蓋である。229～231は、輪状つまみを付けるもので、232～233は、宝珠つまみを付けるもの。高広編年III～IV期のもの。234～235は、須恵器の壺である。234は、平底で低径6.0cm、体部最大径14.4cmを測る。235は、高台の付く長頸壺であろうか。肩の部分の径は、20.0cmを測るもの。高広編年III期のものか。236は、土師器の甕である。口径29.8cmを測る。237は、獸脚である。何の脚部かは不明であるが、踵や裏側も削って表現したり、底部が安定するように磨きを入れるなど、丁寧な作りをしている。脚高5.1cm、最大幅3.1cm、最小幅2.1cmを測る。出雲国府跡（註1）や山津窯跡（註2）で同様な獸脚が出土している。238～264は、第3層出土の須恵器である。238～243は、壺である。238・239は、高台壺である。238は、浅く作られている。高台から丸みを帯びて口縁端部に至るもの。口径12.8cm、高台径9.0cm、高台高0.9cm、器高4.3cmを測る。239は、器肉の厚いもので、高台の接地面には段がある。高台径7.2cm、高台高0.8cmを測る。いずれも高広編年IV期のもの。240～243は、無高台の壺である。ただし、242は、鉢になるものか。240は、口径14.8cm、底径11.5cm、器高3.0cmを測るもの。高広編年IV期の壺である。241は、底径7.6cmを測るもの。242は、壺か鉢である。体部は凹凸を繰り返しながら僅かに外反し端部に至るもの。口径12.0cmを測る。243は、240より少し下から出ているが同様なもの。244は、須恵器の皿である。口縁部が湾曲している。口径15.7cm、高台径11.5cm、器高3.25cmを測るもの。高広編年IV期のもの。245～254は、蓋である。245～251は、輪状つまみが付くもの。つまみの形状は、245～250までが、端部を四角に作るもので、251は、つまみ内面からなだらかに引き出したような形状である。内面にかえりが付くもの。調整は、ナデ調整で糸切り痕は見えない。252は、宝珠つまみの付くもの。253と254は、端部のみのもの。内面にかえりが付く253と屈曲して端部に至るもの254がある。245～254まで高広編年III～IV期のもの。255～257は、高壺である。それぞれ脚部に2条の沈線で区画した後、2段透かしを施すが、上段は、切り込みのみとしているもの。高広編年I期のもの。257は、脚の接合部のみの破片である。258は、甕であろうか。259は、甕である。口縁端部は湾曲している。口径20.0cmを測る。260は、把手付きの鉢か鍋であろうか。外面は平行タタキのあとカキ目を施している。内面は同心円状当具痕が残る。261も鉢か鍋であろうか。口縁部はナデしているが、それ以外は、タタキ痕が残る。262は、陶器の甕である。薄手の作りで、頸部からなだらかに内湾して、端部に至るもの。端部は丸い。口径18.0cmを測る。263と264は、托である。どちらも似た作りをしているが、264の方が大型品である。高台の付いた皿の内面に、断面3角形の突帯が巡るもの。265～270は、第3層出土の土師器の甕である。265は、口径25.8cmを測るもの。266は、頸部から口縁部にかけて「く」の字に屈曲するもの。端部は丸く僅かに内面で肥厚する。口径20.0cm、頸部径16.6cmを測る。267は、口径20.4cmを測るもの。268は、口縁部が大きく開くもので、口径22.4cmを測るもの。269

も同様なもの。口径22.0cmを測る。270は、大型品である。口径31.1cmを測るもの。271は、瓶の底部である。内面にヘラ削り痕、外面にハケ目調整が見られる。底部から1cm上に孔が開けられている。低径10.4cmを測る。272は、小型の壺である。体部内面は脂頭圧痕を残す。口縁部と体部外面は、ナデている。口径9.7cmを測る。273と274は、土製支脚である。273は、小型のもので器高14.0cmを測る。底部は僅かに内面をくり抜く。274は、ハケ目調整を施すもの。器高19.8cmを測る。275～277は、土師器の把手である。277は、支脚の可能性もある。278は、第4層出土の須恵器の高台壺である。高台が内面に肥厚するもの。高台内は回転ヘラ削り後、ナデ調整している。高台径9.2cm、高台高1.0cmを測る。

(註1)「史跡出土国府跡」4日岸田地区の発掘調査 2006年3月 島根県教育委員会

(註2)「大井塚跡群・山津塚跡・山津遺跡発掘調査報告書」第2分冊 2006年 松江市教育委員会

財団法人松江市教育文化振興事業団

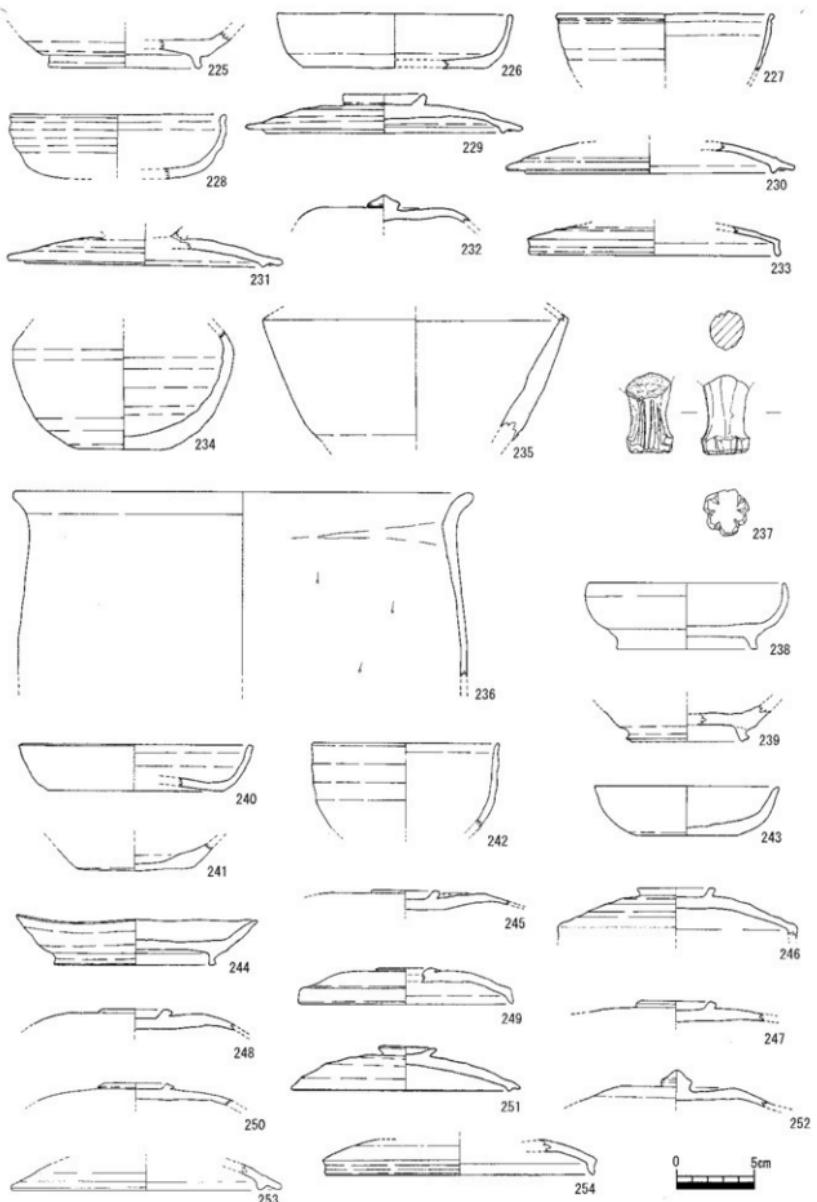
#### 【東2区の出土遺物】(第51図 東2区の出土遺物) 279～296

279～282は、第3層出土遺物である。279と280は、白磁の碗である。279は、口縁が玉縁状になるもので輸入白磁である。12世紀代のもの。280は、釉薬が全面に被っていないもの。薄手の碗である。281は、陶器の鍋の把手であろうか。282は、磁器の底部である。底部に回転糸切り痕を観察できる。283～286は、第4層出土遺物である。283は、高台壺である。比較的高台を高く付けるもの。高台径12.8cmを測る。284は、土師質の壺か皿である。低径6.4cmを測る。全体に摩滅している。285は、須恵器の壺である。低径12.0cmを測るもの。286は、須恵器の小型の壺であろうか。口径10.0cmを測る。

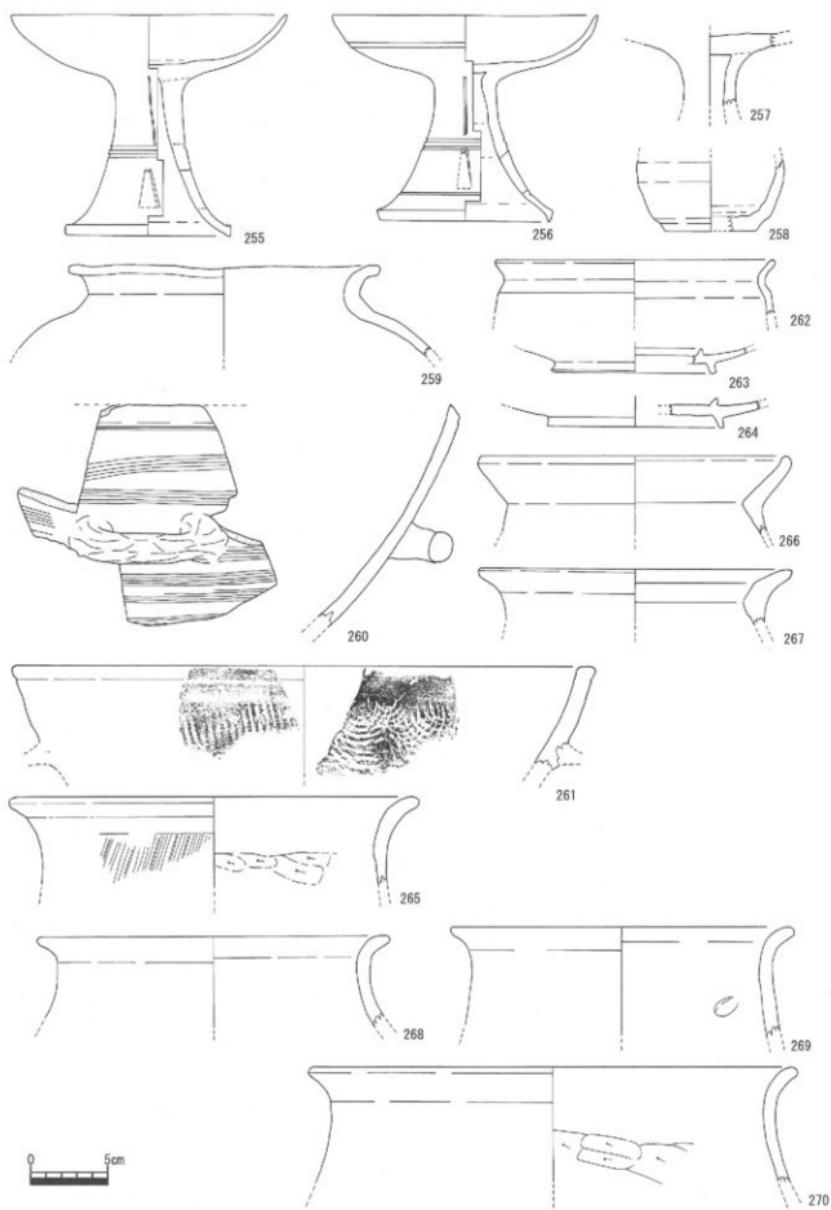
287～289は、第6層出土遺物である。287は、加工板材である。同一方向に削りを入れているもの。木取りは、板目である。288は、287と並んで出土した木製の梯子と思われるもの。289は、高台壺である。290～296は、最下層出土の遺物である。290と291は、高台壺である。290は、高台が「ハ」の字に開くもの。高台径7.0cmを測る。291は、高台径8.5cmを測る。292は、土師質の壺底部であろうか。回転糸切り痕を残している。293は、高台の付いた盤であろうか。高広編年IV期のもの。294は、高壺の壺部である。295は、壺の口縁端部。296は、つまみの付く蓋の口縁部である。

#### 【東3区の出土遺物】(第52図 東3区の出土遺物) 297～302

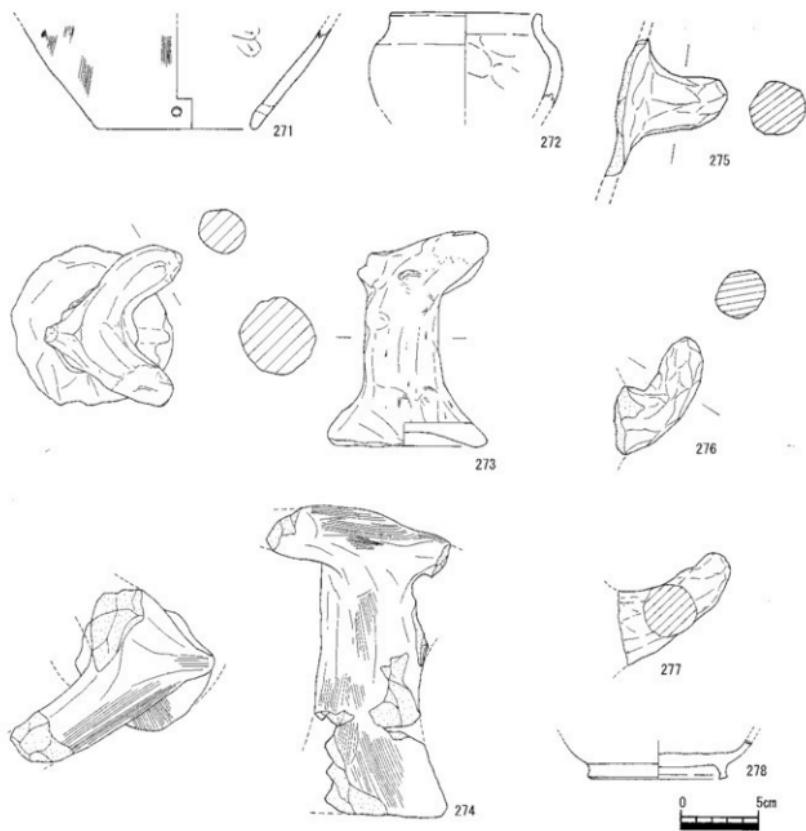
297～299は、第2層出土遺物である。297と298は、須恵器の高台壺である。297は、高台が外に張り出すように膨らむもの。高台径9.0cm、高台高1.0cmを測る。298は、浅い高台壺である。口径13.0cm、器高4.2cm、高台径8.0cmを測る。299は、須恵器の壺の口縁部である。300は、第3層出土の複合口縁の壺片である。口径22cmを測るもの。301と302は、第4層出土遺物である。301は、高台壺である。高台は断面三角形を呈すもの。302は、土錘である。全長5.8cm、孔径0.4cm、最大幅1.2cm、重量●gを測るもの。



第50図 東1区の出土遺物 (S=O)



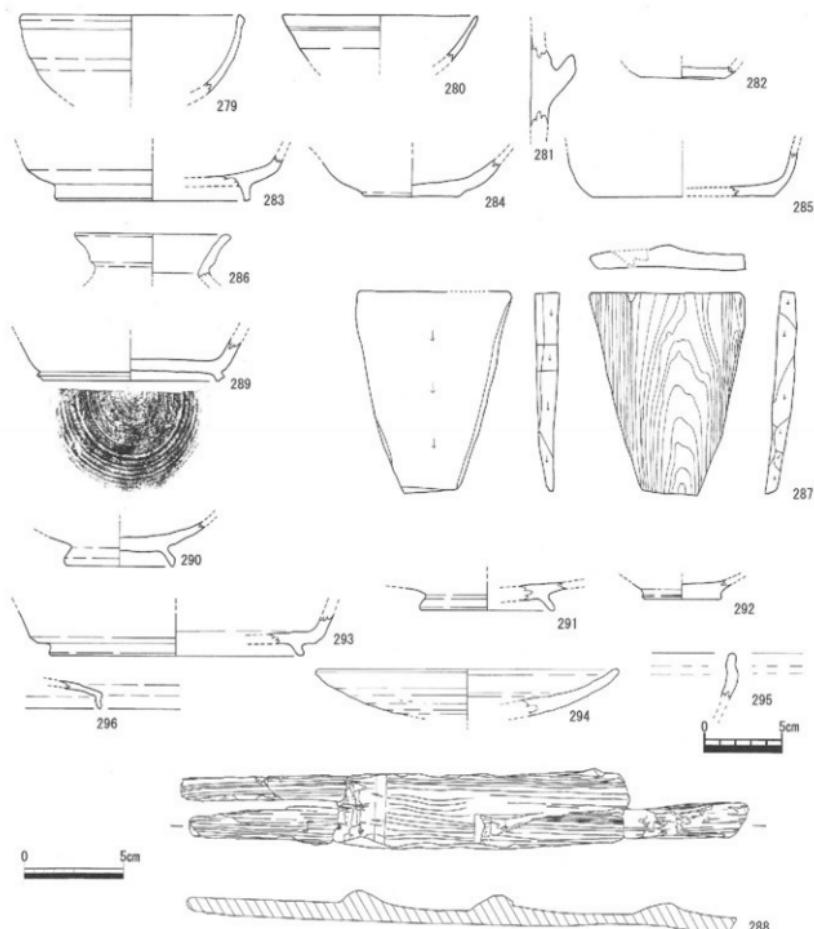
第50図 東1区の出土遺物



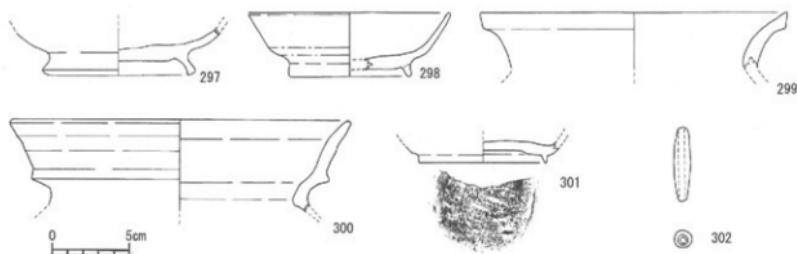
第50図 東1区の出土遺物

#### 4.まとめ

修理田遺跡は、「千鉢駅」推定地であるが、今回調査した調査区には、駅跡はなかった。調査地は、扇状地の入り口に位置し、そのため水害の被害を受けやすい場所にあったため遺構が流されたことも考えられなくはないが、残存遺構は、全く検出できなかった。遺物の時代や出土量から付近に駅家が所在する可能性は極めて高いと思われるが、残念ながらそれを特定するには至っていない。ただし、調査区の東に浅い谷があり、ここで小片ではあるが須恵器も表探しているので、位置的にこの場所を駅家候補地として挙げておきたい。



第51図 東2区の出土遺物



第52図 東3区の出土遺物

## 第4節 平成21年度地蔵前遺跡の調査

### 1. 調査の方法（第53図 地蔵前遺跡調査区位置図・第54図 地蔵前遺跡試掘調査土層断面図）

平成20年度の松江市教育委員会文化財課の試掘調査によって、2層にわたる遺物包含層が検出されたことから、当地の小字名をとり「地蔵前遺跡」として文化財保護法上の手続きがとられた。県土整備事務所と松江市教委文化財課による協議において、遺跡を保存する方向での施工が可能か協議を行ったが、対象地は集落近接の田地であり、保護盛土をすると田面が集落よりかなり高くなるため、切土はやむを得ないと結論が提出された。それにより、切土部分については、試掘によって遺構の性格と範囲を確認することになった。なお、試掘の結果、遺構が確認された場合は、全面調査に切り替える予定であった。

工事での予定切土の深さは、72cm（耕作土を含む）である。過去の試掘調査成果から、現況地表面下40cm（包含層A）と60cm（包含層B）の深さに10cmの厚さの遺物包含層が想定された。このため、長さ13m×幅1mと長さ17m×幅1mの2本のトレンチを配置し、ひとまずこの包含層の性格と範囲を確認することとした。調査面積は、30m<sup>2</sup>である。

### 2. 層序

表土（現況地表面下0～15cm）は現代の耕作土層である。調査前に重機により除去した。

第1層（現況地表面下15～20cm）は現代の耕作土層の下の床土である。調査前に重機により除去したが、一部残った。

第2層～第3層（現況地表面下20～45cm）は近世以降の造成土と考えられる。包含層Aはこの層に含まれるものである。

第4層（現況地表面下45～60cm）は、砂を多く含んだ層で、遺物を含んでいるが小片で全て摩滅している。

第5層（現況地表面下60～80cm）は礫を多く含んだ河川堆積土。包含層Bがこれにあたる。流れ込みによる二次堆積層であり、遺物は少量で摩滅した小片が多い。

第6層（現況地表面下80cm～）は、鉄さび色の砂礫層である。この上層からは、状態の良い古墳時代前期の甕片が出土している。なお、第6層については、調査範囲の更に下層に向かってつづくものであるが、今回のほ場整備では影響が無いため、これ以上の調査は実施せずに埋め戻しを行った。

### 3. 遺物（地蔵前出土墨書き土器写真）

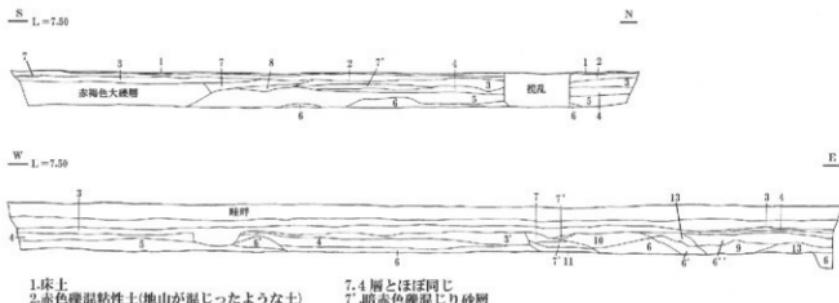
97片の遺物が出土した。古墳時代～奈良時代を中心とするが、近世陶器の小片も含んでいる。近世陶器は、造成土と考える第2層から出土した。また、第3層からは、回転糸切痕を観察できる墨書き土器も1点出土した。これらの遺物は、摩滅が著しく、実測可能なものは殆どなく、他の場所からの流れ込みと考えられる。

### 4.まとめ

今回見つかった各層の遺物は、近世以降の造成土から出土したものが大半である。また、これ以外のものについては河川の氾濫による二次堆積のものである。遺構は無く、地蔵前遺跡は切土の及ぶ範囲に向かっては広がっていないものと思われる。



第53図 地蔵前遺跡調査区位置図 (S = 1)



- |                         |                    |
|-------------------------|--------------------|
| 1. 床上                   | 7.4 層とほぼ同じ         |
| 2. 赤褐色膠泥粘性土(地山が脱じたような土) | 7'. 剛赤色膠泥じり砂層      |
| 3. 修理田でも同じ土層が2層めにあり     | 8. 緑褐色膠泥粘性土        |
| 4. 細粒褐色砂礫層              | 9. 剛赤色膠泥粘性土        |
| 5. 黄褐色砂質土               | 下部に有機物堆積があり川底と思われる |
| 6. 赤褐色砂礫層               | 10. 赤褐色膠泥層         |
| (修理田でもあった古いがらがらの上)      | 11. 7層と同一砂層        |
| 6'. 赤褐色砂礫層と1層の混層        | 下部に有機物堆積があり川底と思われる |
| 6'' .赤褐色砂礫層と5層の混層       | 12. 3と6'の混層        |
|                         | 13. 6'' 層に粘質土が混入   |

第54図 地蔵前遺跡試掘調査土層断面図 (S = 1 : 100)



地蔵前出土墨書（須恵器）写真

第5節 附編 千酌太田遺跡発掘調査報告

## 例　　言

1. 本編は、松江市教育委員会が実施した千畠地区経営体基盤整備事業にともなう千畠太田遺跡の緊急発掘調査の記録である。
2. 調査地は、島根県松江市美保関町千畠754、752-2に所在する。
3. 調査は、平成19年3月3日から3月9日まで実施した。

調査当時の体制は以下のとおりである。

調査主体者　松江市教育委員会 教育長 福島律子

調　　査　員　松江市教育委員会 文化財課 主　幹 赤澤秀則（調査担当者）

主　任 松浦俊光

主　任 後藤哲男

副　主　任 川上昭一

主任主事 佐々木紀明

嘱　　託 原 英誉、小山泰生、高橋真紀子

遺物整理員 萩野哲二、小山泰生、高橋真紀子、金森みのり、宮本亜希子

（以上：松江市教育委員会文化財課嘱託）

4. 調査にあたっては、島根県松江県土整備事務所、有限会社丸紅建設の協力をいただいた。
5. 本節は赤澤秀則が担当したが、SI01出土遺物、低湿地調査区出土遺物の原稿は小山泰生による。
6. 出土遺物、実測図および写真などの資料は、松江市教育委員会において保管している。

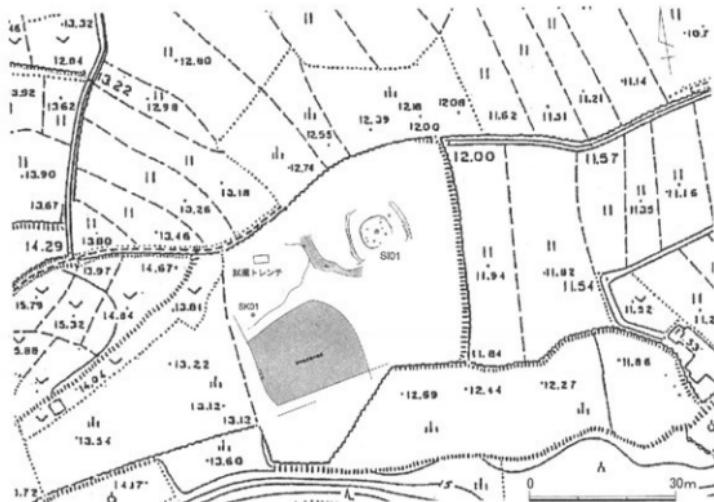
## 1 調査に至る経緯

島根県松江県土整備事務所の発注による千鶴地区経営体基盤整備事業とともにあっては、平成18年度から試掘調査を、平成19年度から発掘調査を実施している。

工事現地において平成19年2月15日におこなった9-1号排水路での立会において少量の遺物が認められたことから、付近のすき取りに際して立会をおこなっていたが、3月6日、溝状の遺構が認められたのに続き、炭化物を少量含む落込みを検出した。精査したところ、堅穴住居跡であることが判明し、この脇の低湿地部からは古墳時代の中期の遺物の出土をみたので、あわせて千酌太田遺跡として緊急調査をおこない、低湿地部については遺物の採取と土層図の作成をおこなった。

現地は、現地表を約1m切り下げる予定の場所で、計画どおりの掘削がおこなわれれば、堅穴住居跡は消滅する位置にあったため、急遽現地で松江県土整備事務所と協議をおこない、同日付で遺跡発見通知をおこない、また、同事務所からは本調査の依頼の提出を受けて、緊急に発掘調査を実施することとした。同日開始した現地調査は3月9日に終了した。

今回の調査は、工事途中の不時発見によって緊急に調査をおこなったもので、美保関地区では初めての竪穴住居跡の調査例の上、玉類が出土するなど、貴重な調査例ではあったが、工事中の発見であり、調査終了後、県教育委員会とも協議の上、この地点での工事実施は止むをえないものと最終的に判断した。



第55図 千酌太田遺跡位置図 (1/1000)

## 2 調査の概要

### 1. 遺跡の立地

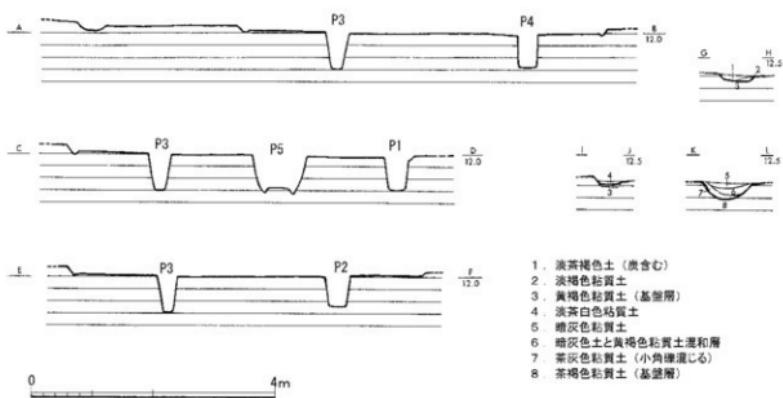
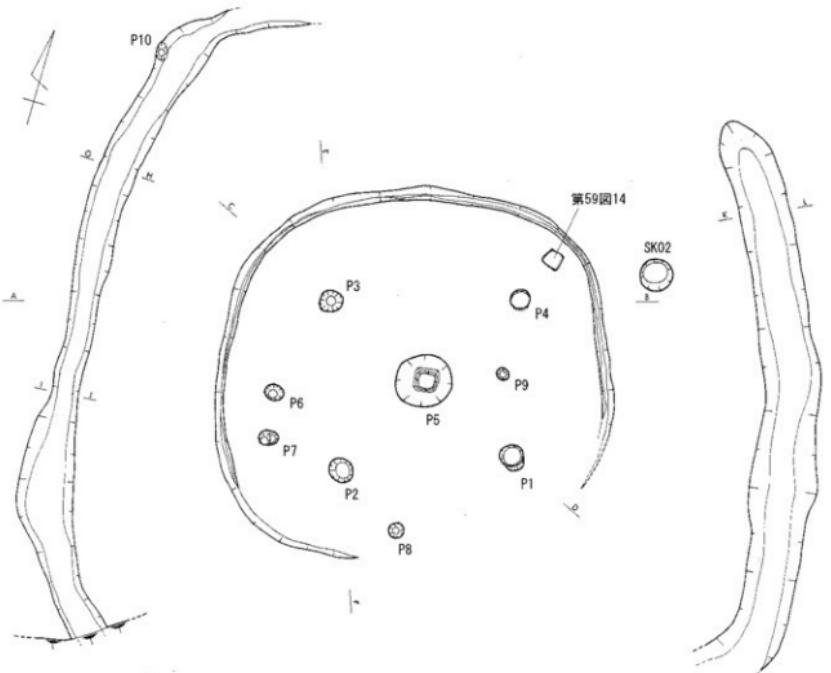
千酌地区経営体基盤整備事業に伴い発見した千酌太田遺跡は整備事業西側工区内に東に向かうごく緩やかな尾根があり、現在も畑として耕作されているが、その一部は現在の水田下へもぐりこむようになっていた。この尾根は南に向かっては緩やかに下るが、北側では急激に落ち込むようで、整備工事の掘削でも砂礫層と粘質土しか認められない。この調査を行った尾根状の部分は後世の掘削によりいくらか削平され、本来存在したと考えられる包含層は認められなかった。

また、この尾根状部南斜面の続きに堆積している有機土、粘質土には古墳時代中期を中心とする遺物包含層となっており、土師器とともに木製品も含まれていた。今回の調査で部分的にこの下の層序の確認をおこなったが、この有機土下には角礫状の砂礫が30~40cmもの厚さで堆積しており、この谷をうずめるような土石流があったことを示している。

今回の西側工区に該当し、掘削がおこなわれた部分では、西端部で70×60cmの隅丸方形の土坑1(SK01)を検出した。深さ約10cmで、淡茶褐色土が堆積していた。遺物は検出されず、時期、性格ともに不明である。また、西端から約17mの地点で溝1本を検出した(砂礫溝)。この溝は緩く弧を描いており、砂礫で埋没していた。部分的に底面を確認したが、断面は底に向かってすぼまる形状を呈していたが、底面には大きく凹凸があった。溝内には付近の丘陵が崩落したような角礫が充満している状況から、自然流路と考えられる。出土遺物がなく、時期は決めえなかったが、調査地南側にある低湿地調査区土石流層(第60図、第6層)と同時に埋まつたとすると、古代から中世にかけて埋没したものと考えることができる。



第56図 千酌太田遺跡遺構配置図 (1/400)



第57図 堪穴住居跡 (SI01) 実測図 (1/80)

1. 淡黄褐色土 (底含心)
2. 淡褐色粘質土
3. 黄褐色粘質土 (基盤層)
4. 淡茶白色粘質土
5. 暗灰色粘質土
6. 暗灰色と黄褐色粘質土混和層
7. 暗灰色粘質土 (小角櫛混じる)
8. 茶褐色粘質土 (基盤層)

## 2. S101 (竪穴住居跡)

西側工区を東に向かってのびる微高地上で検出された平面が隅丸方形を呈する竪穴住居跡である。東に向かって延びる低丘陵が削られて田面下に埋まっていたため、検出面の標高は12.0～12.3mと非常にフラットな面から検出されているが、本来は南向きの緩斜面に立地していたと考えられる。この建物跡の規模は一辺6.4m、壁高最大18.0cmを測る。

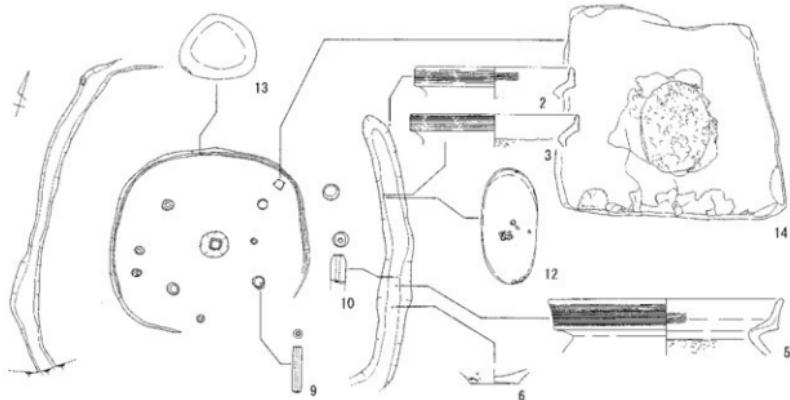
住居跡の床面からは主柱穴4個（P 1～P 4）、特殊ピット1個（P 5）、壁体溝とピット4個（P 6～P 9）を検出したが、炉跡は検出されなかった。床面北東隅に扁平な板石1個（14）が据え置かれたと考えられる状態で残存していた。

**主柱穴** 主柱穴の規模はP 1が上縁径40～44cm、深さ最大55.3cmを測るほぼ円形、P 2が上縁径38～43cm、深さ最大50.8cmの円形、P 3が上縁径35～40cm、深さ最大59.8cmのほぼ円形、P 4が上縁径30～32cm、深さ最大53.4cmを測る円形である。ピット間の間隔は芯々距離でP 1～P 2が2.8m、P 2～P 3が2.8m、P 3～P 4が3.1m、P 4～P 1が2.6mである。

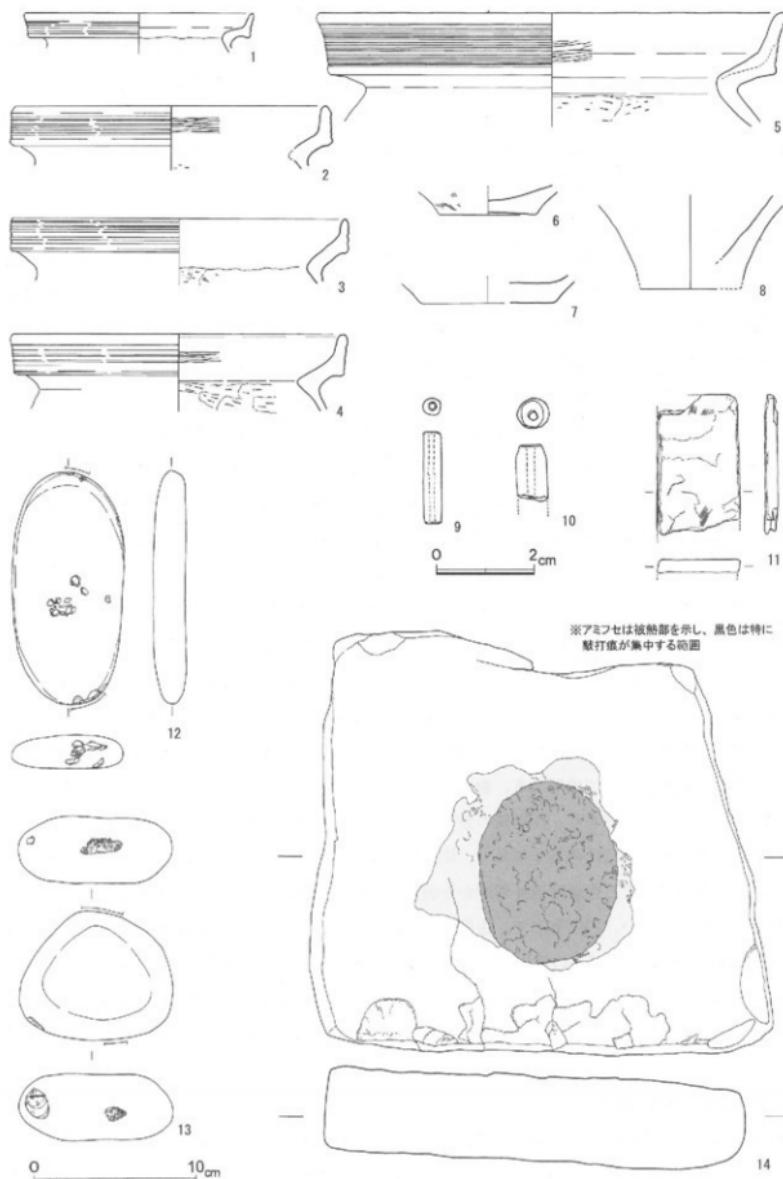
**特殊ピット** 特殊ピット（P 5）は床面中央のやや東側より検出された。平面は円形を呈し、直径90cm、深さ最大68.4cmを測る。底部の平面形は隅丸方形を呈し、その底面壁下には幅2cm程度の黒色粘土の堆積が認められた。板状のものが打ち込まれていたのかもしれない。この黒色粘土を取り除くと、幅2～4cm、深さ最大13.3cmの溝が坑底を一周する格好となった。

**壁帶溝** 残存する住居壁下からは幅4～15cm、深さ最大5.2cmを測る壁帶溝が検出された。壁と壁帶溝は住居床面を全周せず、斜面下側となる南側からは検出されなかった。

**外周溝** 付帯施設として、住居跡の西側と東側から外周溝を検出している。この溝は全周せず、斜面上方にあたる北側と下方にあたる南側からは検出されなかった。ただし、北側の溝は斜面上方にあたるため、丘陵削平時に消滅した可能性が考えられる。外周溝の規模は、東側が長さ9.5m、幅83～115cm、深さ最大26.5cmを測る。また、西側の溝は長さ11m、幅46～90cm、深さ最大21.2cmを測り、南側



第58図 竪穴住居跡遺物出土状況図



第59図 竪穴住居跡出土遺物実測図 (1/3、9・10は1/1)

に向かって降る。

住居跡の外周溝からの遺物は東側に多く、生活の主体は住居の東側にあったことが推測できる。また、付近の地形からは、雨水が流れ込む恐れがある斜面上方の北側に出入り口があったとは考えにくく、斜面下方である南側に出入り口があったものと推測される。住居跡内床面の硬化度などには特に目立った違いは認められなかった。南側に出入り口があったとすれば、住居南側の谷に閑連する水田などの生産域が存在したことが想定される。

**出土遺物** 遺物は住居埋土、主柱穴内、外周溝から出土している。住居内からは弥生土器の底部片しか検出されておらず、確定的なことはいえないが、外周溝出土の遺物は、V-1末～V-2様式の甕（1～6）で、弥生時代後期前葉の住居跡といえる。出土遺物に若干の時期差があるのは、住居跡の存続期間を示すものだろうか。住居跡内北床面から（14）が、壁帶溝からは、円碟を転用した磨石（13）も出土した。東外周溝から砥石未製品（11）、敲石（12）が出土している。また、P-1から管玉（9）、東外周溝からガラス製管玉（10）が出土した。

1～8は弥生後期の甕である。1～6は住居跡東外周溝から、7、8は住居跡内から出土している。1は口縁部を上方に繰り上げ、その外面に3条の凹線を施す。2～4は口縁部を上方に繰り上げ、その外面に5条の凹線を施す。5は口縁部を上方に繰り上げ、その外面に多条の沈線を施す。施文は2単位の貝殻腹縁による擬凹線文を巡らしている。6、7は甕の底部で、6はかすかに上げ底、7は平底で外面にハケメを施す。8は甕の底部付近の破片である。

9は緑色凝灰岩製と考えられる管玉である。住居跡内P-1から出土し、長さ2.0cm、径0.4cm、孔径0.1cmを測る。両面穿孔が行われている。10はガラス製管玉である。住居跡東外周溝から出土し、残存長1.2cm、径0.7cm、孔径0.2cmを測る。管玉は破断しているが、完全な円柱状ではなく端部に磨耗痕をとどめている。色は半透明なコバルトブルーで、気泡を含んでいる。管玉を上から見た状態で気泡が孔周囲に弧状に廻る点、横から見た状態で横方向に気泡列・筋が確認できたことから、溶融したガラスを鉄芯に巻きつけて成形する、巻き付け法による製作のものと推測できる。さらにこの端部には偏って磨耗した部分があり、長期間の装着によるものと考えられる。

11～14は石器である。11は砥石未製品で、住居跡東外周溝から出土している。表面かすかに擦痕が認められる。12は敲石で、住居跡東外周溝から出土している。両端及び側面に敲打痕をもつが、さほどどの使用は認められない。13は磨石で、住居跡壁帶溝から出土している。表面に光沢をもち端部に敲打痕・剥離痕があるが、さほどどの使用は認められない。14は台石で、住居跡内床面から出土している。表面の中央部分に敲打痕がある。これを中心としてまわりが黒く変色しており、火を受けたものかと思われる。また、裏面にも変色部分がある。床面に据え置かれた状態で出土しており、作業台として使われたものと思われる。

### 3. 低湿地調査区遺物包含層

SI01検出のごく緩やかな尾根の南側の谷筋が埋没する過程で形成された低湿地である。標高約13mの耕作土下にある粘質土を除去した下方にある第3層：淡褐色有機土、第4層：淡灰褐色有機質粘土が第1面の泥炭状を呈する層で、今回は包含する遺物を検出しなかったが、2月15日実施の9-1号

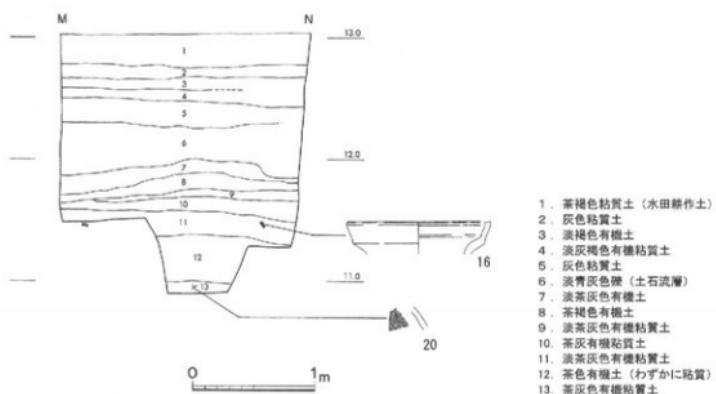
排水路での立会調査では、1点ではあるが土師質土器を採取しており、中世頃に形成された層と推測できる。この下面には上面の標高12.5mの第5層：灰色粘土層が存在する。この面は上面に泥炭状の層が乗っていることから、中世には湿地に近い状態か沼田のような状況が考えられる。この下面には厚さ30~40cmで細かく粉砕された礫からなる第6層の上石流層が堆積しており、谷を埋め尽くすような土石流が発生していたことが判明した。この土石流層があることは、千駄平野で洪水以前の水田面が検出できる可能性を示唆するものと考えられる。

この下面には有機土層がほぼ水平に堆積しており、沼地状の状態であったことが判明した。このうち第11層は古墳時代中期の遺物包含層で、今回の立会で回収した低湿地部の遺物はこの層に由来するものである。圃場整備事業での掘削は西側工区ではこの包含層直上までの掘削であったため、表面に露出した遺物を回収するにとどめた。この包含層は東に向かって下っているようで、遺物が露出したのはやや標高の高い工区西部に限られた。

また、部分的に掘り下げをおこなって上下の層位を確認した（第60図）。ここでは第12層には大形の流木が含まれ、第13層には弥生時代後期～古墳時代前期の遺物が含まれており、この層が今回検出の住居址に対応する弥生時代の遺物包含層ないし、水田の存在が予想される層と考えられる。

**出土遺物** 遺物は第11層から古墳時代中期を中心とする土師器、須恵器1片、木製品として田下駄1点が出土している。このうち、20は部分的に掘り下げた箇所で検出した遺物で、ほかのものよりは層位的に古い。

土師器には、複合口縁の甕、単純口縁の甕、高杯、鉢、橢形の小壺、低脚の椀といった器種がある。15~20は土師器甕である。15は複合口縁の小型甕で、口縁各部丸く納める。16も複合口縁の甕で、口縁部は短く、口縁端を内側に肥厚させる。17も複合口縁の甕で、口縁部は短く外側に折り曲げる。外面はハケメが省略され、内面を粗くヘラケズリする。18は単純口縁の甕で、口縁端部を丸く納め、やや厚手である。19も単純口縁の甕で、やや高い立ち上がりの口縁でシャープさを欠く。20は甕体部片



第60図 低湿地調査区土層図 (1/40)

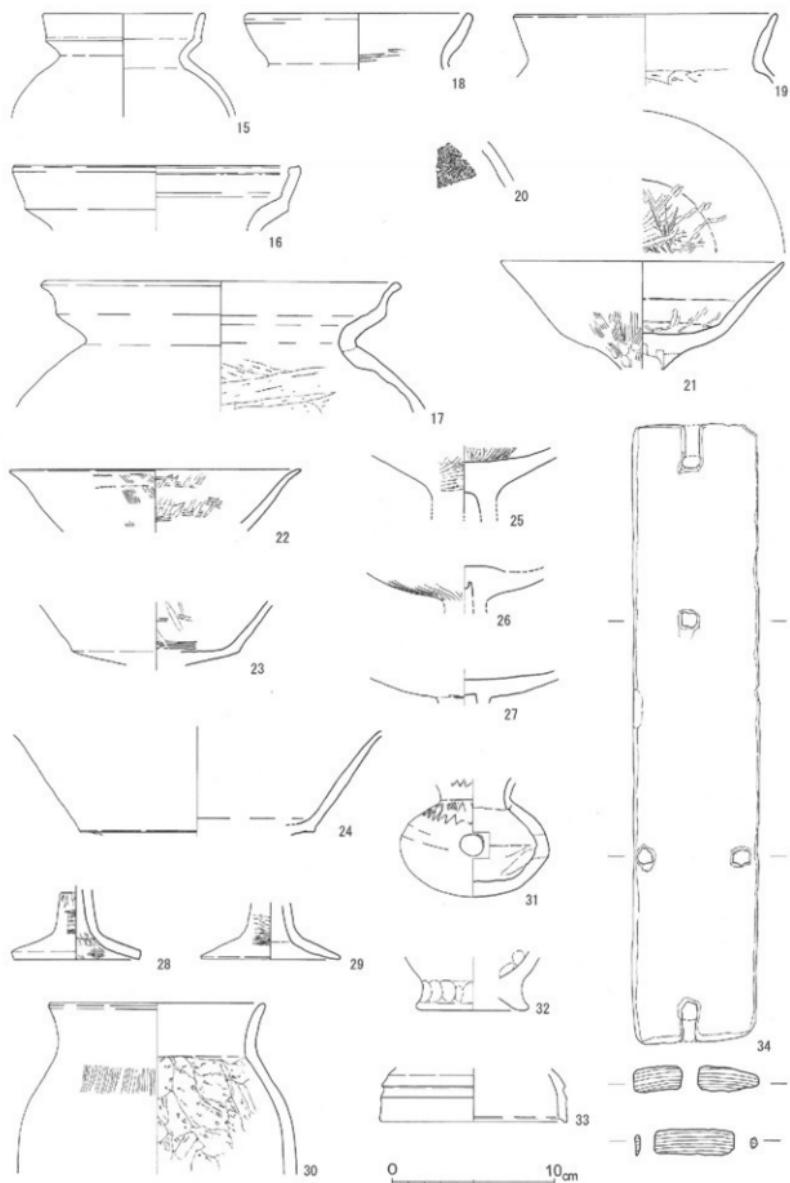
で外面に粗いハケメを施す。第13層から出土しており、他の遺物より層位的に古いものである。

21～29は土師器高杯である。皿状の浅い杯部の21、22と杯部に屈曲をもつ23、24がある。21はなだらかに広がる杯部で、口縁部は先細り状。内外面に強いヨコナデ、内面底部にハケメの後部分的に暗文状のヘラミガキを施す。脚部接合痕が観察できる。22の口縁部は先細り状で、端部がやや外反している。内外面ハケメを施し、内面部分的に縦方向のヘラミガキで仕上げる。23は屈曲する杯部をもち、内面粗いハケメの後に部分的なヘラミガキを施す。24は大型の高杯杯部で、口径22.8cm、深さ5.4cmを測り、口縁部と杯部の境に稜をもつ。内面わずかに化粧土を残し、少なくとも内面は赤色塗彩されていた可能性がある。25～27は高杯杯部から脚部片である。25は全体的に厚手で、外面横方向のヘラミガキ、内面放射状のヘラミガキを施す。26も全体的に厚手で、脚部接合痕のくぼみをもち、外面放射状の深いハケメをとどめている。27は浅い杯部をもつものか。28、29は高杯脚部である。28は端部に平坦面をもち、筒部外面にヘラミガキを施す。29は端部を薄く仕上げ、筒部外面に横方向のヘラミガキを施している。

30は土師器鉢である。単純口縁で肩部が張らない体部から、短くゆるく外反する口縁。体部外面に縦方向のハケメを施し、内面をヘラケズリする。31は土師器小壺で、体部に孔をもち、肩部から頸部に波状文に似た鋸歯文を施す。須恵器縄の模倣品かと思われる。また内面底部に暗茶褐色の付着物があり、漆液容器の可能性も考えられる。32は脚付鉢である。厚手で鉢部内面に指頭圧痕を残す。

33は須恵器杯蓋で、口縁端部に段をもつ。直立に近い体部で鋭い稜を経て回転ヘラケズリをもつ天井部にいたる。

34は田下駄である。長さ38.0cm、幅7.9cm、厚さ1.5cmを測る。3孔式の細長いタイプで、両端に穿孔があり、棒に固定する組合せ式のものである。板目の木取りの針葉樹で、表面は緩やかな弧を描くことから、最外皮を剥いだ滑らかな面を表面として利用しているようである。この図化面が表であれば、鼻緒の穴がやや左に偏るので右足用と考えられる。緒穴の平面形が方形を基調として小さいことから、鉄ノミ状の工具で穿孔されたものであろう。穿孔の最短辺から、ノミ状工具の刃幅は6mm程度のものと考えられる。古墳時代中期の段階でも付近の水田はこうした田下駄を必要とする湿田であつたことも示していよう。



第61図 低湿地調査区出土遺物実測図 (1 / 3)

### 3 まとめ

千酌の平野は、日本海の内湾である千酌湾に面する。この湾は、冬の日本海の西風を直接受けないことから、良港として知られる。この湾に面し南北方向の海岸砂丘が発達する。砂丘上に現在の集落が位置し、砂丘内側が一面の水田地帯となっている。試掘調査では縄文晚期と弥生前期の土器が細片ながら検出され、現在の水田のさらに深い部分にはこうした初期農耕を示す遺構、遺物の存在が予想される。縄文晚期以前の様相は不明だが、美保関町域では中海、境水道沿岸にはサルガ鼻洞窟、権現山洞窟遺跡など、多くの縄文遺跡が知られ、黒曜石産地である隱岐諸島との通交が推測されるこの地にも縄文遺跡の存在は想像に難くない。

平野内での弥生時代以来の開発の結果、弥生後期段階にはこの谷の奥まで開発が及んでいたことがこの千酌太田遺跡で判明した。この遺跡では、弥生時代後期の竪穴住居跡、古墳時代中期の遺物包含層を検出した。SI01は、美保関町では初の竪穴住居跡の検出となる。降って古墳時代中期にも開発されていたことを低湿地調査区で確認した。古墳時代後期には千酌平野を眼下にする丘陵上に多様で独特の形式の横穴式石室をもつ岩山古墳群が築かれるなど、いくつかの古墳群も知られている。また、奈良時代には海上交通の要衝として千酌駅ちくのえきが置かれ、隱岐国への航路が公的に管理する整備がされたものと考えられるが、その前段階の千酌の平野の開発を今回検出したこととなる。

しかし、千酌太田遺跡前面の水田は、土石流で覆われるなど、大規模な災害を受けていたほか、中世には再び泥炭層の湿地帯となっている。こうした開発と撤退が繰り返され、現在的一面の美田となるまでにはさまざまな困難があったことを今回、明らかにできたものといえよう。

1. 松木岩雄「出雲・隱岐地域」『弥生土器の様式と編年 山鍋・山陰編』木耳社 1992
2. 松山智弘「出雲における古墳時代前半期の上器の様相一大東式の再検討一」『島根考古学会誌』8 1991  
松山智弘「小谷式再検討—出雲平野における新資料から—」『島根考古学会誌』17 2000
3. 池瀬俊・「弥生時代後期の遺構・遺物に関する諸問題」『山持遺跡II・III』Vol. 2』島根県教育委員会 2007 この分析指標をこのSI01束縛資料に当てはめると、復元径の精度にもよるが、口縫部試振指數の最小は3の10.10、最大は5の13.45、沈底密度の最小は3、4の2.78本/cm、最大はやはり5の4.4本/cmである。いずれの指標とも若干の時期的な幅を示すが、後期前葉には位置づけうる数値である。
4. 池瀬俊一「古墳時代中期前半の遺構・遺物に関する諸問題」『久景川遺跡』島根県教育委員会 2008  
出雲平野とは一律に較べられないが、千酌太田遺跡の土師器は上記報告書の分類縁相4ないし縁相5に相当するものと考えられる。須恵器模倣が含まれることもよく似てはいる。また、埴輪の分類では、甕15、高杯28は、大東A類胎土、甕16~19、高杯21、22、23は小谷式の胎土類型に分類できる。
5. 広江耕史・桑原真治ほか『国道9号線バイパス建設予定地内 墓塚文化財発掘調査報告書VI』建設省松江国道工事事務所・島根県教育委員会 1989 夫敷遺跡第IV調査区中層の遺物に近いと考えられる。



立会遺構検出状況



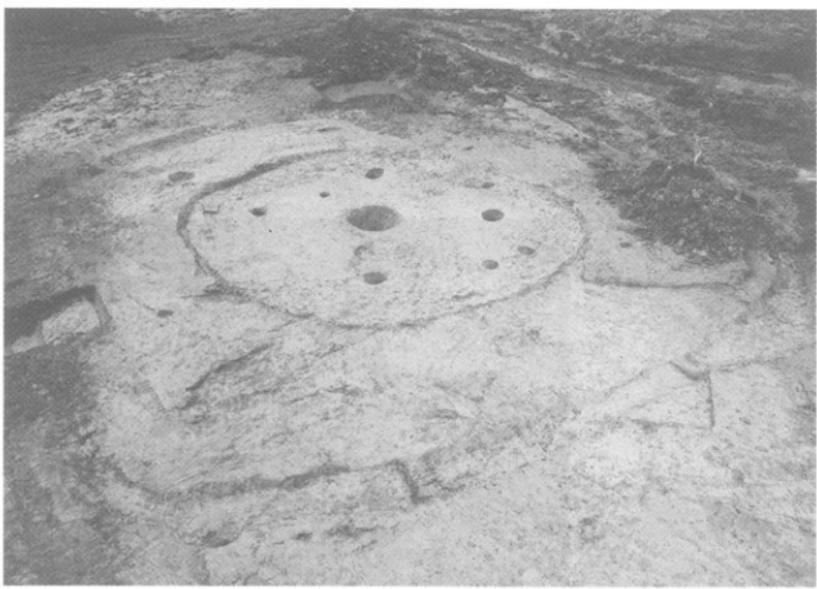
調査風景



砂礫溝検出状況



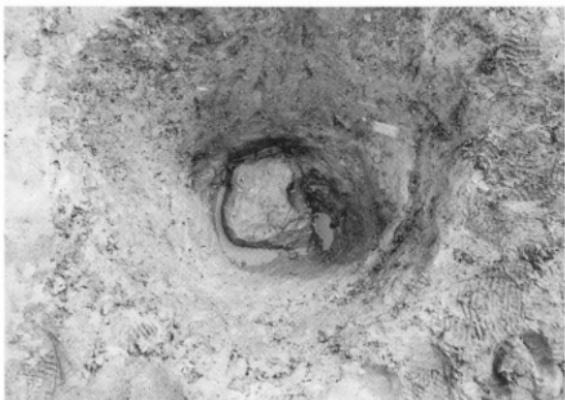
SI01 (西から)



SI01 (北西から)



SI01 P5 (特殊ピット) 土層



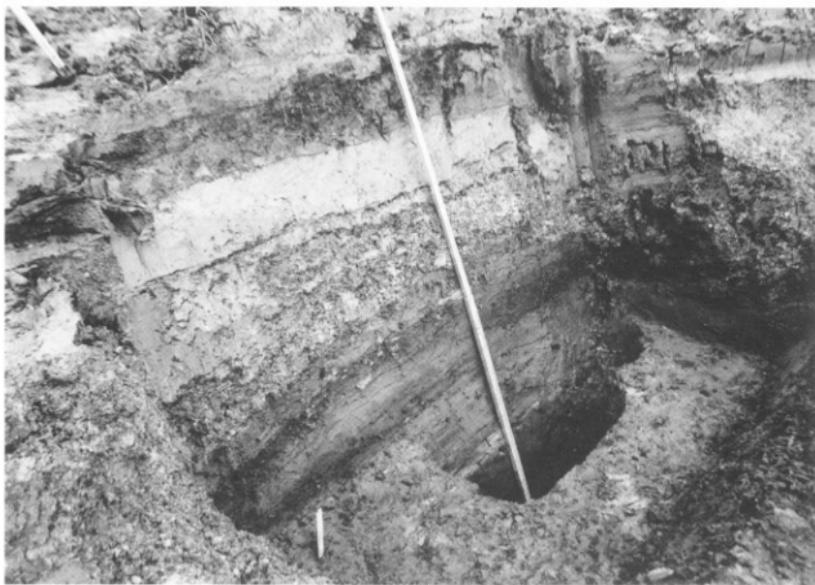
SI01 P5 (特殊ピット) 完掘



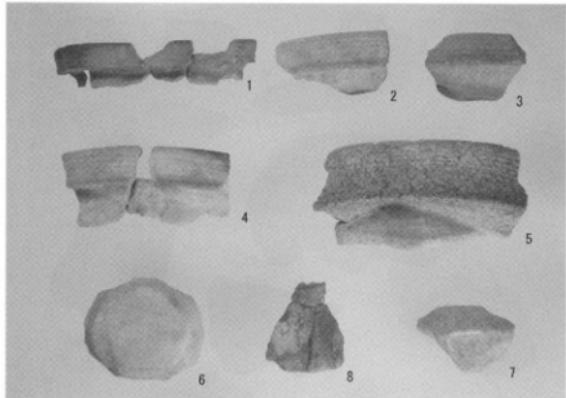
SI01 東外周溝 (北から)



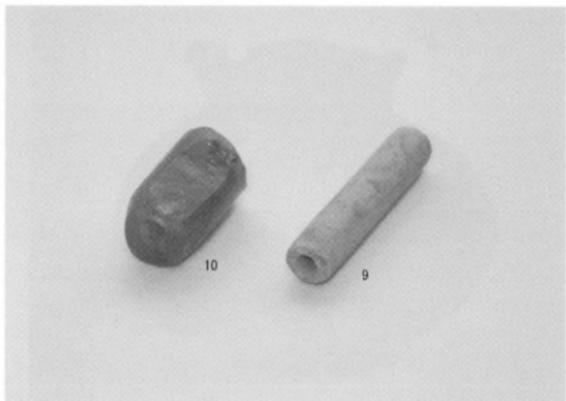
低湿地遺物包含層立会



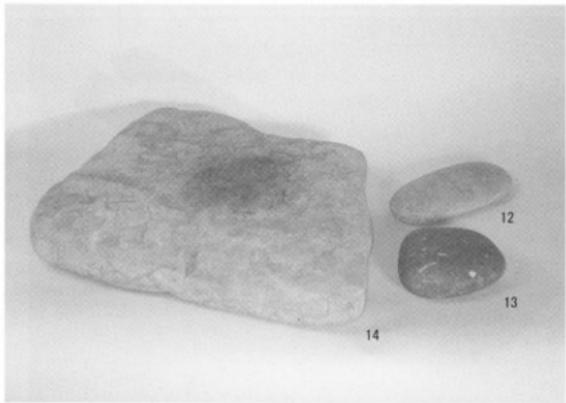
低湿地遺物包含層



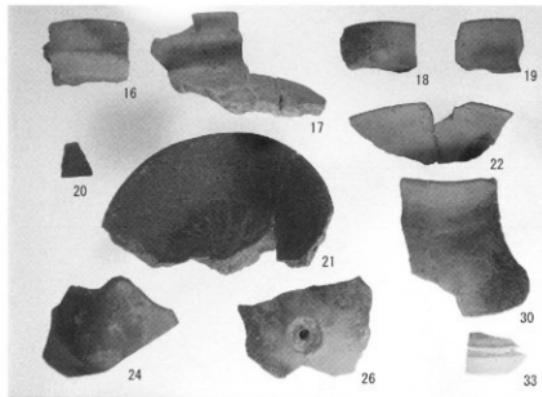
SI01出土土器



SI01玉類



SI01石器



低湿地部出土土器（1）



低湿地部出土土器（2）



低湿地部出土田下駄

## 第4章 特論

### 1. 千駄条里制遺跡他発掘調査に伴う自然科学分析

渡辺正巳・古野 級（文化財調査コンサルタント株式会社）

#### はじめに

千駄条里制遺跡は、島根県東部松江市美保関町千駄に位置する。日本海に面した島根半島北側の、リアス式海岸奥の沖積平野上に立地する。

本報では、発掘調査に伴い各調査区（図1）から検出された暗渠の時期や暗渠内部から出土した植物（木質遺物、種実、葉）の分類群などを明らかにする目的でAMS年代測定及び同定作業を行った。



図1 千駄条里制遺跡他発掘調査区の配置

カシミール3D (SUGIMOTO, HP) を利用して、国土地理院発行  
数値地図25000「境港」を図化・加筆。

#### 分析試料について

分析試料を、表1に示す。全ての分析試料は、財団法人松江市教育文化振興事業団により採取・保管されていた試料からの提供を受けたものである。

#### 分析方法

##### 1. 木材樹種同定方法

顯微鏡観察用永久プレパラートは、渡辺(2000)に従い作成した。作成した永久プレパラートには整理番号を付け、文化財調査コンサルタント(株)にて保管管理をしている。顯微鏡観察は、光学顯微鏡下で4倍～600倍の倍率で行った。同定した分類群ごとに最も特徴的な試料について、3断面の顯微鏡写真撮影を行うとともに、島地ほか(1985)の用語に基本的に従い、記載を行った。

##### 2. 種実・葉同定方法

箇による細粒物の除去、実体顯微鏡下での

表1 分析試料一覧

項目	整理No.	調査区No.	層序	備考
種実	1	第20調査区	砂礫層中	
	2	第12調査区	砂礫層中	
	1	第20調査区		Nd.4
	2	第14調査区	第4層中	
	3	第10調査区	第3層中荒穠	
	4	第11調査区		サンゴ&
5-1	5	第5調査区	第4層中	70820実測
5-2	5	第5調査区	最下層砂礫層上面	
5-3	5	第5調査区	表土下80～85cm第3層中or第4層中（暗灰褐色粘性土）	
樹理	6	第10調査区	暗渠サンプル	
	7	第14調査区		1114実測図No.3 中空杭材
	8	第19調査区	疊下層～層上	
	9	第12調査区	第3～4層中	
	10	第19調査区	第4層中	
11-1	11	第12調査区	砂礫層中	中空杭材
11-2	11	第12調査区	砂礫層中	中空杭材
11-3	11	第12調査区	砂礫層中	中空杭材
11-4	11	第12調査区	砂礫層中	中空杭材
11-5	11	第12調査区	砂礫層中	中空杭材
葉	1	第14調査区	暗渠サンプル	
年代測定	1	第5調査区	第4層中	樹種同定試料整理No.5-1

選別などの作業を行うのが通常であるが、個体試料として取り上げられた試料を対象として同定を行ったことから、一連の作業は行っていない。種実の同定は、肉眼及び実体顕微鏡にて、現生標本及び図鑑類との対比により行った。同定後の試料について、種実は60%エタノールにて液浸標本とし、葉はパウチに封入した。

### 3. AMS年代測定方法

渡辺（2006）にしたがって前処理（酸・アルカリ・酸洗浄）、測定を行った。較正較正データ（INT CAL04 : Reimer et al., 2004）を用いて、OxCal v4.0.5 (Oxford Radiocarbon Accelerator Unit, HP) により算出している。

## 同定結果

### 1. 樹種同定結果

表2に同定結果の一覧表を示すとともに、分類群ごとの代表的な試料（下線）についての記載を以下に示す。また、記載試料の顕微鏡写真を図版に示した。

(1) カヤ *Torreya nucifera* (Linn.) Sieb. et Zucc..

試料No. : 1 (W08042307), 2 (W08042308)

記載：構成細胞は仮道管、放射柔細胞からなる。樹脂細胞、放射仮道管および樹脂道は存在しない。年輪幅は狭く、早材から晩材への移行は緩やかである。晩材の幅は非常に狭い。仮道管にらせん肥厚が明らかに存在し、2本のらせんが対になる傾向がある。放射組織は大部分が10細胞高以下で、非常に低い。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に2～4個存在する。以上の組織上の特徴からカヤと同定した。

(2) モミ属 *Abies* sp.

試料No. : 7 (W08042315), 11-1 (W08042319), 11-2 (W08042320), 11-3 (W08042321), 11-4 (W08042322), 11-5 (W08042323)

記載：構成細胞は仮道管、放射柔細胞からなる。樹脂細胞、放射仮道管および樹脂道は存在しない。年輪幅は非常に狭く（年輪幅：平均約0.2mm）、早材から晩材への移行は急である。晩材の幅は非常に狭く、1～2細胞幅のものがある。放射組織は単列で、1～30細胞高である。放射柔細胞壁は厚壁で、じゅず状末端壁を持つ。以上の組織上の特徴からモミ属と同定した。

(3) マツ属（複維管束亜属） *Pinus* (*sub. Diploxyylon*) sp.

試料No. : 4 (W08042310), 5-3 (W08042313), 8 (W08042316), 9 (W08042317), 10 (W08042318)

記載：構成細胞は仮道管、放射仮道管、放射柔細胞、垂直樹脂道および水平樹脂道を囲むエピセリウム細胞からなる。年輪幅は非常に狭いか狭く、早材から晩材への移行は急で、晩材幅は非常に狭いものからやや広いものがある。放射組織は単列で1～10細胞高以下であるが、水平樹脂道を含むものは紡錘形を示す。放射仮道管の内壁に鋸歯状肥厚がある。分野壁孔は窓状である。垂直樹脂道は早・晩材の移行部から晩材に大型で孤立して存在し、チロソイドが見られる。以上の組織上の特徴から、マツ属（複維管束亜属）と同定した。

表2 木材樹種同定結果

整理番号	樹種名	遺構
W08042307	カヤ	第20調査区 071114 No.4
W08042308	カヤ	第10調査区 第4層中 071226
W08042309	クスノキ属	第10調査区 第3層中 荒堀
W08042310	マツ属	サンゴマ
W08042311	スギ	第5調査区 暗渠
W08042312	スギ	第5調査区 最下層砂礫層上面
W08042313	マツ属	第5調査区 表土下80~85cm第3層中or第4層中(暗灰褐色粘性土)
W08042314	サカキ	第10調査区 暗渠サンプル
W08042315	モミ属	第14調査区
W08042316	スギ	第19調査区 最下層一層上
W08042317	スギ	第12調査区 耕作土から60cm下第3~4層中
W08042318	スギ	第19調査区 表土下70~80 第4層中
W08042319	モミ属	第12調査区 砂礫層中
W08042320	モミ属	第12調査区 砂礫層中
W08042321	モミ属	第12調査区 砂礫層中
W08042322	モミ属	第12調査区 砂礫層中
W08042323	モミ属	第12調査区 砂礫層中

(4) スギ *Cryptomeria japonica* D. Don

試料No. : 5-1(W08042311), 5-2(W08042312), 10(W08042318)

記載：構成細胞は仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる。放射仮道管、らせん肥厚および樹脂道は存在しない。年輪幅はやや広い（約2.5mm）。早材から晚材への移行はやや急である。晩材幅はやや広い。樹脂細胞は早・晩材の移行部から晩材にかけて多数存在し、接線方向に配列する傾向がある。放射組織は単列で、25細胞高以下である。分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に通常2個存在する。以上の組織上の特徴から、スギと同定した。

(5) クスノキ属 *Cinnamomum* sp.

試料No. : 3 (W08042309)

記載：中庸の道管が単独あるいは放射方向または斜め方向に2~3個複合して、年輪内に均等に分布する散孔材である。道管せん孔は単せん孔で、道管相互壁孔は交互状である。道管内腔にチロースが顕著に発達している。軸方向柔組織は周囲状で、道管の周りを厚いさや状に包んでいる。放射柔細胞と道管との間の壁孔は大型で、階段状に配列している。放射組織は異性で、1~3細胞幅である。異形細胞である油細胞が放射柔細胞と周囲柔細胞に認められるが、不顯著である。以上の組織上の特徴からクスノキ属と同定した。

(6) サカキ *Cleyera japonica* Thunb.

試料No. : 6 (W08042314)

記載：非常に小さい角張った道管が単独ないし2~3個複合して年輪内に均等に分布する散孔材である。道管せん孔は階段せん孔で、barの数が多い。側壁の壁孔は対列状～階段状である。木部纖維は

非常に厚壁で、有縁壁孔が認められる。輪方向柔細胞が散在状に多く分布している。放射組織は異性で、1～2（部分的に3）細胞幅であり、平伏細胞、直立細胞、方形細胞の3種類がすべて存在する。放射柔細胞厚壁である。以上の組織上の特徴からサカキと同定した。

## 2. 種実・葉同定結果

表3に同定結果の一覧表を示すとともに、

分類群ごとの代表的な試料の記載を以下に示す。また、記載試料の写真を図版に示した。

### (1) シラカシ *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis myrsinaefolia* Blume

部位：堅果 試料No. : 1, 2, 3, 4

記載：形は卵型。首はドーナツ状でその上の花被は団子状になる。柱頭は折れて不明瞭。ヘその直径は胴直径の40%程度。

### (2) スダジイ *Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* (Makino) Nakai

部位：堅果 試料No. : 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12

記載：形は細長い卵型。首は円錐。花被は円錐状で太い。ヘその直径は胴直径の70%程度で円形に膨らむ。

### (3) ウラジロ *Gleichenia japonica* Spreng.

部位：葉 試料No. : 1

記載：葉柄はかたく、4mm程度。葉身は葉柄の上端で左右の2羽片に分かれ、左右両羽片の分歧点には芽の跡が認められる。各羽片は2回羽状に深裂し、小羽片はさらに羽状に深裂する。

### (4) ニヨウマツ類 *Pinus* subgen. *Diploxylon* sp.

部位：葉 試料No. : 2

記載：葉は細長い針状で2本が対になり、基部はさやでおおわれている。葉の横断面は半円状。

## 3. AMS 年代測定

表4にAMS年代測定結果を示す。表4には、3種類の年代と、 $\delta^{13}\text{C}$ 値を示してある。

補正 $\delta^{13}\text{C}$ 年代は、 $^{14}\text{C}$ 濃度が環境により変動することから、 $\delta^{13}\text{C}$ を測定し、 $\delta^{13}\text{C} = -25\%$ に規格化した $^{14}\text{C}$ 濃度を求め、リビーの半減期(5568年)を用いて年代値を算出したもの(曆年較正用年代)を5年単位で丸めた値で、西暦1950年からさかのぼった年代値を示してある。

一方曆年代は、時代(時間)とともにランダムに変化している大気中二酸化炭素の $^{14}\text{C}$ 濃度を、樹

表3 種実・葉同定結果

部位	整理No.	試料No.	調査区No.	層序	同定結果
堅果	2	1	第10調査区	砂礫層中	シラカシ シラカシ
		2			シラカシ シラカシ
		3			シラカシ
		4			スダジイ
		5			スダジイ
		6			スダジイ
		7	第12調査区	砂礫層中	スダジイ
		8			スダジイ
		9			スダジイ
		10			スダジイ
		11			スダジイ
		12			スダジイ
葉	1	1	第14調査区	暗葉サンプル	ウラジロ (複数管束茎葉)
		2			マツ属 (複数管束茎葉)

表4 AMS 年代測定結果

No.	遺構名	状態	(%)	(yrBP)	(yrBP)	1σ 年代範囲	2σ 年代範囲	(PLD-)
1 (MTJ-1)	T-5遺構 第4層中	木片 乾燥(0.7148 g)	-25.81±0.20	2015±20	2015±18	BC43-AD4(68.2%) AD39-AD50(3.1%)	BC52-AD29(92.3%) AD39-AD50(3.1%)	10707

木の年輪や海底堆積物のしま状粘土、サンゴの年輪から明らかにして得られた暦年代較正データ（INTCAL04）を用いて、較正したものである。

### 暗渠の構築年代について

出土遺物から暗渠は古代から中世に構築されたものと推定されていた。しかし、暗渠内から得られたスギ材を対象としたAMS年代測定結果では、弥生時代中期頃の年代が得られた。

<sup>14</sup>C年代測定は生物中で炭素が固定された年代を示すことから、樹木では年輪ごとに異なった値を示す（中心部では古く、樹皮直下では新しい）ことが知られている。今回測定対象としたスギ材は木片であり、樹幹内の位置が分からなかった。またスギは、数百年の間成長を続けるものが少なくなっている。このようなことから、古代から中世の年代が期待された今回分析対象としたスギ材は、樹幹内でも中心に近い部分であったと考えることが出来る。

このスギ材の用途が分からぬものの、弥生時代の材の転用や、弥生時代の層から二次堆積したものである可能性も指摘できる。

### 「中空杭材」の用材について

千駄条里製造跡出土木製品の中で、「中空杭材」は外部形態は「杭」であるが、中空になっている点で類例の乏しいものであった。樹種同定の結果、出土した6試料の材質はいずれもモミ属（現在の分布から考えて、モミ）であった。その特異な形態に加え、全てがモミ材であったことから、通常樹種の選択をされることが乏しい「杭」としての用途も再考が必要である。また、この様に特異な形態の類例を求める必用もあるう。

### 引用文献

- Oxford Radiocarbon Accelerator Unit (HP) OxCal.  
<http://cl4.arch.ox.ac.uk/embed.php?File=oxcal.html>
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmeli, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talano, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0-26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029-1058.
- 島地 謙・佐伯 道・原田 浩・塙義高義・石田茂雄・重松經生・須藤彰司 (1985) 木材の構造. 276p., 文永堂, 東京.
- SUGIMOTO Tomohiko (HP) カシミール3D. <http://www.kashmir3d.com/>.
- 渡辺正巳 (2006) 松江市山津瀬跡における灰原内の炭のAMS年代測定と樹種・大井瀬跡群山津瀬跡・山岸遺跡発掘調査報告書, 472-477, (財)松江市教育文化振興事業団.

## 図表一覧

### 図1 千駄条里製遺跡発掘調査区の配置

カシミール3D (SUGIMOTO,HP) を利用して、国土地理院発行 数値地図25000「境港」を  
図化・加筆。

### 表1 分析試料一覧

表2 木材樹種同定結果

表3 種実・葉同定結果

表4 AMS年代測定結果

### 図版7 木質遺物切片顕微鏡写真1

1 : カヤ 試料No.2 (W08042308) (1a : 横断面 1b : 接線断面 1c : 放射断面)

2 : モミ属 試料No.7 (W08042315) (2a : 横断面 2b : 接線断面 2c : 放射断面)

3 : マツ属 (複維管束亞属) 試料No.5-3(W08042313) (3a : 横断面 3b : 接線断面 3c : 放射断面)

### 図版8 木質遺物切片顕微鏡写真2

4 : スギ 試料No.10(W08042318) (4a : 横断面 4b : 接線断面 4c : 放射断面)

5 : クズノキ属 試料No.3 (W08042309) (5a : 横断面 5b : 接線断面 5c : 放射断面)

6 : サカキ 試料No.6 (W08042314) (6a : 横断面 6b : 接線断面 6c : 放射断面)

### 図版9 種実・葉写真

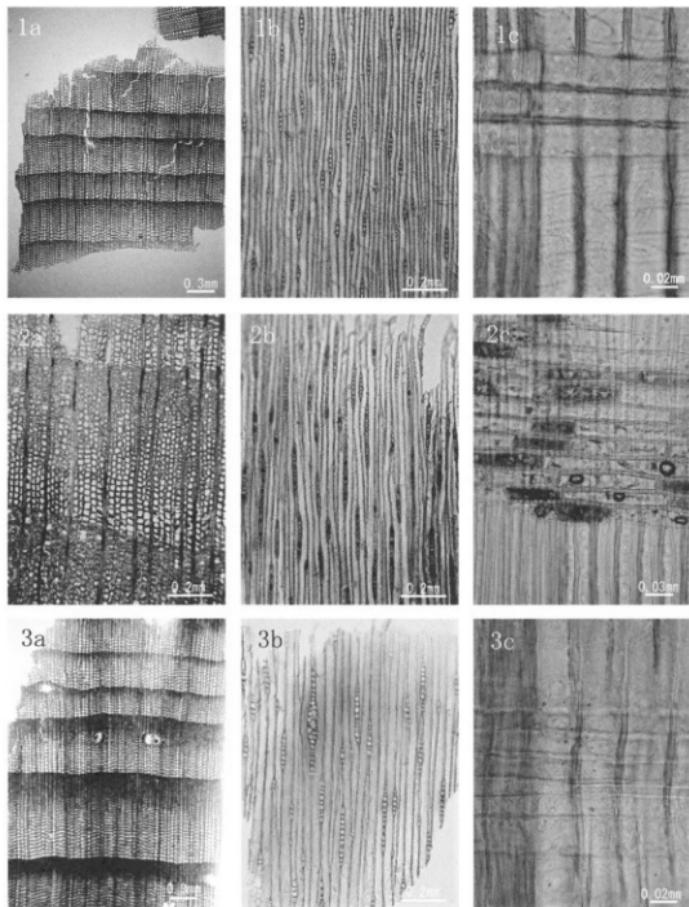
1 : ウラジロ (1a : 全体 1b : 小羽片拡大)

2 : マツ属 (複維管束亞属) ; ニヨウマツ類 (2a : 葉(基部) 2b : 葉(全体))

3 : スダジイ (堅果)

4 : シラカシ (堅果)

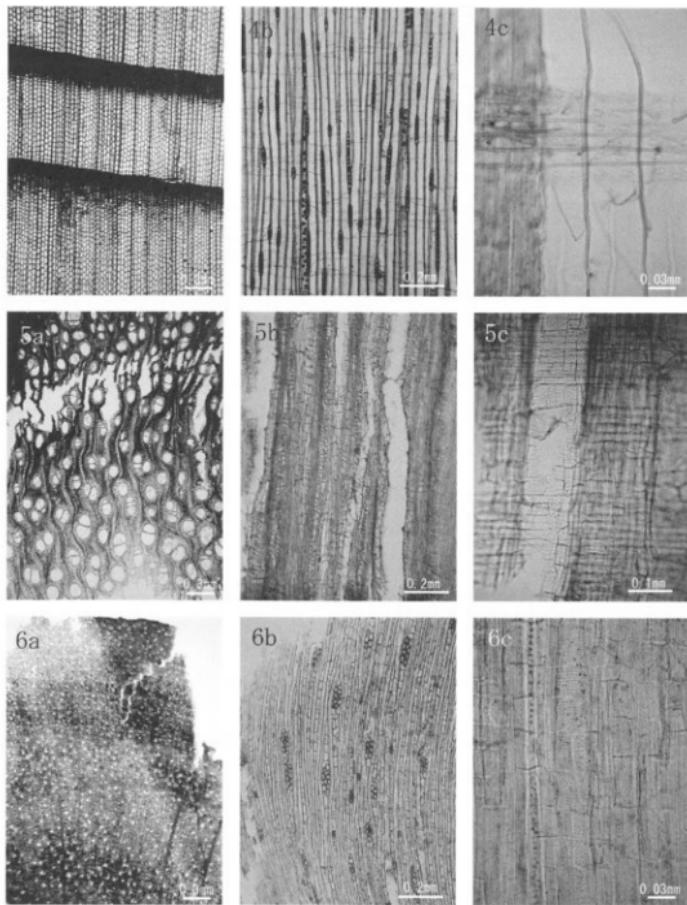
1aを除き、背景は1mm方眼



1: カヤ 試料 No. 2(W08042308) (1a: 横断面 1b: 接線断面 1c: 放射断面)

2: モミ属 試料 No. 7(W08042315) (2a: 横断面 2b: 接線断面 2c: 放射断面)

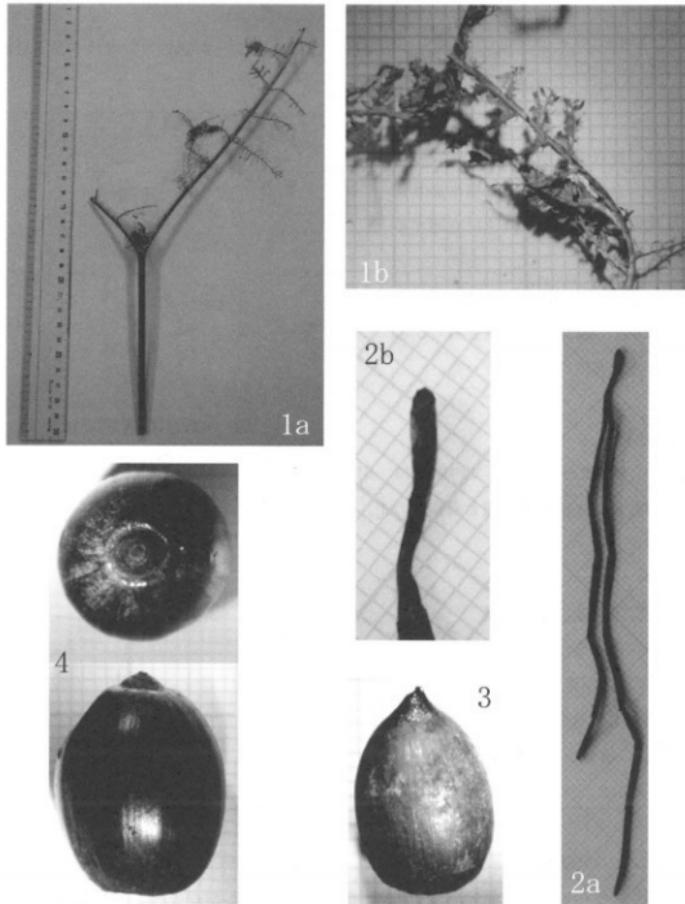
3: マツ属 (複維管束亞属) 試料 No. 5-3(W08042313) (3a: 横断面 3b: 接線断面 3c: 放射断面)



4: スギ 試料 No. 10 (W08042318) (4a: 横断面 4b: 接線断面 4c: 放射断面)

5: クズノキ属 試料 No. 3 (W08042309) (5a: 横断面 5b: 接線断面 5c: 放射断面)

6: サカキ 試料 No. 6 (W08042314) (6a: 横断面 6b: 接線断面 6c: 放射断面)



1: ウラジロ (1a: 全体 1b: 小羽片拡大)

2: マツ属 (複維管束亞属) : ニヨウマツ類 (2a: 葉 (基部) 2b: 葉 (全体))

3: スダジイ (堅果) 4: シラカシ (堅果) 1a を除き、背景は 1mm 方眼

## 2. 中殿遺跡発掘調査に伴う自然科学分析

渡辺正巳・古野 輝(文化財調査コンサルタント株式会社)

### はじめに

中殿遺跡は、島根県東部松江市美保関町千鶴に位置する。日本海に面した島根半島北側の、リアス式海岸奥の沖積平野上に立地する(図1)。

本報は発掘調査に伴い南A区から検出された建物跡(SB-01:図2)の時期を明らかにする目的で、AMS年代測定を行った。



図1 中殿遺跡 南A区の位置

カシミール3D (SUGIMOTO, HP) を利用して、国土地理院  
発行 数値地図25000「境港」を固化・加筆。

### 測定試料について

測定試料を、表1に示す。すべての試料は、財団法人松江市教育文化振興事業団との協議の上、渡辺が採取した。

### AMS年代測定方法及び測定結果

渡辺(2006)にしたがって前処理(酸・アルカリ・酸洗浄)、測定を行った。

測定結果を表1に示す。表1には、3種類の年代と、 $\delta^{14}\text{C}$ 値を示してある。

補正 $\delta^{14}\text{C}$ 年代は、 $^{14}\text{C}$ 濃度が環境により変動することから、 $\delta^{13}\text{C}$ を測定し、 $\delta^{13}\text{C} = -25\text{‰}$ に規格化した $^{14}\text{C}$ 濃度を求め、リビーの半減期(5568年)を用いて年代値を算出したもの(曆年較正用年代)を5年単位で丸めた値で、西暦1950年からさかのぼった年代値で示してある。

一方曆年代は、時代(時間)とともにランダムに変化している大気中二酸化炭素の $^{14}\text{C}$ 濃度を、樹木の年輪や海底堆積物のしま状粘土、サンゴの年輪から明らかにして得られた曆年代較正データ(INTCAL04: Reimer et al., 2004)を用いて、OxCal v4.0.5 (Oxford Radiocarbon Accelerator Unit, HP)により較正したものである。

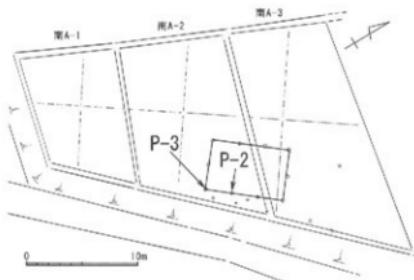


図2 SB-01柱穴の配置と試料採取地点

## 建物（SB-01）の建設年代について

得られた年代はいずれも奈良時代から平安時代前半を示す値であった。遺構内からは奈良時代の遺物が出土しており、測定年代値はこれを裏付ける結果であった。ただし今回の結果からは、平安時代前半の遺構である可能性も残る。

### 引用文献

Oxford Radiocarbon Accelerator Unit (HP) OxCal.

<http://c14.arch.ox.ac.uk/embed.php?file=oxcal.html>

Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Bertrand, C.J.H., Blackwell, P.G., Buck, C.E., Burr, G.S., Cutler, K.B., Damon, P.E., Edwards, R.L., Fairbanks, R.G., Friedrich, M., Guilderson, T.P., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., McCormac, G., Manning, S., Bronk Ramsey, C., Reimer, R.W., Remmle, S., Southon, J.R., Stuiver, M., Talamo, S., Taylor, F.W., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer, C.E. (2004) IntCal04 terrestrial radiocarbon age calibration, 0–26 cal kyr BP. Radiocarbon, 46, 1029–1058.

SUGIMOTO Tomohiko (HP) カシミール3D. <http://www.kashmir3d.com/>.

瀬辺正巳 (2006) 松江市山津塚跡における灰原内の炭のAMS年代測定と樹種・大井宍跡群山津塚跡・山津塚跡発掘調査報告書, 472-477, (財)松江市教育文化振興事業団.

表1 AMS年代測定試料と測定結果

No.	遺構名	試料	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	補正 $^{14}\text{C}$ (yrBP)	推定正年齢 (yrBP)	推定較正年代		測定番号 (P.D.)
						13 歳年代範囲	20 歳年代範囲	
1 (MTJ2-1)	南A-2 SB01 Pit2	腐植土中炭化材 乾燥 (腐植土共17,539g)	-26.30±0.29	1195±20	1197±22	AD760–792 (3.8%) AD605–672 (58.3%)	AD772–891 (95.4%)	11238
2 (MTJ2-2)	南A-2 SB01Pit3	腐植土中炭化材 (腐植土共25,549g)	-27.33±0.22	1180±20	1181±22	AD767–788 (6.0%) AD610–648 (32.2%) AD554–817 (30.0%)	AD776–895 (53.0%) AD925–937 (2.4%)	11239

### 3. 修理田遺跡発掘調査に伴う自然科学分析

渡辺正巳・古野 肇（文化財調査コンサルタント株式会社）

#### はじめに

修理田遺跡は、島根県東部松江市美保関町千酌に位置する。日本海に面した島根半島北側の、リアス式海岸奥の沖積平野上に立地する。

本報では、発掘調査に伴い確認された5層の堆積環境及び堆積時期を明らかにする目的で、木材樹種同定、AMS年代測定及び花粉分析を行った。

#### 試料について

図1に試料採取地点を示す。樹種同定及び年代測定用試料は、修理田遺跡東2区及び下

流部の寺垣遺跡内T69において財團法人松江市教育文化振興事業団により採取された。修理田遺跡の2試料は5層内で重なって検出されている。また寺垣遺跡では、遺物の産状から修理田遺跡の5層と対比される8層から、財團法人松江市教育文化振興事業団により試料が採取された。更に、花粉分析用試料を修理田遺跡東2区トレンチ北壁東端で採取した。花粉分析用試料採取地点における柱状図及び試料採取位置を図2の花粉ダイアグラム虫に示す。また、図2には年代測定試料3試料の採取層準も示している。



図1 調査トレンチの配置

#### 分析方法

##### 1. 木材樹種同定方法

顕微鏡観察用永久プレパラートは、渡辺（2000）に従い作成した。作成した永久プレパラートには整理番号を付け、文化財調査コンサルタントにて保管管理をしている。顕微鏡観察は、光学顕微鏡下で4倍～600倍の倍率で行った。同定した分類群ごとに最も特徴的な試料について、3断面の顕微鏡写真撮影を行うとともに、島地ほか（1985）の用語に基本的に従い、記載を行った。

##### 2. AMS年代測定方法

渡辺（2006）にしたがって前処理、測定を行った。較正年代はINTCAL04を用いて、OxCal 4.0により算出している。

##### 3. 花粉分析

渡辺（2009）に従って花粉分析処理を行った。処理に際して $1\text{ }\mu\text{m}$ 振動篩を用いて、再現性に努め

表1 AMS 年代測定結果

試料		$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	補正 $^{14}\text{C}$ (yr BP)	曆年較正用年代 (yr BP)	曆年較正年代		測定番号 (PLD-)	
No.	遺構名	状態			1σ 年代範囲	2σ 年代範囲		
1 (MTH-1)	第69調査区 第8層	木片 乾燥 (0.1462g)	-23.29 ± 0.14	2150 ± 20	2152 ± 21	BC346 - 321 (22.0%) BC206 - 168 (46.2%)	BC353 - 295 (31.9%) BC230 - 219 (2.0%) BC212 - 112 (61.5%)	12721
2 (MTH21-1)	東2区 第5層	木片 乾燥 (0.0985g)	-26.86 ± 0.14	1315 ± 20	1314 ± 22	AD662 - 692 (52.5%) AD750 - 763 (15.7%)	AD656 - 721 (71.8%) AD741 - 770 (23.6%)	13031
3 (MTH21-2)	東2区 第5層	木片 乾燥 (0.0203g)	-23.52 ± 0.24	1885 ± 25	1885 ± 23	AD79 - 132 (68.2%)	AD66 - 215 (95.4%)	13032

た。

## 分析結果

### 1. 樹種の同定結果と記載

樹種同定試料は、AMS年代測定試料の試料No.1である。同定根拠を以下に示すとともに、顕微鏡写真を図版に示した。

#### (1)スギ *Cryptomeria japonica* D. Don

試料No. 1 (W09021201)

記載：構成細胞は仮道管、樹脂細胞、放射柔細胞からなる。放射仮道管、らせん肥厚及び樹脂道は存在しない。年輪幅は狭い。早材から晩材への移行はやや急である。晩材の幅はやや狭い。樹脂細胞は早・晩材の移行部から晩材にかけて多く存在し、接線方向に配列する傾向がある。放射組織は単列で、1～20細胞高である。分野壁孔は典型的なスギ型で、1分野に通常2個存在する。以上の組織上の特徴から、スギと同定した。

### 2. AMS 年代測定結果

表4にAMS年代測定結果を示す。表4には、3種類の年代と、 $\delta^{13}\text{C}$ 値を示してある。

補正 $^{14}\text{C}$ 年代は、 $^{14}\text{C}$ 濃度が環境により変動することから、 $\delta^{13}\text{C}$ を測定し、 $\delta^{13}\text{C} = -25\text{‰}$ に規格化した $^{14}\text{C}$ 濃度を求め、リビーの半減期（5568年）を用いて年代値を算出したもの（曆年較正年代）を5年単位で丸めた値で、西暦1950年からさかのぼった年代値で示してある。

一方曆年代は、時代（時間）とともにランダムに変化している大気中二酸化炭素の $^{14}\text{C}$ 濃度を、樹木の年輪や海底堆積物のしま状粘土、サンゴの年輪から明らかにして得られた曆年較正データ（INTCAL04）を用いて、較正したものである。

### 3. 花粉分析結果

分析結果を図2の花粉ダイアグラムに示す。花粉ダイアグラムでは、計数した木本花粉を基數にし、各々の木本花粉、草本花粉、一部の胞子について百分率を算出してスペクトルで表した。また左端に示した花粉総合ダイアグラムでは、木本花粉を針葉樹花粉、広葉樹花粉に細分し、これらに草本花粉、胞子の総数を加えたものを基數として、分類群ごとに累積百分率として示した。右端には、比例計算により求めた分析試料 1 g (湿潤重量) 当たりの含有量 (粒数) を示した。また中村 (1974) に従い、イネを含む可能性が高いイネ科 (40ミクロン以上) とイネを含む可能性が低いイネ科 (40ミクロン未満) に細分している。

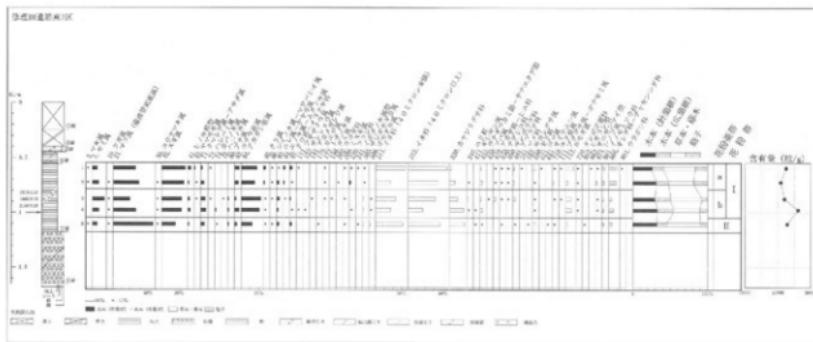


図2 花粉ダイアグラム

### 花粉分帯

花粉分析結果を基に局地花粉帯を設定した。以下に各花粉帯（花粉化石群集）の特徴を示す。また、花粉化石群集の変遷を明確にするために、下位から上位に向かって記載を行う。

#### (1) II 帯：試料No.5

マツ属（複維管束亜属）が卓越し、スギ属、アカガシ亜属を伴う。また、草本花粉ではイネ科（40ミクロン未満）、イネ科（40ミクロン以上）、カヤツリグサ科が高率を示す。

#### (2) I 帯：試料No.4～1

マツ属（複維管束亜属）、スギ属、アカガシ亜属が卓越傾向にあるほか、モミ属も特徴的に出現する。これらの出現傾向から b 亜帯（試料No.4、3）と a 亜帯（試料No.1、2）に細分した。下位の b 亜帯では、マツ属（複維管束亜属）とスギ属が共に20%程度を示す。また、栽培種のソバ属が検出された。上部の a 亜帯では、マツ属（複維管束亜属）とスギ属が増加し、アカガシ亜属、モミ属が減少する。草本花粉ではカヤツリグサ科が低率に成るほか、試料No.1ではゴマ属が検出される。

### 5層の堆積時期について

#### (1) 堆積状況の検討

図3に試料採取時の地層観察状況を示す。先に示した花粉帯、亜帯の境界と、破線で示した堆積相の境界が一致する。また、先の年代測定試料は試料No.2と3の間、花粉帯のI帯 a 亜帯と b 亜帯の間に位置していた。これらのことから、5層とされた堆積物が、一度に堆積したものではなく、段階的に堆積したことが推定できる。

一方、試料No.2と3の間（花粉帯のI帯 a 亜帯と b 亜帯の間）で $1315 \pm 20$  yrs BP（飛鳥～奈良時代）、 $1885 \pm 25$  yrs BP（弥生時代後期）、 $2150 \pm 20$  yrs BP（弥生時代前期）と異なる年代値が得られたことは、次の3つの可能性を示唆する。一つは年輪の内側と外側における年代差、二つめは古い時期の遺物が再堆積を繰り返していたとする可能性、更に木材が転用されていた可能性である。

これらの遺物が飛鳥～奈良時代以降に一度に堆積した（あるいは本取り：内側と外側での時代差の影響による）可能性の外、弥生時代前期以降、奈良時代にかけて段階的に堆積していく可能性も示唆している。

## (2) 花粉化石群集からの堆積時期推定

花粉化石群集から堆積時期を推定する場合、栽培種を示準化石（年代指標）として扱う方法と、花粉化石群集の対比から推定する方法がある。

今回の分析では、ソバ、ゴマなどの栽培植物が検出される。ゴマはアフリカ原産で、538年に仏教とともに伝来したと言われている（星川、1992）。一方、島根県内の花粉分析結果（図4）では、出雲平野北部の山持遺跡において、近世の層準から検出されているにすぎない。ゴマの栽培が文化として出雲地方に伝わった時期を近

世と考えると、5層上部は近世以降に堆積した可能性が指摘できる。一方、ソバは中国雲南地方が起源とされている。また、「統日本紀」では養老6年（AD772年）にソバ栽培の奨励が記されている（星川、1992）。このほか那須・山内（1980）は、福井市浜島遺跡の発掘調査に伴う花粉分析で、縄文時代後期に堆積した地層からソバ属花粉を検出している。ソバの検出地は県内でも多く、松江市内では旧玉湯町大野田遺跡で古墳時代中期の層から検出されている。遺物の検出された層準が古墳時代中期以降に堆積したとすると、先の年代測定値に近い値である。

以上の様にソバ属花粉の検出や出土遺物から、試料No.3層準より下位は古墳時代以降、年代測定値からすると飛鳥～奈良時代に堆積したものと推定される。

一方、上位の試料No.1、2層準ではゴマが検出され、出雲地方でのゴマ花粉化石の検出状況から近世以降に堆積した可能性が指摘できる。これに対し、山陰地方中部の花粉化石群集で今回と同様の特徴を示すのは、イネ科帯アカガシ亜属・コナラ亜属帯であり、その時期は弥生時代中期以降中世までとされている（渡辺ほか、2003）。このことを優先すると、試料No.1、2層準は中世以前に堆積したと考えられる。前述のようにゴマの栽培は歴史的に飛鳥時代までさかのぼることから、島根県東部では、飛鳥時代以降に栽培されながらも花粉化石の検出例がないだけとも考えらる。この様に考えると、試料No.1、2層準が（飛鳥～奈良時代以降）中世以前に堆積したと考える方が妥当である。

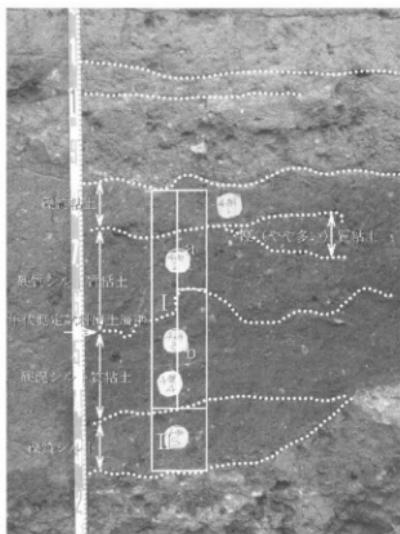


図3 5層内の層相変化と花粉帶

		島根県東部							
		出雲南部		出雲中部		出雲北部		吉道湖東部	
		下古生遺跡	古志遺跡	三田谷一遺跡	中野美保遺跡	大塙遺跡	高岡遺跡	里方本郷遺跡	山持遺跡
時代	現地名								
近代・現代									
近世	江戸								
中世	室町 鎌倉	AD 1500	アラマツ ソバ イネ	ワタ ソラマツ ソバ イネ	ソラマツ ソバ イネ	ワタ ソラマツ ソバ イネ	ソラマツ ソバ イネ	ソラマツ ソバ イネ	ソラマツ ソバ イネ
古代	平安 奈良	AD 1000	ソラマツ ソバ イネ	ソラマツ ソバ イネ	ソラマツ ソバ イネ	ソラマツ ソバ イネ	ソラマツ ソバ イネ	ソラマツ ソバ イネ	ソラマツ ソバ イネ
古墳時代	後期	AD 500	ソラマツ ソバ イネ	ソラマツ ソバ イネ	ソラマツ ソバ イネ	ソラマツ ソバ イネ	ソラマツ ソバ イネ	ソラマツ ソバ イネ	ソラマツ ソバ イネ
弥生時代	中期	AD 1	ソバ イネ	ソバ イネ	ソバ イネ	ソバ イネ	ソバ イネ	ソバ イネ	ソバ イネ
飛鳥時代	前期	BC500	ソバ イネ						

図4 島根県東部地域における栽培植物の検出状況

以下に示す文献から、集成した。

下古生遺跡：渡辺（2001a）、古志遺跡：渡辺（2005b）、中野美保遺跡：渡辺（2004b）、宍丁田遺跡：渡辺（2008a）、藤ヶ森南遺跡：渡辺（1999）、三田谷I遺跡：渡辺正巳（2000b、2000c）、中村ほか（2001）、大塙遺跡：渡辺（2005b）、高岡遺跡：渡辺（2000a）、五反配遺跡：渡辺（2004c、2005a）、里方本郷遺跡：渡辺（2008b）、山持遺跡：渡辺（2007a、2007b、2009c）、大野田遺跡：渡辺（2009a）、西川津遺跡：渡辺（1999a、2001b、2009a）、出雲国府跡：渡辺（2004a）。

## 古環境の推定

### (1) 堆積環境

5層のベースが砂礫層であることから、5層が堆積した凹地は土石流などにより下流がせき止められて形成された可能性が指摘できる。花粉化石群集ではイネ科（40ミクロン未満）、カヤツリグサ科などが比較的高率で検出されるほか、抽水植物のサジオモダカ属、オモダカ属の花粉、濾性植物のキカシグサ属などが検出される。また、イネ科（40ミクロン以上）が検出されるが水田環境下で堆積したとするには割合が低い。これらのことから、5層堆積時の調査地近辺は、土石流などにより下流がせき止められて形成された凹地が周辺に湿地を伴う沼沢地となっていたと考えられる。また、イネ科（40ミクロン以上）の検出や、層準によりソバ属やゴマ属の花粉が検出されることから、近辺でイネや、ソバ、ゴマが栽培され、調査地へ流れ込んだものと考えられる。

### (2) 植生復元

前述のように調査地点には沼沢湿地が広がり、アシなどのイネ科草本や、カヤツリグサ科、キカシグサ属などの湿生植物やサジオモダカ属、オモダカ属などの抽水植物が生育していたと推定される。また近辺では、稲作が営まれたほか、時期によりソバ栽培やゴマ栽培も行われていたと考えられる。

堆積初期のII带の堆積には、土石流などによってできた荒れ地にクロマツ（海岸に近いことから、マツ属（複維管束亜属）をクロマツと推定した。ただし、アカマツの可能性もある。）が進入したと考えられる。背後の山地には、モミを混生したカシ林が広がり、谷筋や扇状地の端部にはスギが小規模な林分を成していたと考えられる。

I带 b亜帯の時期に入るとマツ属（複維管束亜属）が減少し、他のほとんどの樹木花粉は増加する。近辺に生育していたクロマツがなくなり、背後の山地に生育していた樹木が相対的に増加したものと推定できる。草本花粉も増加する傾向にあり、ソバ属花粉が検出されるなど、クロマツ林が開墾され、畠などに変わっていった可能性がある。

a亜帯の時期に入るとマツ属（複維管束亜属）が微増し、モミ属、アカガシ亜属が減少する。背後の山地に入手が入るようになり、カシ林がアカマツ林（里山）に変わり始めたものと推定できる。

## まとめ

修理田遺跡東2区ほかにおけるAMS年代測定、花粉分析の結果、以下のことが推定できた。

- (1) I带 b亜帯までは古墳時代以降、年代測定値からすると飛鳥～奈良時代に堆積した。
- (2) I带 a亜帯は（飛鳥～奈良時代以降）中世以前に堆積した。
- (3) 5層は沼沢地内で堆積し、アシなどのイネ科草本や、カヤツリグサ科、キカシグサ属などの湿生植物やサジオモダカ属、オモダカ属などの抽水植物が生育していたと推定される。
- (4) 調査地近辺では稲作が行われ、時期によりソバやゴマも栽培されていたと考えられる。
- (5) 5層の堆積初期には、近辺にクロマツ（林）が生育していたが、開墾され畠地へ変化した。背後の山地にはモミを混生するカシ林が広がり、谷沿いなどにスギが生育していたが、次第にアカマツ林（里山）へ変わっていった。

## 引用文献

- 島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塙倉尚義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司(1985)木材の構造. 276p., 文永堂, 東京.
- 中村 鮎(1974)イネ科花粉について、とくにイネを中心として、第四紀研究, 13, 187-197.
- 中村唯史・渡辺正巳・沢井祐希(2001)出雲市大津町来原地区的古森根復元一「止屋瀬」伝承の地質的検討一、斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書XII, 1-18, 国土交通省中国地方整備局山陰工事事務所・島根県教育委員会.
- 那須季博・山内 文(1980)織文後期・晩期低湿地遺跡における古植生の復元: 濱井市浜島遺跡、青森県鬼ヶ丘遺跡の調査例. 自然科学的手法による遺跡・古文化財等の研究—総括報告書一, 158-171, 文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班.
- 黒川清彦(1992)改訂増補栽培植物の起源と伝播、p.311, 二宮書店, 東京.
- 渡辺正巳(1999a)藤ヶ森南遺跡花粉、プランツ・オーバール分析、藤ヶ森南遺跡-出雲郵便局移転に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一, 31-37, 出雲市教育委員会.
- 渡辺正巳(1999b)西川津遺跡96、97年度調査における花粉分析、西川津遺跡VI-1頃の川城河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一, 321-328, 島根県教育委員会
- 渡辺正巳(2000a)高岡遺跡における花粉及びプランツオーバール分析、高岡遺跡-出雲ジュンテンドー敷地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一, 33-39, 出雲市教育委員会.
- 渡辺正巳(2000b)三田谷I遺跡c区発掘調査に係る花粉分析、三田谷I遺跡-塩治299号線道路新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一, 65-70, 出雲市教育委員会.

- 渡辺正巳 (2000c) 三田谷 I 遺跡94・95年度発掘調査に係る花粉分析、三田谷 I 遺跡(vol. 3) -斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IX-, 117-122, 建設省中国地方建設局・島根県教育委員会。
- 渡辺正巳 (2001a) 下吉志遺跡発掘調査に伴う花粉分析等調査、一般県道多伎江南出雲線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書下吉志遺跡一本編-, 472-485, 出雲市教育委員会。
- 渡辺正巳 (2001b) 西川津遺跡における花粉組成変遷と周辺地域の環境変遷、朝潮川広域河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第13冊西川津遺跡, 25-46, 島根県教育庁埋蔵文化財調査センター。
- 渡辺正巳 (2004a) 出雲国府跡発掘調査に係る花粉分析、史跡出雲国府跡, 2, 112-115, 島根県教育委員会。
- 渡辺正巳 (2004b) 中野美保遺跡発掘調査に係る自然科学分析、中野美保遺跡, 161-177, 国土交通省中国地方整備局・島根県教育委員会。
- 渡辺正巳 (2004c) 五反配遺跡発掘調査における自然科学分析、五反配遺跡, 15-22, 島根県教育委員会。
- 渡辺正巳 (2005a) 五反配遺跡発掘調査における自然科学分析、五反配遺跡, 28-38, 島根県教育委員会。
- 渡辺正巳 (2005b) 古志遺跡発掘調査に係る自然科学分析、古志遺跡, 78-82, 出雲山教育委員会。
- 渡辺正巳 (2007a) 山持遺跡T45、II-3区、II-4区及びIII-2区における自然科学分析、山持遺跡II・III区(Vol. 2), 283-303, 島根県埋蔵文化財調査センター。
- 渡辺正巳 (2007b) 山持遺跡IV区発掘調査にかかる耕作土壤調査、山持遺跡Vol. 3 (IV区), 213-228, 島根県教育委員会。
- 渡辺正巳 (2008a) 佐丁田遺跡発掘調査に係る花粉分析及びAMS年代測定、出雲市の文化財報告3佐丁田遺跡(2次調査), 67-73, 出雲市教育委員会。
- 渡辺正巳 (2008b) 里方本郷遺跡の自然科学分析、里方本郷遺跡・山持遺跡I (5区・7区), 157-168, 島根県教育委員会。
- 渡辺正巳 (2009a) 山陰地方における完新世の花粉層序と古環境、島根大学博士論文。
- 渡辺正巳 (2009b) 大塚遺跡発掘調査に伴う微化石分析、大塚遺跡, 25-39,
- 渡辺正巳 (2009c) 山持遺跡6区発掘調査に伴う自然科学分析、山持遺跡Vol. 5 (6区), 275-289, 島根県教育委員会。
- 渡辺正巳・佐伯純也・平木裕子 (2003) 日久美遺跡発掘調査における花粉層序の成果、島歴史学会誌, 7, 1-9.
- 渡辺正巳・石賀裕明 (2008) 島根県西部益田平野における過去6400年間の環境変遷、植生史研究, 16(1), 3-10.

## 第5章 結語（第62図 千酌小字図）

平成19年度から21年度の3年間をかけ実施した発掘調査は、ほ場整備工事により切土される水田のみを調査対象としているので、千酌の歴史を物語るには、資料的に十分ではないが、それでも概観的に語ることは可能であろう。したがって、ここでは検出された数少ない遺構の考察もまじえながら、遺物を中心としてこの地域を考えてみたい。

遺物の出土破片総数は、19,109片と非常に多いが、摩滅したものが98%以上を占めていた。そのなかで縄文時代の土器は、晚期の突帯文上器2片でいずれも旧千酌小学校北の第9調査区から出土した。この第9調査区は、土層の堆積状況により旧河道の一部と考えられるが。その旧河道中の遺物である。残念ながら、採集遺物であるが、葉ア多遺跡でも、調査中に晚期の土器が発見されているので、出畠川上流域や葉ア多を中心とする微高地で縄文晚期の生活があったものと考えられる。なお、松江市教育委員会文化財課が実施した試掘調査でも、晚期の土器の細片が確認されている。

弥生時代前期～中期の遺物は少ないが、後期の遺物出土量は、飛躍的に増加する。ただし、前期のものも試掘調査で細片が確認されているので、この地域での人々の生活は、弥生時代前期から後期まで連続と続いていると考えることができる。遺構としては、千酌太田遺跡の竪穴住居や中殿遺跡のSX01のように川岸をなんらかの目的で利用したものがあるが、これらの遺構は、千酌川を挟んで山際の微高地に相対して所在している。遺物から同時期の遺跡と考えられ、修理田遺跡（東-3区）からも弥生時代後期後葉から古墳時代前期にかけての土器が出土しているので、この時期の居住地は、数カ所の微高地に分散していたとも考えられる。

古墳時代は、集落の丘陵尾根を縱断するように、岩山古墳群（7基）と葉ア多一号墳、二号墳が造られた時代であるが、この時期の遺構は残念ながら検出されなかった。しかし、遺物はいずれの調査区からも出土している。特に19年度の調査では、最も北に所在する第10調査区からまとまって出土しているので、前時代の居住地を引き継ぎながら、更に北にも拡がっていったものと思われる。つまり、低地を取り巻くように集落が形成されていたのではないかと想像される。

奈良～平安時代は、『出雲國風土記』に記載された「千酌浜。広さ一里六十歩あり。〔東に松林、南の方に駅家、北の方に百姓の家あり。〕」の時代である。この中の「百姓の家」が浜の北にあったとすれば、小字名「土井」（第62図参照）あたりが比定できる。第10調査区の出土遺物も古墳時代～奈良時代なので、時期的にも記載と合致している。なお、この「土井」や「出畠」（第62図参照）では、水田の耕作土中や畑から須恵器が採集できるが、切り土工事の施行地ではないため調査できなかつたのが残念であった。また、第1、5調査区からは、暗渠施設が検出されたが、伴出遺物から第1調査区については、中世以降、第5調査区については、古墳時代後期以降の施設と考えられ、条里制との関連も想定することができる。しかし、これらの暗渠施設の他は、条里制の痕跡を示すような畦畔等を検出することは出来なかった。なお、渡邊氏の年代測定では、暗渠に使用した木材は、弥生時代中期のものというデータも提出されている（第4章 特論 1 千酌条里制遺跡他発掘調査に伴う自然化学分析）。

**千鶴条里制遺跡他発掘調査 調査概要**

20年度の中殿遺跡の調査では、掘立柱建物1棟と杭列を検出した。時期的には、9世紀中頃以降の遺物が柱穴から出土しているので、この時期以降の建物であろう。渡邊正巳氏の分析によれば、奈良時代～平安時代前半というデータが提出されている（第4章 特論 中殿遺跡発掘調査に伴う自然科学分析）。なお、

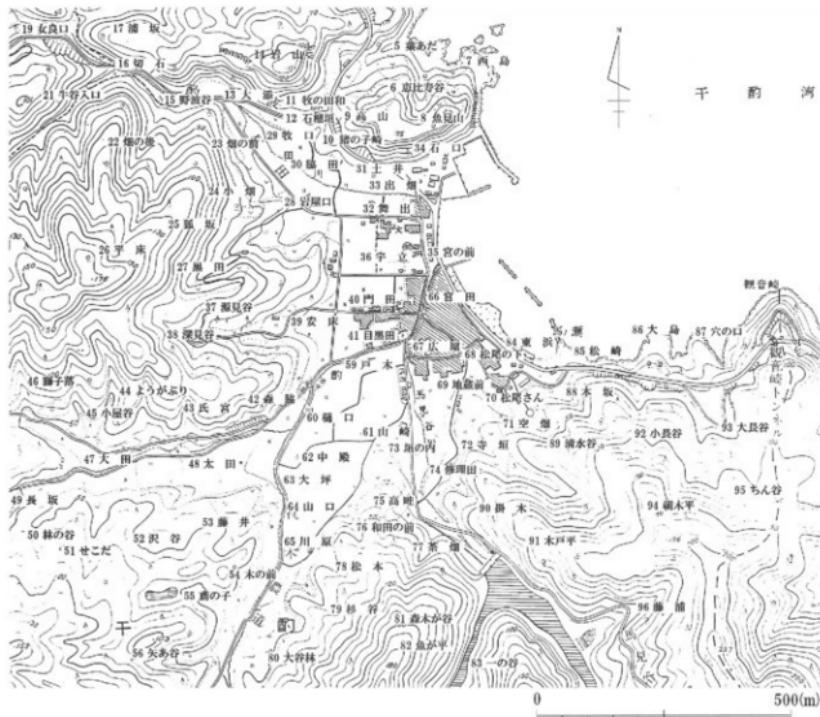
同じ層位・標高から検出された杭列も、この建物

と関連するものと考えられ、同時に「駅家」が所在した時に、これらの遺構も存在していたと考えることが出来る。

修理田遺跡の調査では、遺構の検出はなかったが、遺物は多数出土している。遺物の中心的な時期は、7世紀末～8世紀代で、概ね「駅家」の時代のものと考えることが出来る。「托」や「獸脚」など集落遺跡では、あまり出土しないものも含まれていることから、この調査地の周辺に「駅家」跡があった可能性が高くなった。ただし、調査者は調査中に、この地の礫層の広がりや、そのなかに含まれる遺物の摩滅の状態から、これらの調査地は、土石流の影響を受けているという感想を持った。渡邊氏の分析（第4章 特論 3. 修理田遺跡発掘調査に伴う自然化学分析）によると、「東2区の土層は、土石流などにより下流がせき止められて形成された可能性」があり、「その形成期間は近世にまで及んでいる」という。また、独立大学法人島根大学 総合理工学部 准教授 酒井 哲弥 氏は現場の土層を見た感想として「小規模な谷も東にあるため、ここからの土石流も受けている可能性が高い。」と述べておられる。これらの意見や、調査成果から「駅家」施設は、①調査地の東の谷の平坦地に所在する。②もともと周辺にあった施設が土石流等の被害を受けて流出し、そのため遺物や礫が堆積した。したがって、場所は異なるものの、土石流の堆積層の下に、遺構の一部が残されている。この2つのいずれかではないかと考えている。

何れにしても、周辺に「駅家」施設が所在する可能性は高く、12世紀頃の輸入白磁や青磁（龍泉窯）も出土しているので、平安時代末まで、「駅家」施設が機能していたとも考えることができる。

調査区名称	調査区名	遺物破片数	遺物の年代	検出された遺構	調査面積 (m <sup>2</sup> )
条里制遺跡他 (北工区の調査)	1~4, 16, 17	122	古代～中世	礎石施設	557.16
	5~7, 18, 19	41	古墳時代～中世	礎石施設	
	8~10, 11, 20	1,222	古代		
	12~15	52	古代～近世		
	小計	1,437			
中殿遺跡	平成19年度調査 1区	255	弥生後期～古墳時代後期	遺構なし	143.83
	2区	69	弥生後期～古墳時代後期		
	3区	22	弥生後期～古墳時代中期		
	4区	613	弥生後期～古墳時代中期		
	南-A	2,417	古墳後期～古墳時代前期	SBO1、柱列	
平成20年度調査 南-B	南-B	60	弥生後期～古墳時代前期	遺構なし	563.5
	南-C	4,913	弥生後期～古墳時代前期	SX01	
	小計	8,049			
修理田遺跡	1区	3,846	奈良時代～平安時代	遺構なし	202.87
	2区	5,125	奈良時代～平安時代		
	3区	352	奈良時代		
	小計	9,323			
地蔵前遺跡		97	古代～中世	遺構なし	30
<b>総計</b>		<b>19,109</b>			<b>1497.36</b>



千鶴小字読み一覧

%	表記	%	表記	%	読み	%	表記	%	読み
5	鬼子だ	12	ハマグ	32	舞出	マイダ	19	ジ木	トギ
6	森山寺谷	13	ミヤシタ	33	山口	ヤマガ	20	ヒグチ	ヒガツハマ
7	西島	14	シナシ	34	石は	イシハ	21	山崎	ヤマザキ
8	鳥見田	15	オタカ	35	寅の山	ヤマノサカ	22	中嶺	ナカミツ
9	高山	16	タカヤマ	36	宇立	ウタチ	23	大洋	オータボ
10	猪の子橋	17	イロザキ	37	瀬見谷	シゼミニ	24	ヤマグチ	シマグチ
11	牧の田和	18	マコトヲ	38	瀬見谷	シゼミニ	25	地本	カケホ
12	石垣城	19	ザクシガシ	39	舞東	マイテ	26	宮田	ミヤダ
13	大浦	20	オオミズ	40	門田	モダ	27	大平	ヒロヤ
14	吉山	21	イワヤマ	41	日黒田	ミヅゲタ	28	福の下	フモトノシ
15	野瀬谷	22	ノンダ	42	森屋	モリヤ	29	地藏面	ジジノエ
16	里石	23	キリ	43	宮代	オジヤ	30	船込さん	マツオサ
17	鹿廻	24	ウラカ	44	ようがぶり	ヨガブリ	31	空館	ソバキヤ
18	女鳥口	25	メタチ	45	小山谷	コヤマニ	32	寺坂	トガ
21	牛音入	26	ゼンジタ	46	舞子	シゼ	33	寺尾	トガ
22	猪の海	27	ハタクシタ	47	大田	オーダ	34	山内	カシタ
23	猪の塚	28	ハタクズタ	48	太田	ジャンタ	35	山内	カシタ
24	小塙	29	コハタ	49	眞坂	ナガハカ	36	御田の前	ワタノマエ
25	眞坂	30	キタカ	50	森の谷	ハマシタ	37	高畠	カシバタ
26	平塙	31	フタカ	51	せごだ	セゴダ	38	船本	マツホ
27	黒山	32	カタマ	52	豊谷	ツワタニ	39	船谷	マツタニ
28	眞坂	33	イワタカ	53	森谷	ツワタニ	40	大谷林	オーデバヤシ
29	牧口	34	マキタ	54	木の坂	キモス	41	森木谷	マツキタ
30	眞坂	55	ミタカ	55	山の手	トビコ	42	森の平	マツキタ
31	土井	56	ダキ	56	矢あ谷	ヤーガ	43	一の谷	イチノタ

第62図 千鶴小字図

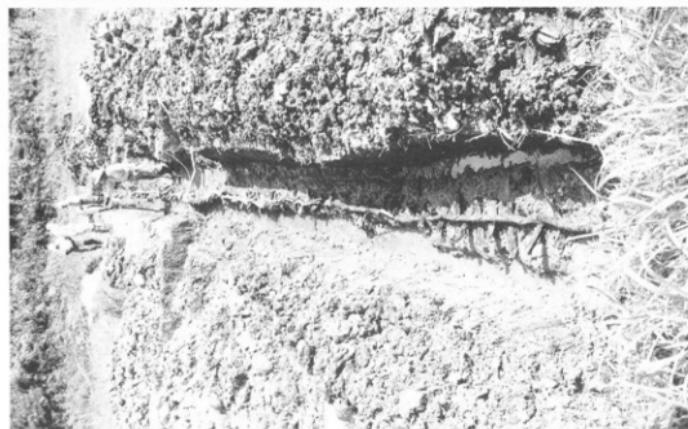
岩山古墳群から見る  
千駄の水田地帯



第1調査区暗渠施設  
検出状況  
(東から西を撮影)



第5調査区暗渠施設  
検出作業風景  
(南から北を撮影)



## 図版 11

第10調査区 (T-10-C)

指導会

(北西から南東を撮影)



第10調査区 (T-10-A)

遺物出土状況



第10調査区 (T-10-C)

完掘状況

第3層（床上下）から掘り込

まれた暗渠施設が見える

(西から東を撮影)



平成19年度中殿遺跡

中殿4区完掘状況

(南から北を撮影)



平成19年度中殿遺跡

遺物出土状況



平成20年度中殿遺跡

調査風景

